



Title	「も」の多様性に関する統語論的研究
Author(s)	榎原, 実香
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2018 年度博士学位申請論文

「も」の多様性に関する統語論的研究

大阪大学大学院言語文化研究科

言語文化専攻

榎原実香

謝辞

本論文を執筆するにあたり、各方面様々な方に支えていただきました。言うまでもなく、本稿のいかなる不備や不足も筆者の責任です。

主査をご担当くださった由本陽子先生、ならびに副査を務めてくださった越智正男先生と宮本陽一先生には、多くの意義深いご指導を賜るとともに、常に温かいお心遣いと励ましを頂きました。また、筆者が日本語の研究をはじめのきっかけを与えてくださった三原健一先生には、博士課程に入ってから研究に関する建設的なご指導や励ましを賜りました。本研究は、先生方のご指導とご支援があつてこそ成り立ったものであり、ここに心よりお礼申し上げます。

様々な学会や研究会におきましては、恵まれた環境で貴重な学びと研究成果発表の機会を与えていただき、かけがえのないご指導や励ましを賜りました。また、言語文化研究科・文学研究科所属の先生方、修了生、院生の皆様には、学内での研究報告会や講義、意見交換の場などを通じ、多様な視点から有益なご指導とご助言を頂きました。お世話になった皆様と、研究活動の場をご支援くださった先生方、研究仲間の皆様に、ここで改めてお礼申し上げます。

最後に、筆者を長い間支えてくれた家族や友人に、この場を借りて感謝を申し上げます。

目次

第 1 章	はじめに	1
1.1.	日本語学における「も」	2
1.1.1.	係助詞	2
1.1.2.	とりたて詞	4
1.1.3.	考察の対象	6
1.2.	「も」の意味分類	7
1.2.1.	累加の「も」	12
1.2.2.	極限の「も」	14
1.2.3.	ぼかしの「も」	20
1.2.4.	早い時期を表す「も」	26
1.2.5.	当たり前の「も」	26
1.2.6.	確定回避の「も」	27
1.2.7.	まとめ	28
第 2 章	理論的枠組み	30
2.1.	「も」の統語論的特徴	30
2.2.	付加対象	31
2.3.	生起階層	34
2.4.	一致	36
2.4.1.	項削除	36
2.4.2.	助詞残留	40
2.5.	「も」の焦点と作用域	47
2.5.1.	生成文法における作用域	47
2.5.2.	Kuroda (1965)	49
2.5.3.	青柳 (2006)	50
2.5.4.	「も」による焦点	53
2.5.5.	「も」による焦点の拡張	55
2.6.	多重排出モデル	56
第 3 章	「も」の階層構造上の生起位置	57

3.1.	累加の「も」の付加対象と階層	57
3.2.	極限の「も」の付加対象と階層	61
3.2.1.	不定語と結びつく「も」の付加対象と階層.....	61
3.2.2.	数量表現と結びつく「も」の付加対象と階層	64
3.3.	ぼかしの「も」の付加対象と階層	73
3.3.1.	(ア) の「も」の属する階層	75
3.3.2.	(イ) の「も」の属する階層	75
3.3.3.	(ウ) の「も」の属する階層	76
3.3.4.	ぼかしの「も」の付加対象.....	79
3.4.	まとめ	80
第 4 章	「も」による一致現象	82
4.1.	情報構造	82
4.2.	情報構成にかかわる素性の一致	87
4.3.	累加の「も」による一致	89
4.4.	極限の「も」による一致	91
4.4.1.	不定語と「も」との一致	91
4.4.2.	数量表現と「も」との一致.....	97
4.5.	ぼかしの「も」による一致	98
4.5.1.	係り結びと一致.....	100
4.5.2.	C 類ぼかしの「も」による呼応と一致.....	101
4.5.3.	A 類、B 類ぼかしの「も」による呼応と一致	103
4.6.	まとめ	105
第 5 章	「も」による作用域	107
5.1.	累加の「も」による作用域	107
5.2.	極限の「も」による作用域	110
5.2.1.	不定語+「も」による作用域.....	110
5.2.2.	数量表現+「も」による作用域.....	114
5.3.	ぼかしの「も」による作用域	117
5.3.1.	A 類ぼかしの「も」による作用域.....	117

5.3.2. B類ぼかしの「も」による作用域	120
5.3.3. C類ぼかしの「も」による作用域	122
5.4. まとめ	126
第6章 否定呼応表現について	128
6.1. 否定呼応表現としての不定語+「も」	128
6.2. 「誰も／何も」に関する先行研究	130
6.3. 否定辞と呼応する「も」の付加対象	133
6.4. 否定呼応表現における階層と一致	134
6.5. 否定呼応表現と「が」の併合	135
6.6. まとめ	136
第7章 周辺的な「も」の意味と統語構造	138
7.1. 早い時期を表す「も」	138
7.2. 当たり前の「も」	140
第8章 まとめと今後の展望	142
8.1. 「も」の用法の再解釈	145
8.2. 今後の展望	150
参考文献	151

第1章はじめに

現代日本語の「も」にかかわる現象は、日本語学、統語論、意味論、語用論にわたって広く議論されてきた。日本語学では、「も」は係助詞（山田 1936、青柳 2006 等）、とりたての助詞（沼田 1986、澤田 2007 等）などとして扱われ、その中でも特に多様な意味・用法が指摘されている要素である。以下に、代表的な「も」の用法を挙げる。

- (1) 太郎も試験に落ちた。
- (2) 東大生も試験に落ちた。
- (3) 3 人も試験に落ちた。
- (4) どの学生も試験に落ちた。
- (5) 太郎も試験に落ちるかあ。

理論的な分野においては、「も」の用法のごく一部を考察の対象としている研究が多く、「も」の統語論的特徴の全容はまだ明らかではない。一方、日本語学においては、「も」個々の特徴に関する記述や基本の「も」と周辺的な「も」との関連性を明らかにすることを目的としているものが多いが、「も」の多様性の体系化、関連性の解明には議論の余地がある。本研究は、多様な側面を見せる「も」を全て同じ「も」を起源とする現象であるとし、統語論的な観点からそれぞれの「も」の特徴を明らかにすることで、日本語学と理論言語学の知見を結びつけることを目的とする。まず、本章では、日本語学における知見から現代日本語の「も」がどのように位置付けられてきたかを概観し、「も」の基本的性質から本稿における「も」の各用法をどのように扱うべきかを述べる。第 2 章では、「も」の統語論的な現象を分析する上で必要となる理論的な枠組みを概観し、「も」のどのような現象がどのような理論と結びつくかについて議論する。第 3 章では、各「も」の統語論的な特徴から「も」の付加対象、階層構造上の生起位置を提案する。第 4 章では、「も」がかかわる一致現象 (Agreement) に着目し、統語論においてどのような要素とどのように一致が生じているかを、提案した各生起位置から説明する。第 5 章では、「も」の意味として記述されてき

たものを作用域と結びつけ、各生起位置、一致関係から、「も」の用法がどのように説明されるかを論じる。第6章では、「誰も／何も」といった否定呼応表現 (Negative Concord Item) による現象が、第4章で議論した一致によって説明されることを示す。第7章では、周辺の「も」の用法が第5章までの議論から「も」の体系の中に位置付けられることを示す。

1.1. 日本語学における「も」

現代日本語の「も」の意味や用法については、山田孝雄をはじめ多くの研究者によって論じられてきた。本節では、日本語学において得られた知見から現代日本語の「も」の位置付けについて検討し、本稿における立場について述べる。

1.1.1. 係助詞

日本語学における「も」の位置付けとして、大きく「係助詞」として扱われるもの、「とりたて詞」として扱われるものがある。¹「も」は古典語でも見られ、大槻（1897）ではこれを亘爾乎波（てにをは）の中の「第二類 種々ノ語ニツクモノ」として分類している。現代日本語に繋がるものとしては、山田（1908）が「も」を「係助詞」とし、いわゆる「副助詞」と区別している。山田（1936: 472）によると、係助詞は「陳述をなす用言に關係ある語に附属して、その陳述に勢力を及ぼすもの」であり、文語では「は」「も」「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」（および禁止を表す「な」）が、口語では「は」「も」「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」などが係助詞の類の中に含まれるとしている。係助詞の統語論的特徴として、格助詞や副助詞（口語では「ばかり」「まで」「など」「か」「だけ」「ぐらゐ」など）と共起した場合には必ずそれらに後接すること、係助詞同士を共起させることができることなどが挙げられており、そこから係助詞が他と区別されることを説明している。

¹ 「も」は、「は」とともに「題目の助辞（松下 1977, 佐久間 1940）」や、「モダリティ表現（寺村 1981, 益岡 1991）」としても扱われ、現代日本語の「も」にも確かにそれを反映するような特徴が見られるが、それは「係助詞」の文係りとしての一特徴から抽出された分類にすぎず、統語論的な分析を行う上で「係助詞」として扱うことと大きな相違は見られないと考えられる。ただし、「も」・「は」と、他の係助詞との間には以下のように数量表現への付加など顕著な統語論的相違も見られるため、「も」と「は」を他と区別すべき場合も考えられる。

- 1) a. 3 人は来るだろう。
b. 3 人も来るかなあ。
c. *3 人こそくればいいなあ。

- (6) a. お菓子ばかりも食べてはいけない。
 b. *お菓子もばかり食べてはいけない。²
 c. 先生なども二次会に参加する。
 d. *先生もなど二次会に参加する。

また、山田（1908）は、古典語の係助詞は程度副詞や陳述の副詞にも付属できるが、副助詞にはそれができないと述べている。しかし、現代日本語の「も」や「は」は、動詞句副詞には音韻的環境が整えば(7)のように付加可能であるのに対し、程度副詞や陳述の副詞には特定の用法として解釈されない限り、付加が許されない。(8)における「少しも」は「少しも重くない」など否定辞と共起し、数量・程度を強調する用法としてしか解釈されず、(9)における「もし」に後続する「も」は任意的に現れ、同類の仮定条件を加えることを意図していないことから、「も」が自由に生起できるわけではないことがわかる。

- (7) a. 今なら英語を（スラスラとも）ゆっくりとも話せる。
 b. 今なら英語をゆっくりと話せる。
 (8) a. *これは（なかなかも）少しも重いが、女性一人でも持てる。
 b. これは少し重いが、女性一人でも持てる。
 (9) a. #もし、夜遅くなって、もしも誰も来なかったら、帰っていい。^{3 4}
 b. もし、夜遅くなって、もし誰も来なかったら、帰っていい。

² 「*」は、文法的に容認されない文を示す。文の容認度については、筆者及び数人の日本語母語話者による内省や先行研究を参考にし、判断しているが、本稿で示した文の判断に対し、疑問を抱く読者の可能性は捨てきれない。容認できると判断された文であっても計算が困難であると予想される現象については、なるべく実例をあげるようにしたが、容認度の差が問題となる文は、熟考を重ね、より客観的に受け入れられるようなテストを提示できるよう工夫していきたい。

³ 「#」は、意図された用法として容認されにくく語用論的に不適切な文であることを示す記号である。「も」であれば、他の同類の事態を想定しなくてもよい（想定しなければならない）ことを想定する文脈の中で他の同類の事態が想定されなければならない（想定できない）ことを示す際に付記することがある。

⁴ 「少しも」の「も」は、特定の文副詞に任意的に付加することができる「も」の一つであると考えられる。「は」にも同様の現象が見られるが、文副詞にそのような詞が付加できる場合とできない場合があり、また、どのような条件によって付加されるのかが明らかでない。文副詞に付加する助詞に関する考察は、別稿に譲りたい。

さらに、係助詞は格助詞、副助詞、副詞の他、終助詞と同様終止形にも接続できることが特徴的であるというが、山田（1936）も述べているとおり、現代の日本語は「は」や「も」を文末に置くことはできない。

(10) a. 花ざかりすぎもやするとかはづなく井手の山吹うしろめたしも（CHJ『大和物語』951）

b. *蛙が鳴く井手の山吹が気がかり（だ）も

以上から、現代日本語の「も」を係助詞として扱う研究は、古典語の「も」の文係的な性質を踏襲したものであるという見方ができるが、古典語の「係助詞」と現代日本語の「も」や「は」にはいくつかの統語論的相違が見られ、必ずしも古典日本語の「も」と分析が一致するとは限らない。本稿では、このような「も」の歴史的変化を踏まえた上で、「も」の多様性を観察することとする。

1.1.2. とりたて詞

もう一つの大きな枠組みとして、「も」を「とりたて詞」とする研究が挙げられる。「取立て」という語を初めて使用したのは、宮田（1948）である。宮田は従来「係助詞」と呼ばれていたものが「係り結び」の法則にとらわれすぎた名称であること指摘し、「取立て助詞」を次のように定義している。宮田（1948）が取立て助詞として挙げているものは「は」「も」「こそ」「なら」「でも」「さえ」「まで」といった係助詞と副助詞であり、「も」が用いられる取立ての表現をその機能から「追加取立て」という。

(11) 取立て助詞というのは文または句の一部を特に取立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である。（宮田 1948: 178）

また、奥津（1974, 1986）も、係助詞には連用的なはたらきが、また副助詞にも連用的、体言的なはたらきがないため、現代の日本語文法では係助詞と副助詞の大部分はとりたて詞というカテゴリーに統合するべきだとしている。「とりたて詞」の特徴としては、以下のような点が挙げられる。その中で「とりたて詞」である「も」の機能は他の同類の要素との併存を表すということにあり、他と比べ連用修飾句につくという点で「も」の分布は広

いという。

(12) (i) 様々な成分に後続する。

(ii) 文構成に必須ではない。

(iii) 連体修飾文を受ける被修飾名詞の一部になる。

沼田（1984）も、従来の副助詞や係助詞の定義が一定してこなかったことを指摘し、係助詞として扱われてきた現代日本語の「も」や「は」が連体修飾句の中に生起できることから、勢力を及ぼすべき陳述を要求しない点を主張している。沼田（1984: 80）によるとりたて詞の定義は以下のようなものである。

(13) とりたて詞とは、単文中の種々な要素—これを自者と呼ぶ—をとりたて、これに対する当該の単文外の、同類の要素—これを他者と呼ぶ—との論理的関係を示す語である。とりたて詞には、「モ、デモ、サエ、スラ、マデ、ダケ、ノミ、バカリ、シカ、コソ、ナド（ナンカ）、クライ、ハ」が含まれる。

また、寺村（1981, 1991）も、現代日本語に見られる以下のような特徴（本稿では、「焦点性」と呼ぶ）に着目し「も」を「取立て助詞」として扱っている。寺村（1981）は、「取り立て」を(14)のように記述し、生起する位置の多様性などその統語論的な特徴から、副助詞、係助詞を一括した助詞であることを主張している。

(14) 取立て助詞は、文のいろいろな場所で、いろいろな種類の構成要素に付くが、それによって話し手が何を表わそうとしているかという面から見ると、それは、それらの付く要素を「際立たせる」という点を共通の特徴としてもつ（寺村 1981: 66）

寺村（1991）は、「も」の多様性を指摘しながら、「X も P」の基本的な意味機能を「X 以外に P と結びつくものがある」という影を対比させること（本稿では、「累加性」と呼ぶ）にあるとしている。

以上から、「とりたて詞」は累加性、焦点性を有するものとして現代日本語の意味特徴、統語論的な特徴を効率良く捉えたカテゴリーであると考えられる。ただし、以上の議論は

「とりたて詞」の一特徴に焦点を当てたものにすぎず、当該の要素が「周边的」になればなるほど適用されにくくなることがわかる。(15)のような例からは「他者（沼田 1984）」を具体的に想定する必要がなく、上記の規定からは、このような「も」をとりたて詞として認めることができない。そうすると、「も」の中にとりたて詞であるものと、そうでないものがあるというように説明せざるをえないのである。

(15) 太郎もバカだねえ。

本稿では、現代日本語の「も」は未だ係助詞としての意味や機能を有しているものがあるとし、「も」を一概に「とりたて詞」として扱うことはできないと考える。よって、本稿では「も」が「係助詞」であるか「とりたて詞」であるかを定めることを目的としない。主に現代日本語として顕著に現れている「とりたて詞」の累加性、焦点性をもつ「も」を分析の出発点とし、累加の「も」とその周边的な用法との統語論的関連性を考察することで、「も」の周边的用法から、「係助詞」として現代日本語にも残る特性を明らかにしていく。

1.1.3. 考察の対象

現代日本語には、「も」が現れるものの「も」としての独自の機能を失ってしまったと考えられる表現も多く見られる。榎原（2016）では、先行研究より以下のような基準を設け分析の対象を限定している。

- (16) (i) 「も」それ自体は投射しない。
(ii) 「も」がなくても文は成立する。
(iii) 「も」は文中の要素を「とりたて」る。（榎原 2016: 10）

本稿では、「も」をより広く考察対象とする上で、語や句などの表現の後に「も」が認められるものはとりたて詞の「も」に由来しているものであるとする。榎原（2016）では考察の対象外としていた以下のような表現をそれぞれ歴史的に「も」が省略できなくなって

しまったものだとし、できるだけ多様な表現を考察の対象とする。⁵問題となる表現は、以下のようなものである。

・「も」が他の表現と結びつき、慣用的に他の要素と共に「一語」として用いられるようになったもの

- (17) いやしく {も／*Ø} ・・・形式副詞
- (18) と {も／*Ø} すれば ・・・慣用句
- (19) か {も／??Ø} しれない ・・・モダリティ
- (20) で {も／*Ø} ・・・接続詞

・「も」を含んだ句が慣用的に使われるようになる中で間の他の要素が省略されたもの

- (21) a. 負け {も／*Ø} 負け、ボロ負けだ。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 27 より)
 b. 負け、それも負けだ。ボロ負けだ。
- (22) a. 犬 {も／*Ø} 同然の扱いだ。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 27 より)
 b. 犬と言われても同然の扱いだ。
- (23) a. 来る {も／*Ø} 来ない {も／*Ø} あなたの自由
 b. 来るのも来ないのもあなたの自由
- (24) a. ガンバ大阪、先制許す {も／*Ø} 逆転勝利
 b. ガンバ大阪、先制許しても逆転勝利

1.2. 「も」の意味分類

本節では、先行研究で取り上げられている多様な「も」の分類について概観し、本稿における枠組みを提案する。現代日本語のとりたてについて広く記述されている日本語記述文法研究会(編) (2009) では、以下のような「も」が取り上げられているが、必ずしも「も」の意味のみを基準に分類されているわけではなく、形式的な用法も含まれる。

⁵ しかしながら、実際には本稿で述べた各表現の起源は保証できるものではない。また、以下のようななぜ「も」が使用されているか推測できないものも未だ多く残されている。これらに関する考察は、今後の課題とさせていただきたい。

- 2) 今じゃ呼び名も切られの与三よ (尾上 2014: 621)
- 3) 歌も楽しや東京キッド (尾上 2014: 621)

・累加を表す「も」:「累加のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表すことである。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 19)」

(25) わたしは学生です。太郎も学生です。

・極限を表す「も」:「極限のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を表すことである。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 87)」

(26) あの 86 歳のおじいちゃんも学生です。

(27) おじいちゃんは週に 5 回も飲みに行きます。

(28) どんなに完璧に見える人も失敗することはある。

・ぼかしを表す「も」:「ぼかしのとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のものがほかにあることを漠然と示すことにより、文全体の意味をやわらげることである。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 137)」

(29) 1 月ももうすぐ終わる。

(30) お前も抜け目ないな。

・逆接を表す「も」

(31) 3 塁を回った田中はそのままホームを狙うも失敗。2 回裏は無得点に終わった。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 27)

・副詞の一部になる「も」

(32) 今年の我が校は惜しくも初戦敗退した。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 27 より)

・もっとも早い時期を表す「も」:「「も」は、時点を表す副詞的成分をとりたてて、その事態が実現しそうなもっとも早い時期を表す場合がある。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)」

(33) 報告書は 3 日にもも完成させてお送りいたします。

・形式的な「も」:「「も」には、累加、極限、ぼかしのいずれとも言えない、形式的なもの

もある。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)」

(34) ビールよりも日本酒の方が好きだ。

また、定延 (1995) は、「も」に多義性が生じる要因に関して、人間の心的プロセスから二方向に意味拡張するという過程を主張している。まず、「知識のまとめ上げ」というプロセスでは、類似した事態の個別具体的な知識から一般抽象的な知識をまとめていくプロセスを経て、基本的な「も」(=累加の「も」) から、色々の「も」(累加される要素が明示されていないが暗示できるもの)、通念の「も」(=ぼかしの「も」)、当たり前の「も」へと、意味が拡張していくと述べている。また、実現可能性の高低を類似している事態と比較する「事態実現可能性の推し測り」というプロセスを経て、基本的な「も」(=累加の「も」) から意外の「も」(=極限の「も」) や確定回避の「も」(話者が実現可能性が低いと想像するような場面で使われるもの) へと派生すると述べている。

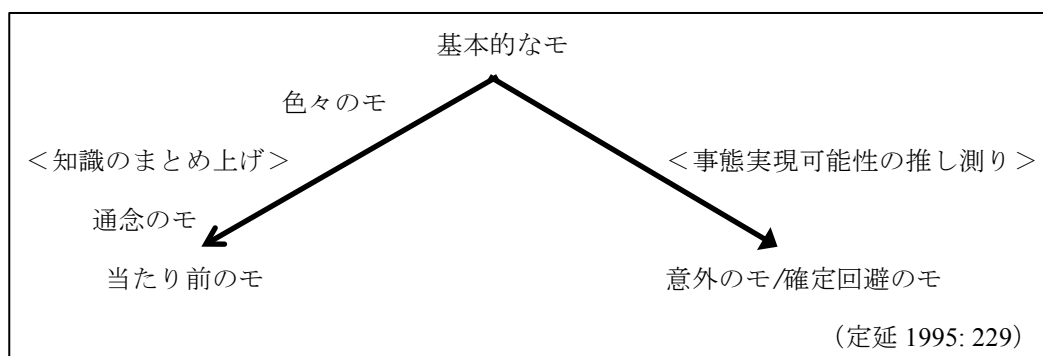


図 1 定延 (1995) による「も」の派生

基本的な「も」と色々の「も」との違いは「も」が付加された要素と同類の要素を想定させる先行文の有無によるものである。そのため、色々の「も」を基本的な「も」と異なる意味として捉える必要はないと考えられる。他、日本語記述文法研究会(編) (2009) の分類と共通する「も」が取り上げられており、当たり前の「も」と確定回避の「も」が新たに検討すべき「も」である。

・当たり前の「も」

(35) 交通費ナシで時給 300 円でしょ。学生たちもヤル気なくしますよ。(定延 1995: 236)

・確定回避の「も」

(36) あの時、たしか学生が 10 人も来ていたかなあ。(定延 1995: 243)

また、沼田 (2009: 37-43) は、とりたて詞の意味論的特徴として、次の 4 点を挙げており、(37)、(38)のように説明される。

(37) (i) 自者と他者

「自者」とは、とりたて詞がとりたてる文中の要素であり、「他者」はそれに端的に対比される「自者」以外の要素である。(沼田 2009: 37)

(ii) 主張と含み

「主張」はとりたて詞が明示する意味であり、「含み」はとりたて詞が暗示する意味である。(沼田 2009: 38)

(iii) 肯定と否定

肯定・否定は、文が表す事柄が真であるか偽であるかによって決まる。(沼田 2009: 39 より)

(iv) 断定と想定

とりたて詞を表す意味には、真偽を断定せず、話し手や聞き手の「自者」・「他者」に対する「想定」を表すものがある。これに対するものとして、「断定」という特徴が立てられる。(沼田 2009: 41-42 より)

(38) とりたて詞は、文中の種々な要素を「自者」とし、「自者」と範列的に対立する他の要素を「他者」とする。そして、「自者」について明示される文である「主張」と、「他者」について暗示される文である「含み」を同時に示し、両者の論理的関係を示す。その論理的関係は、「断定」と「想定」、「肯定」と「否定」のような対立する概念で表される。(沼田 2009: 121-122)

沼田 (2009) によると、とりたて詞個々の意味がこれらの特徴によって決まるという。本稿では、「含み」における「他者」が最も「とりたて詞」としての「も」の特徴が現れる概念であり、「も」の多様性には、「他者」の決定がかかわると考える。ただし、「も」の中には(37iii)のように肯定か否定か、(37iv)のように断定か想定かといった違いがほとんど見

られない。よって、(37iii)と(37iv)については本稿ではかかわらないと考え、本稿で検討しないこととする。

また、「も」に関しては、主に以下の三種類⁶が扱われ、以下のように「二次特徴」としてそれぞれが特徴付けられている。「含み」において「断定」される「他者」がいわゆる「想定される他の同類の事態」である。

(39) も₁：累加（沼田 2009: 122）

主張：断定・自者-肯定

含み：断定・他者-肯定

二次特徴：「含み」は前提（沼田 2009: 129 より）

(40) も₂：意外（沼田 2009: 122）

主張：断定・自者-肯定

含み：断定・他者-肯定／自者-否定（沼田 2009: 135 より）

(41) も₃：柔らげ（不定用法）

主張：断定・自者-肯定

含み：断定・他者-肯定

二次特徴：他者は不定（沼田 2009: 130 より）

本稿では、まず周辺の用法を含め多様な「も」を分析するにあたり、「も」の特性である累加性に着目する。「も」によってとりたてられる要素と集合や含意される同類の要素との関係を(42)のように表す。(42)は、ある性質や命題 H を前提とする文脈の中で「x も F」という発話がなされると、H によって定められる集合（同類の[y1]、[y2]をもつ）に x が加わるということを示す。(43)や(44)であれば、「太郎」、「東大生」以外に「試験に落ちた」人が「他者」として「も」によって示されるということになる。（実際にとりたてられる要素に下線を引き、便宜上左から起こりうる可能性が高いと考えられる要素を想定するが、その順序は絶対的でない。）

⁶ 沼田（2009）では柔らげの「も₃」を他者が具体的に想定されない累加の「も₁」の「不定用法」として「も₁」に含めて考えている。しかし、後に述べるように、これらは統語論的に異なった振る舞いを見せるため、本稿では異なる種類のものとして扱う。

(42) $H = \{y_1, x, y_2, \dots\}$

(43) a. 太郎も試験に落ちた。(累加 =(1))

b. 試験に落ちた = {花子, 太郎, 次郎,}

(44) a. 東大生も試験に落ちた。(極限 =(2))

b. 試験に落ちた = {小学生, 大人, 東大生}

この「他者」の想定はどの「も」によっても同様に生じるわけではない。「も」が見られても(45)では「どの学生」以外の人(大人など)、(46)では「3人」以外の人などは想定されにくい。また、(47)も、「も」によって「太郎」以外の人々が想定される必要はなく、全ての「も」が他者を直接に表現する機能をもつわけではない。よって、各「も」の意味の特徴が想定される他者の集合として現れるということを仮定し、議論を進める。

(45) a. どの学生も試験に落ちた。(極限 =(3))

b. 試験に落ちた = {どの学生, *大人}

(46) a. 3人も試験に落ちた。(極限 =(4))

b. 試験に落ちた = {3人, *3人以外}

(47) a. 太郎も試験に落ちたかあ。(ぼかし =(5))

b. 試験に落ちた = {太郎, ??花子}

以上、本節では日本語記述文法研究会(編)(2009)による「も」の記述を土台として「も」がどのような「他者」を想定させるかに注目し、「も」を大別する。

1.2.1. 累加の「も」

「累加」とは、日本語記述文法研究会(編)(2009: 19)によれば、「文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表すことであり、「同類のほかのものは、明示される場合と明示されない場合がある」という。また岡野(2010, 2014)によれば、他の同類の事態である他者を想定させるものと、とりたてたものの属する集合を想定させるものが存在するという。しかし、それは先行文において明示される箇所が異なるということにすぎず、「も」が現れると基本的には他者、それを含有する集合のどちらも想定される。

(48) 先行文脈：a. 森さんは小児科医です。

b. 森さんの奥さんも小児科医です。(寺村 1991: 75 より)

小児科医である森さん一家 = {森さん, 森さんの奥さん, 森さんの息子,}

(49) 先行文脈：a. 森さん一家はみな小児科医です。

b. 森さんの奥さんも小児科医です。

小児科医である森さん一家 = {森さん, 森さんの奥さん, 森さんの息子,}

累加の「も」は、「も」がとりたてた対象と他の同類のものを想起させる機能をもつ。当然文脈によって含意されるものは異なるが、(50)では「紅ショウガ」の他に例えば「たこ」「天かす」などを入れることが前提となっており、「たこ焼きに入れるもの」という集合に「紅ショウガ」が加えられることを表している。(51)では「プロジェクト担当者」、(52)では「東京」などが含意されうる。

(50) a. 次郎の家ではたこ焼きに紅ショウガも入れるらしい。(榎原 2016: 15)

b. たこ焼きに入れる = {たこ, 紅ショウガ, 天かす,}

(51) a. 田中も会議に出席する。(榎原 2016: 15 より)

b. 会議に出席する = {プロジェクト担当者, 田中, 課長,}

(52) a. 大阪でも名古屋でもコンサートが行われる。(榎原 2016: 15)

b. コンサートが行われる = {東京, 大阪, 名古屋,}

さらに、他言語では「累加の意味を表す不変化詞が、ある文脈では、意外性を表示できる (澤田 2007: 13)」場合があることが指摘されている。現代日本語の「も」においても、(53)-(55)のように累加される可能性が低いと考えられるものがとりたての対象となった場合、文脈から「意外性」を得ることができる。

(53) a. 大阪ではたこ焼きにこんにゃくも入れるの！？(榎原 2016: 15)

b. たこ焼きに入れる = {たこ, 天かす, こんにゃく}

(54) a. 社長も会議に出席するんだ！(榎原 2016: 15)

b. 会議に出席する = {プロジェクト担当者, 課長, 社長}

(55) a. 沖縄でもコンサートが行われるんだって！（榎原 2016: 15）

b. コンサートが行われる = {東京, 大阪, 名古屋, 沖縄}

以上から、累加の「も」であっても、「も」によって含意されるものと「も」がとりたてる要素との同類性が想定されにくい場合、意外性が生じると考えられる。それゆえ、本稿では現代日本語の「も」の基本的な意味は累加であり、副次的に意外性を付随させることができるという立場をとりながら、他の意味機能についても考察していく。

1.2.2. 極限の「も」

本節にて取り上げる極限の「も」は、意外の「も」として扱われることもあり（定延 1995、沼田 2009 等）、「極限」と「意外性」の両概念は混同されることも多々ある。日本語記述文法研究会（編）（2009: 87）では、この「も」を「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示す」と説明している。本稿では極限の「も」を、起こりうる可能性の高さなどスケール性のあるものを想定し、とりたての対象がその端に位置するものであることを示すものとして扱う。累加の「も」と極限の「も」との相関性を検討すると、極限の「も」として解釈されやすいいずれの例も、(56)であれば「大人が通り抜けられない」、(57)なら「犬が木から落ちる」、(58)なら「友人を頼らない」などの同類の要素が必ず想定されることがわかる。つまり、具体的な「同類のほかのもの」が挙げられるという点では、累加の「も」と極限の「も」との違いは見られないということである。それゆえ、「同類のものが具体的に含意される」ということを「も」の基本とすると、極限の「も」は、累加の「も」の中でも極端なものを表す下位分類として位置付けることができる。

(56) a. この穴は子どもも通り抜けられない。（子どもは小さい）（榎原 2016: 16）

b. 通り抜けられない = {大人, 高校生, 子ども}

(57) a. 猿も木から落ちる。（猿は木登りが得意）（榎原 2016: 16）

b. 木から落ちる = {犬, 猫, 猿}

(58) a. 太郎は親をも頼らずに生活している。（親が一番頼りやすい）（榎原 2016: 16）

b. 頼らない = {同僚, 友人, 親}

「も」がもつ「意外性」に関しては、「文中の要素をとりたて、通常はその事態と結びつ

きそうもないその要素が、その事態と結びつくことの意外さ（日本語記述文法研究会(編) 2009: 103)」が関係しており、極限の「も」として現れる「も」から意外性が見いだせるのは必然的なことである。益岡・田窪（1992: 153）も、「も」は「当該の事態について成り立つ可能性が低いと考えられるものが実際には成り立つ、ということを示すことにより意外性を表す場合がある」と述べている。すなわち、「も」による意外性は、並列する事態を想定した上で、そのスケール性に焦点が当てられることによって生じる副次的な機能であると考えることができる。

意外の「も」に対し、累加の「も」と比べ同類の他の事態が想定されにくいために、「も」の別の意味機能として位置付けるべきだという見解も見られるが、以下のように意外性は後に述べる累加性が見られにくい「も」にも認められる。

(59) a. 教え子も結婚したかあ。

b. 結婚した = {??, 教え子}

(60) a. 日本人もうるさいねえ。

b. うるさい = {??, 日本人}

すなわち、「意外性」は、ある種の「も」特有のものではなく、「累加」であれ「極限」であれ「も」が付加されている要素が同類の他の要素や事態と結びつきにくいと考えられる場合に、副次的に「意外」の「も」として解釈されとも言える。以上より、「意外性」は文脈に応じて累加の「も」に副次的に表されるものであり、極限の「も」とは区別される。ただし、寺村（1991）は格助詞の前後や述語の後ろなど、「も」の意外性が現れやすい位置があることを指摘している。(61)では、「～もが」によって「ナビゲイターになった1回生」など同類の他の事態が想定され、それらよりも「お客様」として参加した学生の方が当該事態が起こりうる可能性が低いということを示す。「～もが」に関しては、まず「が」に対してピッチと強度（Intensity）を高めて強調される必要があることから、「も」に後続できる「が」は純粋な主格のマーカーではなく、総記を示す「が」であるということが考えられる。よって、(61)に見られる意外性は「も」のみによるものではないということが予想される。

(61) このレポートを読むと、ナビゲイターになった1回生だけではなく、「お客様」とし

て参加した学生もが、いかにこういった鑑賞方法のもつ意味を理解しようとしたかを感じることができる。(http://www.ableart.org/org/handbook/2-2.html)

また「～をも」に関して、寺村（1991: 70）は「「～ヲモ」となるのは、上の例（下記(62 a)として引用）のように、特別の強調効果を意図する場合にかぎられる」と述べているが、対格の「を」が明示されるのはたいてい書き言葉においてであり、話し言葉においても見られる場合は対格名詞を強調させる機能が想定される。

(62) a. 鬼をもひしぐ剛の者（寺村 1991: 70）

b. 鬼もひしぐ剛の者

c. 鬼をひしぐ剛の者

また、連用形に「も」が後続する(63)も、「も」によって「根をおろして食べる」といった同類の他の事態が想定され、それらよりも「葉っぱを食べること」の方が当該事態が起こりうる可能性が低いということが想定される。(63)では、日本語の su-挿入が英語の do-挿入と同様に強調を示す機能をもつということが考えられる。

(63) a. ワサビは、根（？）をおろして食べるほかに葉っぱを食べもします。(http://www002.upp.so-net.ne.jp/hidemi-k/thought/t061.html)

b. ワサビは、根をおろして食べるほかに葉っぱも食べます。

よって、上記に示した「も」は、「が」や「を」との共起、su-挿入といった他の焦点性の強い要素との共起によって、得られる文の表現効果であると考えられる。

またさらに、寺村（1991）では「特別の強調効果」、「評価的意味」などと特徴付けられる「数量語+も」や「疑問語（=不定語）+も」も、「極限性」や「意外性」が顕著に見られることから極限の「も」の一種だとしている。普通名詞に付加する極限の「も」は、「さえ（も）」と置き換えても同様の解釈が可能であるが、「さえ（も）」は、中西（2010）も指摘するように数量表現や不定語とは共起しにくいため、数量表現や不定語と結びつく「も」は極限の「も」の中でも区別される。

(64) 太郎は親の顔さえ (も) 覚えていなかった。

(65) ??太郎は一人さえ (も) 覚えていなかった。

(66) ??太郎はどの学生さえ (も) 覚えていなかった。

また、(67)では「一億円」の他に稼いだ額があること、(68)では「一人」以外に呼ばなかった対象がいることを具体的に想定することができず、数量表現と共起する「も」の累加性は、具体的な他の同類のものが想定されにくいことがわかる。

(67) a. 叔父は一年で一億円も稼いだ。

b. 一年で稼いだ = {??, 一億円}

(68) a. 太郎は一人も呼ばなかった。

b. 話さなかった = {??, 一人}

中西 (2010) も、理論的な立場から数量表現+「も」の意味について考察している。中西 (2010) は、以下のような構造に見られる「も」について、日本語の「も」には英語の *even* と共通する機能があり、数詞との作用域関係によって含意されるスケールが決定している。以下のように、「5 人」がとりたての対象となる場合、「5 人」以外が想定されるのではなく、「5 人」という数量に含まれる「1 人」から「4 人」までが想定される。

(69) a. 5 人もやってきた。

b. やってきた人 = {#太郎, 花子, 5 人}

c. 人数 = {1 人, 2 人, 5 人}

また、不定語と「も」が共起する場合は、その語がもつメンバーが想定されることが多くの先行研究によって指摘されている。「いつ」であれば、「いつ」以外ではなく、時の下位集合を想定することができる。

(70) a. あの人はいつも読書をしている。

b. 読書をする条件 = {#どこ, #なに, いつ}

c. いつ = {先週, 5 日前, 昨日,}

以上、「も」のとりたて対象、累加性の観点から、普通名詞に接続する「も」と疑問語（不定語）・数量表現に接続する「も」は明確に区別される。

また、逆接の「も」（日本語記述文法研究会(編) 2009）に関しても、前田（1993）や沼田（2009）によって指摘されているように、累加の「も」との関連性が見られる。前田（1993）によると、(71)の「ても」は並列条件的かつ逆条件的な例であり、「ても」の「も」の二用法は、連続的に存在するという。よって、以下のような逆接の節はテ形節などを意外性をもつ「も」がとりたてた場合に生じると考えることができる。

(71) 結婚すれば悔恨あり、結婚しなくても悔恨ありということになる（前田 1993: 156）

逆接の「も」の機能を(72b)のように表示すると、「太る」という事態と同様の他の条件が想定され、どのような場合であっても変化がないという意味が読み取れる。(73)では、「も」が付加されたテ形節は「晴れる」「風が強い」など、「運動会が行われる」条件として他の事態を含意することができる。「累加」の意味をもつからこそ、「運動会が行われる可能性が非常に高い」という意図が読み取れる。「運動会が行われる」条件として想起できるものと「雨が降る」という要素との極度の結びつきにくさから、この場合はある種の「意外性」が「逆接的」な形となって現れると考えられる。よって、「も」による逆接性は、(74)であれば「合格できなかった背景」として想定される事態の中で、「一生懸命勉強した」という事態が起こる可能性が極端に低いと考えられるとき、期待される結果との隔たりから生じると考えることができる。

(72) a. 太郎は、太ってもも見た目は変わらない。

b. 見た目が変わらない = {メガネをかけて、髪型を変えて、化粧をして、…… 太って}

(73) a. 雨が降ってもも運動会が行われる。

b. 運動会が行われる = {晴れ、暑い、風が強い、…… 雨が降って}

(74) a. 一生懸命勉強してもも、合格できなかった。

b. 合格できなかった = {未受験、遅刻、前日の夜更かし、…… 一生懸命勉強して}

前田（1993）や庵(他)（2000）では、「～ても」は複数の前件を並べて使えること、「疑問

語（疑問詞）～ても」の形で使う用法があることを指摘しており、このようなことが可能なのは、累加の「も」が組み合わさっているためだとしている。

(75) このコップは、落としても、ぶつけても、割れない。（庵(他) 2000: 231)

(76) 何が起こっても、試合は行われます。（庵(他) 2000: 231)

「他の可能性」が想定されにくいような逆接をもつ文は、「も」の機能が不要ないために「テ形+も」という形が使えないということが推測される。主節と従属節が以下の(77a)のような関係にあると、後続する節が時間に幅をもたず、前接する節にいかなる他の可能性も必要としない。よって、(77c)は容認されず、「テ形+も」は単なる逆接を表すのではなく、「も」が付加することで「他の可能性」が含意されることがわかる。以上より、逆接の「も」も、累加の「も」の一つとして位置付けられるということが確認された。

(77) a. 太郎は今宿題をして、花子は 3 日前に終わらせた。

b. 太郎は今宿題をしたが、花子は 3 日前に終わらせていた。

c. *太郎が今宿題をしても、花子は 3 日前に終わらせ（てい）た。

d. 花子は 3 日前に終わらせていた = {×, 太郎が今宿題をして}

またさらに、極限の「も」が累加の「も」と同様累加性を有することの証拠として、「毎日」や「全員」など「全称」を表すものに「も」が共起できないということが挙げられる。もし、極限の「も」が単に数量の極限值であることを示せるのであれば、最大値を示す「毎日」や「全員」などにも「も」が付加できるはずであるが、(78a)、(79a)、(80a)に示すように言外の「同類の他の要素」を想定できないため容認されない。

(78) a. *毎日も泳いでいるんですか！

b. 今日も泳いでいるんですか！

c. 週に 3 日も泳いでいるんですか！

(79) a. *全員も来たのですか！

b. あなたも来たのですか！

c. 100 人も来たのですか！

(80) a. *今年度の事件は、全ても解決していないのですか！

b. 今年度の事件は、半分も解決していないのですか！

以上から、極限の「も」と呼ばれる「も」は、普通名詞に付加した場合、累加の「も」と同様具体的な言外の同類の事態を想起でき、「累加」と同じ性質をもつものとして考えられるということが明らかとなった。さらに、「も」のもつ意外性は「も」の種類にかかわらずその延長線上にある副次的な性質であり、意外の「も」や逆接の「も」を独立した分類とする必要がないことを示した。ただし、数量詞や不定語に「も」が付加した場合の極限性は、語それ自体のスケール性が関与し、累加の「も」とは別に議論する必要があることを示した。

1.2.3. ぼかしの「も」⁷

ぼかしの「も」は、日本語記述文法研究会(編) (2009: 26) によると、「文のある要素をとりたて、同類のものがほかにあることを漠然と示すことにより、文全体の意味をやわらげる」という機能をもつ。「詠嘆」(澤田 2007 等)、「やわらげ」(沼田 1984, 2009 等) などとも呼ばれるが、澤田 (2007: 34) では、「人やものが時間の経過とともに持ちえるであろう属性を対象が持ったとき、その属性をもつ他の人達と同類であることが表現される」とし、詠嘆の「も」からも累加性が得られることを指摘している。

ぼかしの「も」について、先行研究の多くがぼかしの「も」による表現効果の詳細な記述や累加の「も」との連続性を議論の主眼としている。そのようなぼかしの「も」の振る舞いについて詳細に言及しているものには、田野村 (1991)、沼田 (2009)、日本語記述文法研究会(編) (2009) などが存在する。田野村 (1991) は、累加、極限、詠嘆⁸の三種類の「も」の意味関係を、別の事物の存在を表す「よこの含み」と含意される事態との結びつきにくさを表す「たての含み」という二概念から関連付けている (表 1 を参照のこと)。しかし、「よこの含み」とは「も」自体の性質、「たての含み」とは「も」と「含意されるもの」との関係を表す指標で、この二概念は異なる次元の概念である。また、ぼかしの「も」

⁷ 本節は榎原 (2017c, 2018c) の内容の一部に基づき加筆修正したものである。

⁸ 田野村 (1991) は、寺村 (1991) による「詠嘆」の「も」をもとに考察しているが、「その財布もずいぶん古くなりましたね (田野村 1991: 81)」の「も」を省いても「詠嘆」性に差が見られないことから、「も」の性格を「詠嘆」というような概念で表すべきではないと主張している。

は、「別の事物の存在」が見られないにもかかわらず「含意される事態との結びつきにくさ」をもって表されているとは考え難いという点も問題となる。

表 1 田野村（1991）による「も」の体系

	「よこの含み」	「たての含み」
累加の「も」	○	－
極限の「も」	○	○
詠嘆の「も」	－	○

このように、従来の研究では累加性が認められにくく情意性が見られるばかりの「も」を一様に扱っているもの、ばかりの「も」の一部しか扱っていないものが主であった。ばかりの「も」の多様性に着目した中尾（2008）は、並列する事態が想定されにくい「も」について、より広い「も」を対象に、記述的な観点から累加の「も」との関連性を見出している。中尾（2008）は、累加の「も」の「並列事態を想定させる」というはたらきからばかりの「も」にはそれぞれ想定されるものが存在するとし、いわゆる詠嘆の「も」にも、ある種の「同類性」が見られることを主張している。中尾（2008）は、累加の「も」との関係から典型例表示の「も」、潜在的意識活性化の「も」、解釈の「も」の三つに大別している。以下のようなばかりの「も」は、「春」や「他の人・物」など他の同類の事物を具体的に想定する必要がなく、累加の「も」とは累加性の及び方が異なることがわかる。次節より、中尾（2008）による分類の妥当性を検討する。

・典型例表示の「も」

(81) a. 夏も真っ盛りです。

b. 真っ盛り = {夏, ??}

・潜在的意識活性化の「も」

(82) a. お前も年を取ったな。

b. 年をとった = {お前, ??}

・解釈の「も」

(83) a. (ぼろぼろになった財布を見て) その財布もずいぶん使い込んでいるね。

b. 使い込んでいる = {その財布, ??}

1.2.3.1. 典型例表示の「も」

まず、中尾（2008）によると、典型例表示の「も」は、「も」が示す全体集合の中から内部集合（下位集合）の一つである典型例を提示するという。(84a)であれば、「南」に付加している「も」は「南」の典型例である「赤道直下」を想定させる。また、典型例表示の「も」の特徴として(85)のように「それも／しかも」と置き換えられることを述べており、統語論的なテストが有効であることを示している。

(84) a. 南も南、赤道直下だ。(中尾 2008: 39) ⁹

b. 南 = {赤道直下, 九州, 沖縄, 台湾, ……}

(85) 南だ {それも／しかも} ただの南ではなく赤道直下だ。(中尾 2008: 40) ¹⁰

1.2.3.2. 潜在的意識活性化の「も」

次に、潜在的意識活性化の「も」は、「すべてのものは時間推移とともに変化する」、「人間は誰でも失敗する」といった一般則を前提とし、その潜在的意識が活性化されたことを表す。中尾（2008）の主張に従い以下の(b)のように表示すると、下線で示された事態を取りたててことでその集合となる一般則（時間推移に伴う変化）が活性化されると説明することができる。

(86) a. 父も今年で定年退職だ。(中尾 2008: 39)

b. 一般則（時間推移に伴う変化） = {父が定年退職する, 娘が卒業する, ……}

(87) a. 夏休みもあと3日となった。(中尾 2008: 45)

⁹ これは日本語記述文法研究会(編) (2009) では慣用的な「も」として扱われていた例であるが、典型例表示の「も」は生産性が高いことから、本稿では中尾（2008）に従い、分析の対象に加えることとする。

¹⁰ 典型例表示の「も」には、「A も A、B」や「A も B」など様々な形が見られるが、中尾（2008）、沼田（2009）に従えば全て「A だ。しかもただの A でなく B だ」と言い換えられることから、統語論的には「A (、しか) も A (の中の)、B」といった表現の一部が省略できる形として、統一的に扱っていきたい。

b. 一般則（時間推移に伴う変化） = {夏休みがあと 3 日になった, 春がやってくる,}

(88) a. イチローもエラーをすることがあるかあ。(中尾 2008: 47) ¹¹

b. 一般則（人は失敗する） = {学生が昨日伝えたことを忘れる, サラリーマンが遅刻する, イチローがエラーをする}

1.2.3.3. 解釈の「も」

解釈の「も」は、話し手の解釈以外にも別様の解釈の余地があることを暗ににおわせることができるという。中尾（2008）に従えば、(89)は解釈の「も」によって「問題をてきばきと解決する」といった一次情報を元に解釈した結果を表すことができる。(90)では、「十円玉が丸いこと」が万人に共通した認識であり解釈を行って得られる判断ではないために、「も」が解釈の「も」として現れないとしている。

(89) a. 坂田も頭がキレルねえ。(中尾 2008: 49)

b. 坂田の問題解決に対する解釈 = {坂田は頭がキレル, 意見をはっきり言う,}

(90) a. #十円玉も丸いなあ。(中尾 2008: 49)

b. 十円玉に対する解釈 = {丸い, ??}

このように、中尾（2008）による典型例表示の「も」、潜在的意識活性化の「も」、解釈の「も」は想定される事態ととりたてられる事態との関係が分類の基準となっていることがわかる。

1.2.3.4. 中尾（2008）における問題点

本節では、中尾（2008）の分類の基準となっている集合の性格付けについて述べる。中

¹¹ 例えば以下の(4)のような文脈においては他の選手とイチローの同類性をいう、いわゆる意外性の強い累加の「も」としての解釈が可能である。

4) イチローもエラーをするのだから、君がエラーするのも当然だ。
ただし、中尾（2008: 47）によると、このような例では「人間は誰でも失敗することがあるものだ」という一般則をもとにイチローのエラーの可能性を念頭に置くという、一般則との当該事態の合致関係を表すために「も」が使われ、一般則を意識していなければ使用されない。よって、意外の「も」によって表現される意外性とは厳格に区別すべきであると主張している。本稿においてもこれを支持し、ぼかしの「も」として分析を進める。

尾（2008）の分類に従うと、以下の(91a)は「人は成長する」という一般則を想定させる潜在的意識活性化の「も」、(92a)は「太郎が酒を飲む」という一次情報から解釈を得る解釈の「も」であり、(91a)と(92a)は異なる種類の「も」として扱わなければならない。

(91) a. 「太郎が酒を飲む」太郎も大人になったな。¹²

b. 人は成長する = {太郎が大人になった, 花子が成人した,}

(92) a. 「太郎が酒を飲む」太郎も大人になったな。

b. 太郎の飲酒に対する解釈 = {太郎が大人になった, 太郎は酒が好きだ,}

しかし、上記の(91a)と(92a)は、同じ文脈の中で同じ文でもって表現されることから、文中の「も」が潜在的意識活性化の「も」であるか解釈の「も」であるかは話者の判断によって変わるものの、期待される表現効果は非常に類似していることがわかる。ここから、中尾（2008）による潜在的意識活性化の「も」と解釈の「も」は、相補分布的に分類されるのではなく、同じ「も」による現象として扱うことができると考えられる。

また、(93)と(94)を対比させると、時にかかわる「も」が想定される文は解釈の前提となる一次情報を設定しても、話者の解釈をキャンセルすることができない。中尾（2008）や三井（2001）では、時の流れを直接的に表現する潜在的意識活性化の「も」は(93)のような「時間推移とともに変化した対象」を主題とするものと同類のものとして扱われていたが、(94)のように「夏」など時間の一側面を直接的に表現する「状態変化タイプ（澤田 2007）¹³」を抽出すると、それ以外の解釈の可能性を念頭におくことができないということがわかる。

(93) a. 「太郎がお酒を飲む」太郎も大人になったなあ。

b. 太郎も大人になったなあ。まだ子どもだけ。

(94) a. 「鈴虫が鳴く」夏ももう終わりかあ。

b. 夏ももう終わりかあ。??まだ夏のはじめだけ。

¹² 文の前の〔 〕（亀甲括弧）は、その文の前提となる事態や、話題など、文を文脈上で理解するために必要な情報であることを表し、文の構造や文法に直接かかわらない。

¹³ 「状態変化タイプ」の「も」とは、澤田（2007）によれば、「おまえも馬鹿だな」といった「属性付与タイプ」とは異なり話し手の発話時の環境の変化を表し、「も」によって事態の同類性が表現されるという。「春もたけなわですね」もこの類に属するというが、この文に関しては、中尾（2008）の主張を支持し、区別して分析したい。

c. 鈴虫の鳴き声に対する解釈 = {夏が終わる, ??}

さらに、中尾（2008）では、潜在的意識活性化の「も」をもつ文には「想定通り」と「軽い驚き」が重なりあった感慨という情意が、解釈の「も」をもつ文には感応（ある事態に触れて心が感じ動くこと）という情意が認められるとしており、「も」によってもたらされる情意も中尾（2008）の分類の基準となっているが、田野村（1991）も指摘しているように、「も」自体が必ずしも情意性をもつわけではない。中尾（2008）では、(95)、(96)、(97)の「も」を潜在的意識活性化の「も」として扱っているが、(95)と(97)は、(b)や(c)の文のように文末形式を疑問の形式にすると累加の「も」として解釈されやすく、移り変わりうる時の流れ自体を主題とする(96)の「も」のみが情意性を維持していることがわかる。

(95) a. 早いもんで父も今年で定年退職だなあ。

b. #え、お父さんも今年で定年退職なの？

c. お母さんだけでなく、お父さんも今年で定年退職なの？

(96) a. 早いもんで夏休みもあと3日だわ。

b. え、夏休みもあと3日なの？

c. 78月だけでなく、夏休みもあと3日なの？

(97) a. イチローもエラーをするかあ。

b. #え、イチローもエラーをするの？

c. 二軍の選手だけでなく、イチローもエラーをするの？

以上、「も」の想定する「一般則」と「別様の解釈」は文脈に依存すること、時にかかわる「も」をもつ文は情意性をもち、それ以外の文が帯びる情意は「も」によらないことを述べた。潜在的意識活性化の「も」のうち時にかかわる「も」のみが異なる種類の「も」、それ以外の潜在的意識活性化の「も」と解釈の「も」が同じ種類の「も」とし、表2に新たな分類を提案する。

表 2 中尾（2008）と本稿におけるばかりの「も」の分類

中尾（2008）による分類	想定される事態	情意	本稿における提案
典型例表示の「も」	典型例	なし	(ア)
潜在的意識活性化の「も」	一般則（時）	感慨	(イ)
	一般則	感慨	(ウ)
解釈の「も」	別様の解釈	感応	

1.2.4. 早い時期を表す「も」

もっとも早い時期を表す「も」は、日本語記述文法研究会(編) (2009: 28) では、「時点を表す副詞的成分をとりたてて、その事態が実現しそうなもっとも早い時期を表す」と説明される。(98)の「も」が早い時期を表す「も」であるとすれば、「3 日後」以外の日に再び届く日があることを想定せず、累加の「も」のように累加性を顕在的に表す必要はないが、数量表現と共起する「も」と同様に語から時間のスケールを想定すれば、「25 日」が他の想定される期間の中で最も早い時期だということになる。

(98) a. 必要書類は 3 日後にもも到着する予定です。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)

b. 必要書類が到着する = {??, 3 日後}

(99) a. 本法案は 25 日にもも議会で可決される見通しだ。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)

b. 必要書類が到着する = {... 27 日に, 26 日に, 25 日に}

よって、このもっとも早い時期を表す「も」も、数量表現と共起する極限の「も」の一種として考えても良いということが示される。

1.2.5. 当たり前の「も」

定延 (1995: 236) によると、当たり前の「も」とは、「も」を付加することで「言表事態に類似した情報はしょっちゅう生じている。言表事態は驚くにあたらない、当たり前のなりゆきだ」ということや、「同じ境遇・条件の下に置かれれば他の[誰／何]であっても[そうした／そうなった]はずだ」ということを表すものである。(100)では、「実家に帰る」以外にも「ひきこもりになる」など「いじめられた後にとる行動」が想定される。また(101)で

も、「腹が減る」以外に「意識が朦朧とする」などの事態が想定され、「も」は「腹が減る」という事態が生じる可能性が他の可能性と比較した上で一番高い「当たり前」という意味を生じさせる。

(100)a. 会社でいじめられれば、実家に帰りたくなるよ。

b. 会社でいじめられれば、実家に帰りたくもなるよ。(榎原 2016: 22)

c. 会社でいじめられれば = {実家に帰りたくなる, ひきこもりになる, 会社の悪口を言う, ……}

(101)a. 昼ごはんを食べていないのなら、腹が減るだろう。

b. 昼ごはんを食べていないのなら、腹も減るだろう。(榎原 2016: 22)

c. 昼ごはんを食べていないのなら = {腹が減る, 意識が朦朧とする, 晩御飯が待ち遠しい, ……}

上記の(100)や(101)がぼかしの「も」と類似した用法としても感じられるのは、語尾の「よ」や「だろう」の影響によるだろう。「よ」や「だろう」の現れない以下の(102)や(103)を何の文脈も想定することなく読み上げると、当たり前の「も」として解釈されにくくなる。

(102)? (会社でいじめられれば,) 実家に帰りたくもなる。

(103)? (昼ごはんを食べていないのなら,) 腹も減る。

上記のように、当たり前の「も」も、他の要素が前提として必要であり、当たり前の「も」が生じるには、他に起こりうる事態が想定され、「も」によってとりたてられたものが「一番起こりやすい」事態として位置付けられることが必要である。状況、条件からとりたてられる事態とは別の具体的な事態が想定されるという点で、「累加」との関連性が読み取れる。ゆえに、当たり前の「も」も、累加性をもつ「も」の一つとして扱えると考ええる。

1.2.6. 確定回避の「も」

確定回避の「も」は、数量表現と共起する極限の「も」と同様に数量の大小を強調する機能をもつ。この場合、(105)のように普通名詞に接続する例は累加の「も」としてしか解釈できないという点からも、数量表現に「も」が付加することによって、「100 人」という

数量の大小を強調していることがわかる。

(104)a. え、100 人もいたかなあ。

b. いた = {??, 100 人}

(105)#太郎も来てたかなあ。

「も」が確定回避の「も」としてはたらくには、(106)や(107)で明らかであるように、断定を回避させることができる文末形式が必要となる。よって、以下の文の確定回避性は主に文末によるものであり、数量と結びつき極限性を表す「も」との相乗効果によって、数量などの確定が回避されるということが考えられる。

(106)用紙は 50 部も持ってくればいいですかね? (定延 1995: 243)

(107)うーん、100 人も来ていた# (かなあ)。

1.2.7. まとめ

以上、「も」の主な意味として従来扱われてきた累加・極限・ぼかしの「も」を中心に概観したが、極限の「も」のうち、意外性を強くもつ「も」や当たり前の「も」はそれによって他の同類の具体的な事物を想定する必要があることから、累加の「も」の一種として考えられること、数量表現や不定語と共起する「も」は語自体のスケールを想定し、その下位概念や数量などをとりたてること、ぼかしの「も」は具体的事物ではなく、通念や一般則といった陳述的な事態を想定させることを述べた。よって本稿では、暫定的に「も」のもつ基本的な性質を「累加性」とし、考察を進める。

(108)a. 「他の同類の要素」が具体的に想定されるものを累加の「も」とする

b. 「他の同類の要素」が語のスケールによるものを極限の「も」とする

c. 「他の同類の要素」が具体的に想定されにくいものをぼかしの「も」とする

本稿においては、以下の表 3 に示すような「も」の分類を基準とする。寺村 (1991) も指摘しているように、「も」それぞれの用法は、生起位置や共起成分と深く関係している。すなわち、「も」によって想定される他者には何らかの統語論的な制約がかかわることが予

想される。本稿では、以下の大きな分類に基づいて統語論的な分析を行い、必要に応じて
 周辺的なデータも観察し、議論を深めることとする。

表 3 先行研究における「も」の枠組みと本稿における「も」の分類

先行研究	付加対象	本稿における分類			想定
極限	数量表現	極限			語 ↑ ↓ 文
	不定語				
確定回避	数量表現				
早い時期	時期+に				
極限	普通名詞 他	累加			
累加	普通名詞 他				
当たり前	普通名詞 他（当然）				
ぼかし	普通名詞 他	ぼかし			
		(ア)	(イ)	(ウ)	

第2章 理論的枠組み

第1章にて取り上げた多様な「も」は、統語論、意味論、語用論にわたり多様に議論されている。「も」の多様性を分析する前に、「も」のどの問題をどのレベルで捉えるべきかを整理しておきたい。本章では、「も」を統語論、主に生成文法の立場から分析する上で前提としたい理論的な枠組みを示す。

2.1. 「も」の統語論的特徴

まず、本稿において支持する基本的な統語構造について概観する。沼田（2009: 25-32）はとりたて詞の統語論的特徴として以下の4点を挙げ、「とりたて詞」はこれら4点全ての特徴を有するとしている。

- (109)(i) 分布の自由性：名詞、名詞+格助詞、副詞、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞に後接でき、格助詞などと比べると文中での分布は相当自由である。
- (ii) 任意性（消去可能性）：詞の有無が一文の構成に関与しない任意の要素である。
- (iii) 連体文内性：連体修飾句中の要素となる。
- (iv) 非名詞性：被修飾名詞の一部になることができない。

以上の記述に基づいた特徴は理論的には、(109 i)は詞の付加対象にかかわる問題、(109 ii)は詞の削除の問題、(109 iii)は詞が生起する階層の問題、(109 iv)は詞が付加・投射するラベル（Label）の問題であることがわかる。しかし、以下に述べる事実から、「も」の周辺の用法は上記の特徴では説明されないことがわかる。

まず、数量表現と「も」の間に他の要素が介在する(110b)は「3人の学生」以外の人を想定しなければならず、極限の「も」として解釈されない。また、目的語に付加する(110a)や連体文内に位置する(110d)の「も」は、「年」や「太郎」以外の事物を想定しなければならず、ぼかしの「も」としては解釈されない。よって、極限の「も」やぼかしの「も」には、(109 i)の分布の自由性や、(109 iii)の連体文内性は見られない。また、極限の「も」として

現れることを想定する(110c)は「も」の削除が認められないことから、(109 ii)の任意性も適用されないことがわかる。ここから、「も」の周縁的用法を視野に入れると、必ずしも全ての「も」が上記の規定にあてはまるわけではないということがわかる。さらに、沼田(2009)は連体修飾構造の主名詞の一部にならない(109 iv)の非名詞性がとりたて詞の特徴であると述べているが、「だけ」や「ばかり」と同様、不定語に付加し否定辞と結びつく(110e)の「も」は格助詞に前接できることから名詞性を全く有さないとは言えないことがわかる。このように、累加の「も」以外の「も」の統語論的特徴を観察すると、「とりたて詞」として扱えない、もしくは例外的な用法として扱わなければならないということになる。

(110)(i) 分布の自由性

a. #お前は年もとったねえ。(ぼかし)

b. #3 人の学生も来た。(極限)

(ii) 任意性 (消去可能性)

c. 今日はどの学生* (も) 来なかった。(極限)

(iii) 連体文内性

d. #[太郎も大きくなった]小学校が、取り壊されることになった。(ぼかし)

(iv) 非名詞性

e. 誰もが気に入っている。(否定呼応表現)

以上から、本稿では異なる意味を表す「も」の間に見られる統語論的な振る舞いの違いを考察する。(110 i)分布の自由性と(110 iii)連体文内性に関しては、各「も」の付加対象や、階層構造の中で生起可能な位置が定まっていることが予想される。また、後に述べるように、(110 ii)消去可能性に関しては、消去不可能である要素の特徴として、他の要素との結びつきが関係していると予想されるため、「も」と他の要素との一致関係を明らかにし、「も」のかかわる削除について分析を行う。最後に、それらの統語論的特徴から各「も」の機能や(110 iv)非名詞性にかかわる「誰も」、「何も」が説明されることを示す。

2.2. 付加対象

本節では、「も」の付加対象、および生起する階層の観点から分析するにあたり、本稿における基本的な統語構造を設定する。とりたて詞の付加を観察すると、以下のように、付

加対象の投射レベルや NP や VP のラベルを設定しなければ、なぜ同じ意味をもつ要素を対象としているのに容認度の差が生じるのかが説明できない。(111)から、「だけ」は動詞句に付加するとき連体形をもつ投射、もしくは連体形を主要部にもつ階層に付加しなければならないのに対し、(112)から、「も」は動詞句に付加するとき連用形をもつ投射、もしくは連用形を主要部にもつ階層に付加しなければならない。よって本稿では、付加対象の問題に対し、投射レベルに着目する。

- (111)a. 飲み会ではワインだけ飲めばいい。(ワイン+だけ)
 b. ?飲み会では[ワインを飲み]だけすればいい。(?飲む+だけ)
 c. 飲み会では[ワインを飲む]だけです。(飲む+だけ)
- (112)a. 飲み会ではワインも飲めばいい。(ワイン+も)
 b. 飲み会では[ワインを飲み]もすればいい。(飲む+も)
 c. *飲み会では[ワインを飲む]もです。(*飲む+も)

また、青柳 (2006) にならい、格助詞を示す[Case]素性が D の形態格素性によって付与されるとすると、以下のように DP は、属格の「の」の前に現れないことが明らかである。

- (113)a. *[_{DP} 保護者 {が／を／に}]の話
 b. [_{PP} 保護者 {から／へ／と}]の話
- (114)a. 東大生も話をしている。
 b. *[_{DP}[_{DP} 東大生]も]の話

本稿では、基本的に最小句構造 (Bare Phrase Structure) を援用し、いわゆる主要部 (X^0) 自体が他の要素と結びつくものに関しては、最大投射 ($X^{\max}$) と別に主要部を設定する必要はなく、最大投射 ($XP=X^{\max}$)、最小投射 ($X=X^0$ 、主要部) といった投射レベルは相対的に決定されたとする。なお、本稿における樹形図では、表示のわかりやすさのため、必要に応じて「XP」と「 $X^{\max}$ 」どちらの表示も使い、ラベル (Label) も維持することとする。

- (115)a. 最大投射 (Maximal Projection) : それより上に投射していないもの
 b. 最小投射 (Minimal Projection) : 投射によって形成されていないもの

c. 中間投射 (Intermediate Projection) : 上記のいずれでもないもの

(原口・中村・金子 2016: 541 より)

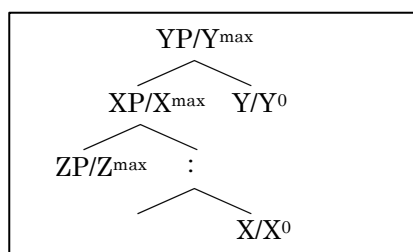


図 2 基本的な統語構造

さらに、青柳 (2006) に示されているように、名詞句の構造に関しては、日本語でもいわゆる N と D を区別するという立場に立つ。本稿では、数量詞の構造まで詳細に記述した Watanabe (2008) の表示を援用し、名詞句の構造を以下のように定める。

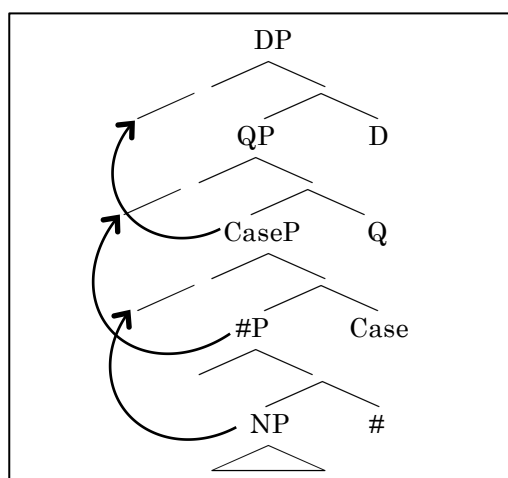


図 3 Watanabe (2008) による DP の構造

NP は名詞句、#P は類別詞を主要部にもつ数量表現が構成される句であり、名詞句 NP は格を主要部とする CaseP の指定部まで上昇するという。また、「半分」「ほとんど」など名詞句の数ではなく集合を表す「質量部分構造 (Mass Partitives) (Abbott 1996)」が #P において構成され、上昇した #P など、QP の指定部にあるものが名詞句の数量を表す。また、CaseP が DP の指定部に移動すると、いわゆる数量詞遊離 (残留) が可能となる。ただし、Watanabe

(2008) では Takahashi (2002) に従い不定語と結びつく「も」の生起位置を D としている。しかし、日本語では格助詞の直後に累加の「も」を結びつけることは特別な場合を除き、許されていない。「も」の生起位置については、本論文を通して考察していきたい。

(116) [DP [QP [CaseP [#P NP #] Case] Q] D] (Watanabe 2008: 517)

(117) *[DP[CaseP[NP 小学生]が Case]も D]英語を勉強する。

(118) 小学生が[DP[CaseP[NP 英語]を Case]も D]勉強する。

2.3. 生起階層

階層の問題を検討する上で、本稿では、南（1974, 1993）による文の階層構造を出発点とし、「も」の統語論的な性質を分析する。南（1974, 1993）は、文には客観的事態や論理的関係にかかわることがらの側面から言語主体の態度や情意にかかわる陳述的側面に至るまでいくつかの段階があるとし、文を A～D の段階に分け、図 4 のような文の構造を提案している。南（1974, 1993）によると、A は素材である対象を描く段階、B は肯定・否定、過去認定、推量などを表す段階、C は感動、願望、意志などを表す段階、D は通達、命令、依頼などを表す段階で、A の段階がもっともことがらの、D の段階がもっとも陳述的である。構造的には、A の従属節が B の節の中に、B の従属節が C の節の中に、C の従属節が D の節の中に収まるという包含関係にあることを示している。¹⁴

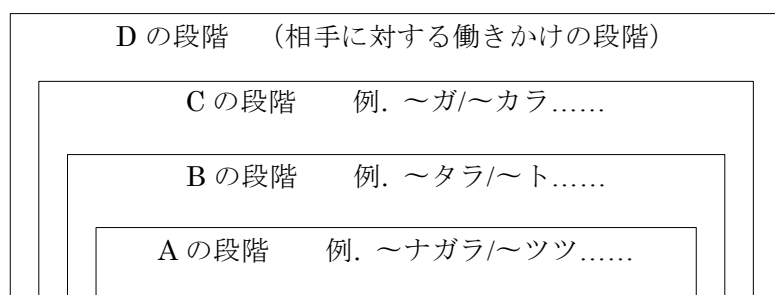


図 4 南（1974, 1993）による文の階層構造

Luigi Rizzi 等によるカートグラフィー研究では、南の階層構造では C、D の段階に対応し

¹⁴ 南による分類については盛んに議論されているが、A～D の段階が生成文法の統語構造に対応すると考え、文の階層構造を日本語の文における理論的研究へつなげるための大きな骨組みとして捉える。個々の要素における詳細な議論については別稿に譲りたい。

談話とのインターフェースを担う CP 層が詳細に記述され、より詳細な統語関係を分析することができるようになった。カートグラフィーの枠組みで日本語の文中要素の生起について検討したものは三原（2012）、遠藤（2014）等多く見られる。三原（2015）では、南の分類とカートグラフィーとの対応関係を以下のように示している。先行研究より、主な階層と生起する要素、南による階層構造との対応関係の概観を図 5 に示す。本稿では、各「も」の生起位置を検証する上で、以下の統語構造を前提とする。

(119)a. A 類 $\Rightarrow$ vP

b. B 類 $\Rightarrow$ FinP

c. C 類 $\Rightarrow$ ForceP(三原 2015: 8)

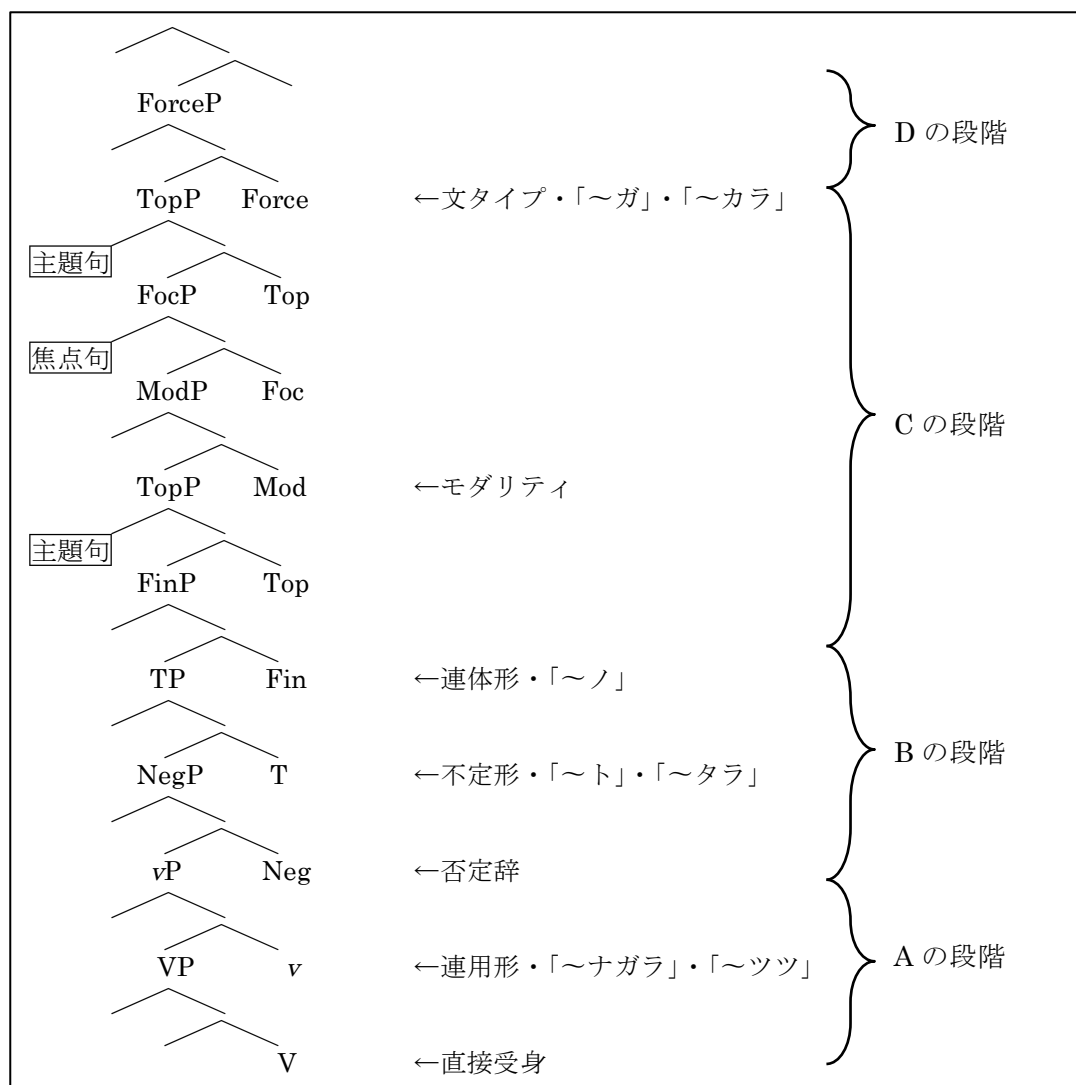


図 5 南による文の階層構造とカートグラフィーの対応

2.4. 一致

次に、削除の問題を検討する上で関係する「一致 (Agree)」について、先行研究からその概観を説明する。一致とは、原口・中村・金子(編) (2016: 531) によれば、「値 (Value) を持たない素性 (Unvalued Feature) に別の要素から値を付与する操作である」。また、Chomsky (2000, 2001) では、一致操作によって解釈不可能素性 (uF) と解釈可能素性 (iF) の間で解釈不可能素性 (uF) がその c-統御内に解釈可能素性 (iF) を探し出し、値を与えられた後に削除されるとしている。(120)のように Wh 疑問文を想定すると、C と *what* は[Q]素性の一致関係にあり、その過程で C のもつ解釈不可能素性[Q]と *what* のもつ解釈不可能素性[wh]がチェックされる必要があるという。

(120) [CP C [TP John bought what]]. (中村・金子・菊地 2001: 217)



日本語の Wh 疑問文においても、「か」など何らかの要素が不定語の素性をチェックする必要があると考えられる。Kishimoto (2001) は LF 部門、Hiraiwa (2005b) は転送 (Transfer) 時において、不定語と「も」が一致する関係 (Indeterminate-Agreement) を作るという。Hiraiwa (2005b) は以下のように、一致のために不定語 (またはその痕跡) が「も」の c-統御領域内に位置しなければならないことを指摘している。本稿においても、主要部や「も」と不定語との素性照合が生じ、不定語のもつ素性が「も」によってチェックされるということを支持する。

(121) The head of the chain of the indeterminate must be in *cd*(Q) at Transfer. (Hiraiwa 2005b: 100)

(122)a. 太郎は花子に _i[PRO_i どの大学に行くこと]-も 勧めなかった。

b. *?太郎は誰に _i[PRO_i MIT に行くこと]-も 勧めなかった。(Hiraiwa 2005b: 105 より)

2.4.1. 項削除

従来日本語では、項削除という現象が扱われてきたが、Oku (1998) では、空所の部分が「ジョンの手紙」としても、「メアリーの手紙」としても解釈できることから、項削除が音声的に空である *pro* ではなく、削除された要素が LF においてコピーされるという立場をと

っている。

(123)a. ジョンは自分の手紙を捨てた。

b. メアリーも $\emptyset$ 捨てた。(^{OK}ジョンの手紙/^{OK}メアリーの手紙) (Otani and Whitman 1991: 346-347 より)

また、Saito (2007) も削除された空の部分は一一致などの操作が行われた後の LF コピーであると主張している。以下のような例は、PF 削除では問題とならない例である。しかし、先行する談話から削除されたと考えられる位置へ LF 部門にある対象「次郎は本（雑誌）を買った」をコピーするという分析をとると、目的語が同一文中に二つ生起するという構造になってしまうため、容認されないという説明が可能である。

(124)a. *[本を]_i 太郎は[花子が _{t_i} 買ったと]言ったが、[雑誌を]_j 次郎は $\emptyset$ 言った。

b. *[その本を]_i 太郎は[花子が _{t_i} 買ったと]言ったし、[その本を]_j 次郎も $\emptyset$ 言った。

(いずれも Saito 2007: 210 より)

また、Saito (2007) は、項削除は削除された要素と残された要素の間に ϕ 素性や格 (Case) 素性の顕在的な一致関係がない (Absence of Overt Agreement) 言語にしか許されないことを述べ、顕在的な一致関係をもつ英語の項削除が許されないのは、LF 部門ですでに素性が認可されてしまったコピーが用いられ、統語計算の過程でチェックされるべき格の素性が LF コピーと一致しないためだと説明している。

(125)a. 太郎は自分の友だちを連れてきた。



b. でも、花子は $\emptyset$ 連れてこなかった。 (Saito 2007: 216 より)

(126)a. John brought [his friend].



b. *But Mary didn't bring $\emptyset$. (Saito 2007: 215)



Sugisaki (2011) も、Saito (2007) を支持し、不定語と他の要素との[Q]素性の一致においても削除が適用されないことを実証的に示している。

(127)a. 太郎は_[DP 自分の弁当を]食べた。

b. でも花子は $\emptyset$ 食べなかった。

(128)a. A: ジョンは何を食べたの？

B: りんご。(Sugisaki 2011: 69 より)

b. A: じゃあ、メアリーは $\emptyset$ 食べたの？

B: #みかん。

また、Ikawa (2013) も不定語と「も」や「か」が結びつく場合は LF コピーがかかわる一致であるとしている。分裂文を含め一致関係にある片方の非顕在化が容認されないことから、音声的に空 (Phonetically Null) である要素は一致に必要な素性を持たず一致の関係が許されないことを指摘している。

(129)a. ジョンはビルが何を食べたか聞いた。

↑

b. *ジョンがビルが $\emptyset$ 食べたか聞いたのは、何をだ。

↑ ×

不定語と「も」、不定語と「か」がそれぞれ一致すると考えると、不定語が削除され「も」や「か」をもつ句や「も」や「か」のみが残留している場合は、以下のように同様の振る舞いを見せることがわかる。どちらも、不定語が削除されると「誰が来ても」「誰が来たか」という解釈にはならず、「も」の残留と「か」の残留は同様に分析できることが予想される。本稿においても、「も」と音声的に具現化されない要素には一致関係があってはならないとする。

(130)A: 太郎が来ても部屋を開けないでね。

B: {太郎が来て／ $\emptyset$ 来て／ $\emptyset$ } も開けないよ。

(131)A: 誰が来ても部屋を開けないでね。

B: {誰が来て／# $\emptyset$ 来て／# $\emptyset$ } も開けないよ。

(132)A: 太郎が来たか教えてくださいませんか。

B: {太郎が来た／太郎が $\emptyset$ ／ $\emptyset$ 来た／ $\emptyset$ } か、わからないなあ。

(133)A: 誰が来たか教えてくださいませんか。

B: {誰が来た／誰が $\emptyset$ ／# $\emptyset$ 来た／# $\emptyset$ } か、わからないなあ。

「も」の周辺要素の削除に関しても、削除された要素と残された「も」との間に一致関係がない場合にしか許されず、LF コピーと「も」との一致は、統語計算の過程で照合されるべき素性が削除されないために容認されないということが予想される。ここから、本稿では「も」の削除、および「も」と結びつく要素の削除が許されないものには、「も」と他の要素との一致がかかわるとし、考察を進める。

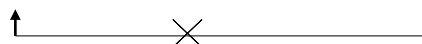
(134)a. 太郎は誰がビッグバンについて書いた論文も読んだ。



b. 次郎も誰が $\emptyset$ 書いた論文も読んだ。



c. *次郎も $\emptyset$ ビッグバンについて書いた論文も読んだ。



以上、「も」は不定語と一致関係にあり、その照合の相手が「も」を残して削除されてしまうと、容認されなくなるということが明らかとなった。本稿では、以下のような「も」の残留においても、一致という観点からとらえなおす。

(135)A: 履修している学生だけでなく、聴講している学生も発表するの？

B₁: 聴講している学生も、発表してください。

B₂: $\emptyset$ も、発表してください。

本稿では、Sato and Ginsburg (2007) や Sakamoto and Saito (2018) を支持し、(焦点タイプの) 助詞残留にも LF コピー分析が適用されとする。Sakamoto and Saito (2018) は、(136)のように音声的に空の要素が文脈から解釈されないことを指摘し、削除された要素が *pro*

や「それ」といった代名詞とは異なる振る舞いを見せることからゼロ形の代名詞ではないこと、(137)のように PF では問題のない(137B₂)のような応答が許されないことから、LF コピー分析を主張している。

(136) [メアリーはクラスのマドンナ的存在である。メアリー_iがクラスに入ると、]

a. [DP 彼女]_i-が 来た！

b. [DP *pro*]_i 来た！

c. *[DP Δ]_i-が 来た！ (Sakamoto and Saito 2018: 351 より)

(137) A: [DP 誰が書いた本]-も 面白いの？

B₁: [DP 誰が書いた本]-も 面白いよ。

B₂: *[DP Δ]-も 面白いよ。 (Sakamoto and Saito 2018: 354 より)

2.4.2. 助詞残留

本稿では、一致関係を示すテストとして、項削除・助詞残留の例を扱うが、削除の際に助詞だけが残る助詞残留がどのような現象として論じられてきたか、本稿の立場を明示しておく。先行研究では、主題を表す「は」の残留が注目され、「裸のハ (有田 2006, 2009)」や「提題タイプの助詞残留・主題助詞残留 (Topic Particle Stranding) (那須 2012、Nasu 2012、三原 2018)」と呼ばれる現象が、項削除 (Argument Ellipsis) や焦点化タイプの助詞残留には従来見られなかった特徴から異なる現象であると指摘され、議論されてきた。有田 (2006, 2009) により裸の「は」と「それは」を置き換えられない例が指摘されていること、ゆるやかな同一性 (Sloppy Identity) に基づく解釈が可能であることから、「は」の前の音声的に空である要素は代名詞 *pro* ではないことが明らかである。

(138) A: あの店にいつか行くことあるん？

B: {Ø は／＃それは}、私はないですね。 (有田 2009: 104 より)

(139) A: これどうしたらいいか知ってる？

B: {Ø は／＃それは}、知らんなあ。 (有田 2006: 4 より)

(140) A: 自分の車を_i、太郎が_{t_i}使っているよ。

B: Ø は、次郎も使っているなあ。 (自分の車 =^{OK} 太郎の車／^{OK} 次郎の車)

また、このような文頭で生じる主題助詞残留の現象は、「も」でも可能であることが指摘されている（三原 2018 他）。有田（2006, 2009）や那須（2012）は、項削除とは異なり、項全体が削除されるのではなく「は」が残るという点から「は」の残留が項削除とは異なる現象であることを主張しているが、「も」も同様の特徴をもつことから、少なくとも「は」の助詞残留と「も」の助詞残留は同様の現象であると言える。

(141) A₁: 田中さんも国際会議に参加しますよ。

B₁: Ø（は）、イギリスへ赴任されているんですね。

A₂: あと、山田さんも。

B₂: Ø（も）、イギリスにいらっしゃるんですか？

また、項削除は、項のみに言及される現象である。付加部が削除される(142bB)は「カフェで」と解釈されないことから、音声的に空の要素があると文脈から判断される削除は項にしか許されないものであるというのが従来の見解であったが、削除されている部分が項であるかどうかという点は、項削除が上記の残留と異なる現象であることを示す根拠とはならない。

(142) a. A: 太郎は本を読んだ。

B: 次郎も Ø 読んだ。

b. A: 太郎はカフェで本を読む。

B: 次郎も Ø 本を読む。

また、「は」の残留が文頭にしか現れないという点も項削除と区別されるべき根拠であったが、しかし、これに関しては、三原（2018）が「文頭」ではなく、引用文を含んだ ForceP 領域に生起することを指摘している。また、三原（1994）も指摘しているように、助詞残留でなくともかき混ぜ句を前に出せない「は」をもつ句があり、同様に「は」や「も」の残留が許される階層があると考えられるもの、付加対象の削除を許す「は」をもつ句の階層性が維持されているために「文頭」で生じる現象として分析されたい。ここから、「は」の残留を項削除と同様に分析できることを示していきたい。

(143) A₁: 佐藤さんはどこに行ったの？

B₁: *上海へ Ø は出張中だと聞いています。

A₂: 山田さんは？

B₂: *シンガポールへ Ø も出張中だと聞いています。

(144) A: いま、スイーツは何が人気あるの？

B: リサが、[Ø は ... 、ロールケーキが人気だ]って言ってたよ。(三原 2018: 90)

(145) A: 晴臣は、来年テクノが流行ると思ってるみたいだけど、どうなの？

B: オレも、[Ø は ... 、来年、かなりくる]と思うよ。(三原 2018: 90) ¹⁵

(146) a. 魚 {は／も}、鯛がいい。

b. 三和銀行 {は／も}、坪井君が名古屋支店に勤めています。(三原 1994: 197 より「も」を追記)

(147) a. #鯛が_i、魚 {は／も}、_tいい。

b. *名古屋支店に_i、三和銀行 {は／も}、坪井君が_t勤めています。(三原 1994: 125 より「も」を追記)

また、那須 (2012) や Nasu (2012) によると、助詞の残留には提題タイプ (Topic Particle Stranding) と焦点化タイプが存在する。提題タイプとは、いわゆる主題を表す句に見られる助詞残留、焦点化タイプとは、焦点を表すかき混ぜ句に見られる助詞残留である。

・提題タイプ

(148) A: 携帯はどの機種が流行ってるの？

B: Ø はソニーの機種が流行っています。(那須 2012: 8)

¹⁵ 有田 (2009) は、「は」の助詞残留に先行するのは「あー」のような感嘆詞に限られると述べており、「は」の助詞残留が許される従属節は、直接引用句であるという指摘も見られる。このようなタイプの助詞残留については、文頭にしか現れないという点から PF にて削除される現象である (Sato 2012, Sato and Maeda in press) という主張も見られる。上記の従属節が主節主語とは統語計算上切り離されるという分析も可能であるが、それでも本文の (145) は文末を「きます」に置き換えることが難しく、純粋な直接引用句とは区別して考えたい。音韻的な問題との関連については、今後より詳細にデータを観察した上で論じていきたい。

・焦点化タイプ

(149)A: (太郎じゃなくて) 次郎が花子を叱ったの？

B: {次郎が／~~〇~~が／*~~〇~~} 叱ったんです。(那須 2012: 2)

那須 (2012) によれば、提題タイプの助詞残留と焦点化タイプの助詞残留には、以下のような相違点が挙げられるため、それぞれ異なるアプローチが必要だという。

(150)(i) 主題化された構成素は再述代名詞と共起することができるが、焦点化された構成素は共起することができない。

(ii) 数量詞 (を含む構成素) の主題化は不可能だが、数量詞 (を含む構成素) の焦点化は可能である。

(iii) 主題化 > たぶん > 焦点化 の語順になる。

これをもとに「も」の残留のデータを考察すると、以下のように、提題として「は」の代わりに「も」が用いられた場合には提題タイプの特徴が、「も」が焦点化され強勢を伴って発音された場合には焦点化タイプの特徴が当てはまり、助詞の残留は助詞の種類ではなく構造と対応していることがわかる。(150 i)-(150 iii)の判断基準に沿って「も」の残留を観察すると、「も」が聞き手がもつ情報を訂正するなど強調されるべき要素として機能している場合、焦点化タイプの助詞残留と同じ振る舞いを見せ、提題的にはたらく場合、提題タイプの「は」の残留と同じ振る舞いを見せる。

(i) 再述代名詞との共起

(151)A: なんでインドネシアなの？

B: ~~〇~~ は、それはやっぱ流れで…… (Nasu 2012: 223 より)

(152)A: インドネシアの次はタイ？

B: ~~〇~~ も、それも流れで……

(153)A: 太郎は品川でもお土産を買ったの？

B: *~~〇~~ でも、太郎は (*そこでも) お土産を買いました。

主題句は再述代名詞が現れうるため、移動によって生じるのではなく、上位の階層の指

定部に基底生成される (Hoji 1985、Saito 1985) ことが指摘されている。残留が生じる句においても同様に基底生成されることが示され、また「も」も主題句として現れる場合、「は」と全く同じ振る舞いを見せる。

(ii) 数量詞 (を含む構成素、または量化表現)

(154) A: 男子の誰かじゃなくて女子の誰かに渡したの？

B: {女子の誰かに／Øに} 渡したんです。 (那須 2012: 3 より)

(155) A: 男子の誰かだけでなく女子の誰かももらったの？

B: {女子の誰かも／Øも} もらったんです。

この場合、「誰か」は英語の *someone* と対応することから、数量的なはたらきをもつ要素であると考えられるが、削除の見られない主題句においても、量化表現に「は」が付加した場合、その多くは対比の「は」として解釈される。

(156) #誰かは次郎の近くに住んでいる。

(157) #太郎か花子は次郎と会っている。

よって、主題を表す「は」と量化表現の共起が難しいという点は、提題タイプの助詞残留の特徴だというより、提題を表す句の特徴として提示されるべきであろう。

(iii) 主題化 > たぶん > 焦点化 の語順

(158) A: 太郎も大阪じゃなくて東京に行ったの？

B₁: *{東京に／Øに} Ø も行ったんです。

B₂: Ø も {東京に／Øに} 行ったんです。

(159) A: 太郎は大阪だけでなく東京も行ったの？

B₁: *{東京も／Øも} Ø は行ったんです。

B₂: Ø は {東京も／Øも} 行ったんです。

削除の有無にかかわらず、「も」が主題句として用いられる場合は、焦点句に先行し、焦点句として用いられる場合は、主題句に後続する構造をもつ。「たぶん」がそれらと共起す

る場合も同様に、残される要素が「も」であっても同様の語順となる。

(160) A: 太郎は君が留学することだけでなく、そのためにバイトすることにもも反対するんじゃないの？

B₁: (Ø は) たぶん Ø も反対するだろうね。

B₂: *たぶん (Ø は) Ø も反対するだろうね。

(161) A: 太郎も君が留学することに反対するんじゃないの？

B₁: Ø もたぶん (Ø に) 反対するだろうね。

B₂: *たぶん Ø も (Ø に) 反対するだろうね。

(162) A: 太郎は大阪だけでなく東京にもも行ったの？

B₁: Ø はたぶん Ø も行ったんだろうね。

B₂: #Ø も Ø はたぶん行ったんだろうね。

(163) A: 太郎も大阪じゃなくて東京に行ったの？

B₁: Ø もたぶん Ø に行ったんだろうね。

B₂: #Ø に Ø もたぶん行ったんだろうね。

以上、累加の「も」が残留した場合は削除前の階層構造が維持されることでその容認度が反映され、「も」という要素のみでは提題タイプ、焦点化タイプと定めることはできないことを示した。

表 4 提題タイプ・焦点化タイプの助詞残留と「も」の残留

	提題タイプ	焦点化タイプ	も
(i) 再述代名詞との共起	可	不可	可
(ii) 数量詞（または量化表現）	不可	可	可
(iii) $\alpha > \text{「たぶん」} > \beta$	α	β	$\alpha \beta$

また、提題タイプの助詞残留については、①文頭の主題（Sentence-initial Topic）にしか適用されないこと、②主文現象（Root Phenomenon）であること、③節の中で一回しか現れないことから、項削除（Argument Ellipsis）とは異なり、saP（Speech Act Phrase）の左周辺部

に位置する (Nasu 2012) としている。以上の指摘を saP の指定部が削除される現象であると考え、①saP の指定部は文頭の主題となること、そして②saP が最高の層となることが説明される。また、分裂 CP 仮説により、saP のスロットが一つしか設置されないとすれば、主題句の残留が一回しか現れないことも説明できる。よって、(164)のような階層を想定すると、「も」の残留、および提題タイプの助詞残留も、LF コピーとして分析できる可能性が残される。

(164) saP >> ForceP > TopP > IntP > TopP > FocP > TopP > FinP¹⁶

以上、提題タイプの助詞残留に特有の現象は階層が厳密に定められていることによるということが結論付けられた。本稿では、提題タイプの助詞残留、および「も」の残留は、項削除、焦点化タイプの助詞残留と同様の「削除」であるとし、同じ枠組みの中で扱っていきたい。「も」の残留が現れる可能性のある位置を以下に簡略化して示す。「も」の残留が現れるのは、saP 指定部、FocP 指定部であると予想される。

(165) saP は／も (提題) >> ForceP > TopP > TopP > FocP 焦点要素／も > TopP

よって、累加の「も」の残留に関して、素性照合後の「山田さん」の LF コピーに「も」が付加することを前提とすると、LF コピーと「も」との間に ϕ 素性や [Q] 素性の一致が認められないことが説明されるが、(167)のように「も」の付加対象によっては、異なる振る舞いを見せることがわかる。本稿では、各「も」、および「も」と結びつく他の要素の削除現象に関して一致という観点から分析する。

(166) A: 田中さんが卒業したらしいけど、山田さんも卒業したんだよね？

B: { $\emptyset$ も／ $\emptyset$ }、卒業したらしいですよ。

(167) A: 田中さんが卒業したらしいけど、どの学生も卒業したんだよね？

B: { $\# \emptyset$ も／ $\emptyset$ }、卒業したらしいですよ。

(168) PF: [$\emptyset$ も]卒業したらしいですよ。

¹⁶ 三原 (1994) に従うと、下から θ 純粹主題、 θ' 純粹主題、場面設定主題と主題句の生起位置は複数存在するが、分裂 CP 仮説に基づくと、本文(164)のような階層になる。

LF: [[{山田さん_[null]／どの学生_[null]}]も]卒業したらしいですよ。

2.5. 「も」の焦点と作用域

本節では、さらに、「一致」と「焦点」との関係にも触れておく。本稿では、「も」の性質を理論的な観点から考察する上で、「も」の特質である累加性に着目する。先行研究を概観し、「も」の累加性が理論研究においてどのように扱われるべきかを検討する。

従来の日本語記述文法では、「も」の累加性のかかり方について様々に議論がなされてきた。記述的なアプローチからとりたての「焦点」と「作用域」を定義付けた沼田（2009）は、以下の定義¹⁷から、日本語学におけるとりたての作用域とは、とりたて詞がとりたてられるものの最大範囲だと考えることができる。また、とりたての焦点とは、実際にとりたて詞によって影響を受ける要素の集合であると考えたい。

(169) とりたての焦点とは、とりたての作用域内にある要素で、文脈等の語用論的情報から、他との範列的な対立関係を集約的に表す要素（つまり「自者」）にとらえられる構成素の範囲である。最大の焦点は、作用域と一致する。（沼田 2009: 85）

(170) とりたての作用域とは、とりたて詞が文中で意味的に影響を及ぼしうる最大の領域で、当該のとりたて詞によって、他と範列的な対立関係をなすにとらえられる、述語句の範囲である。とりたての作用域は、とりたて詞の分布及び文脈等の情報という、統語論的側面と語用論的側面の両方から規定されるものである。（沼田 2009: 85）

本稿では、このようなとりたて詞のとりたて機能が統語論的に説明されるとし、「も」の累加の及ぶ範囲に関する観察を理論的な考察に繋げる。

2.5.1. 生成文法における作用域

生成文法で扱われる「作用域」は、「数量詞（Quantifier）や wh 語をはじめとする論理演算子（Logical Operator）の作用が及びうる領域（原口・中村(編) 1992: 420）」として議論さ

¹⁷ 沼田・徐（1995）では、とりたての作用域を「スコープ」、とりたての焦点を「フォーカス」と呼んでおり、その定義も若干異なるが、取り扱う対象はほぼ同じである。なお、沼田（1986）で扱われている「スコープ」は、沼田・徐（1995）における「スコープ」の定義とは大幅に異なり、沼田・徐（1995）の「フォーカス」、すなわち沼田（2009）における「焦点」に相当するものである。

れてきた。また、「ある言語表現の意味の作用する領域（=スコープ）は、その姉妹とその下に位置する言語要素（遠藤 2014: 15）」であり、作用域を生じさせる要素とその影響が及ぼされる要素との関係には、階層構造上の位置がかかわる。

しかし、英語の量化表現同士の意味関係に関しては、表面上の構造とその両者の意味関係が一致しないことがある。(171a)では、*someone* が一人だ (*someone* > *everyone*) という解釈も可能だが、*everyone* の一人一人に対応する *someone* が存在する、すなわち *someone* が複数人いる (*everyone* > *someone*) という解釈も可能である。この場合、*everyone* を受けて *someone* が複数解釈になるはずであるが、表面的な構造のままでは *someone* の方が高く位置するという点が、問題である。May (1977) は、表面的には現れない意味解釈 (LF: Logical Form) 部門、すなわち文が意味解釈されるレベルにおいて(171b)のような構造から(171c)のような構造へと非顕在的に *everyone* が上昇するというアプローチをとっている。*everyone* が *someone* より高く位置することで、*everyone* が *someone* に作用し、*someone* の複数解釈を可能にしていると説明している。

(171)a. Someone loves everyone.

b. [someone[loves everyone]]

c. [everyone_i[someone[loves t_i]]]

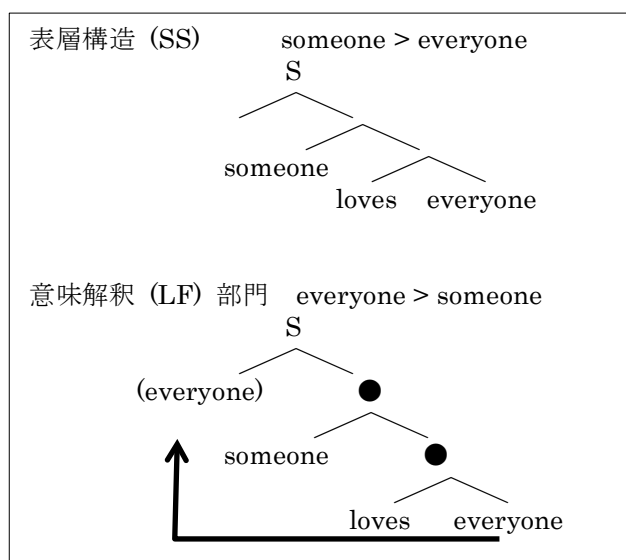


図 6 May (1977) による *everyone* の上昇

青柳 (2006: 126) はとりたて詞の焦点機能に対して、「量化詞の一種であるから、LF 表示において、作用域を確定していなければならない」とし、現代日本語の「も」の累加性に対しても、生成文法における作用域と結びつけられることを主張している。青柳 (2006) は、Kuroda (1965) の提案をもとに、「も」の作用が及ぶ領域を考察しているが、次節よりその概要と課題を述べる。

2.5.2. Kuroda (1965)

「も」の累加性の問題を取り扱った理論的な研究として、まず Kuroda (1965) が挙げられる。Kuroda (1965) は「も」の「広い焦点」(沼田 (2009) では「後方移動焦点」)に関する問題に対し、以下のように mo 添加 (mo-Attachment) そして mo 削除 (mo-Deletion) と呼ばれる派生が生じると提案した。Kuroda (1965) は、表面上では文中の一要素にしか見られない「も」が、意味上では文全体に影響を及ぼすという「も」の陳述的な性質を前提として考察を進めていることがわかる。

(172) 深層構造 : [X-NP-Y]-mo

↓

mo 添加 : [X-NP+mo-Y]-mo

↓

mo 削除 : [X-NP+mo-Y]-~~mo~~

(Kuroda 1965: 80、および青柳 2006: 124 より、筆者加筆)

Kuroda (1965) では、「も」が文頭の要素や述語に後続した場合、命題全体に影響を及ぼすことは説明できているが、目的語や場所句など、文の内部に生じる他の要素に「も」が付加した場合の分析は十分ではない。また、「も」が文中に複数見られる場合、一つの「も」が文外において分割された後添加されるのか、「も」が文外に複数生じることが可能なのかについては述べられておらず、このようなモデルでは極限の「も」やばかしの「も」といった「も」の多様性に結びつかない。

(173) 花子も、太郎が渋谷でもお花も買ったと言っていたよ。

2.5.3. 青柳 (2006)

青柳 (2006, 2008) でも、「も」は一種の量化詞であるため作用域 (Scope) をもつとし、「焦点の拡張 (Propagation of Focus)」が生じる例から Kuroda (1965) の上記の提案をもとに、生成文法のより新しい枠組みで係助詞の作用域を検討している。青柳 (2006, 2008) では、以下のように「も」によってとりたてられる範囲を作用域と関連付け、LF 部門における c-統御範囲、「も」の場合は動詞句 (vP) を潜在的な作用域とすることができるとしている。

(174) 昨日のパーティーでは、花子がダンスを踊っただけでなく...

- a. 太郎が ピアノを 弾きも した。
- b. 太郎が ピアノも 弾いた。
- c. 太郎も ピアノを 弾いた。 (青柳 2006: 123)

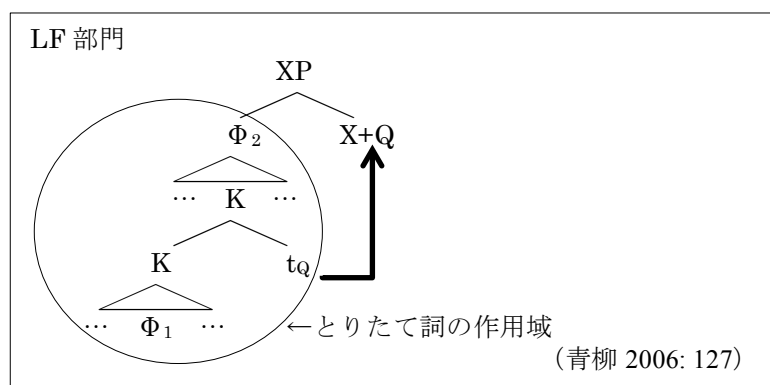


図 7 青柳 (2006) によるとりたて詞の作用域

しかし、日本語の「も」と焦点の位置関係には、制約が見られる。(175)のような例の場合、日本語では「お母さん」は同一人物であってはいけない。また、「と」節に「も」を付加した例を観察すると、「来週と再来週の月曜日に小テストがある」という発話が先行された場合、(176b)よりも(176c)の方がよく使用されるだろう。すなわち、「も」による「焦点」は、付加対象の一部要素に純粹にかかることができず、「も」をもつ句全体に焦点がかかっているという見方が望ましいということである。よって、Kuroda (1965) のように「も」がどの位置にあっても統一的に説明されるということではなく、「も」の生起位置によって焦点

の及び方が変わると考えられる。(文脈上とりたて詞によってとりたてられている範囲を〈〉山括弧で示す。)

(175)a. 〈花子〉のお母さんが来た。#〈太郎〉のお母さんも来た。

b. Hanako's mother came. Taro's mother also came.

(176)a. 〈来週の月曜日に〉小テストがあると言っていた。

b. 〈再来週の月曜日に〉同じ小テストがあるとも言っていた。

c. 〈再来週の月曜日に〉も同じ小テストがあると言っていた。

また、青柳(2006)は、目的語に「も」が付加されている上記の(174b)の例が容認されることを前提としているが、(177)の例では、「も」の容認度に明らかな差があり、(174b)が予想されるには、いくつかの条件が必要である。¹⁸

(177) 〈花子が太郎を蹴り〉、...

a. * 〈太郎が花子も蹴った〉(こと)。

b. 〈太郎も花子を蹴った〉(こと)。

c. * 〈次郎が花子も蹴った〉(こと)。

以下の(178)や(179)の(a)の文のように「も」が存在しなくても二つの事柄が対比され容認されることから、(174b)も非文ではない。問題は、「も」による焦点の範囲に対比されるべき要素が全て含まれていないということである。また、以下の(178)や(179)の(b)の文のように音韻的に強調された場合、「も」の焦点の及ぶ範囲にない要素があっても容認されやすくなる。この場合、「も」をもつ句も焦点性を帯びなければならないことから、焦点要素はvP層にあるFocP¹⁹の指定部にかき混ぜられ、「も」句は痕跡をc-統御していると考えることが

¹⁸ 沼田(2008)も、「も」が目的語に付加しており、かつ主語も「も」のスコープの中に含まれるという例は、主語に「も」が付加される例と比較すると容認度に明らかな差が生じると述べており、青柳(2006)と異なる観察を示す要因を明らかにする必要がある。

¹⁹ 前田(2013)は、CPを細分化したLuigi Rizzi等によるカートグラフィーの考え方をvPにも適用して分裂vP仮説を適用し、従来vPとして一括して扱われていたアスペクトやヴォイスなどの要素を各階層に位置付けた。前田(2013)に従うと、以下のような階層が設定される。

5) [AspP[TopP*[FocP[TopP*[VoiceP]]]] (前田2013: 166より)

できる。

(178)a. 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にノートを書させ〉てあげた。

b. 〈太郎に教科書を貸し〉、〈_{[FocP 次郎に_i ノートも_j _{[VoiceP t_i _[VP t_j 写]させ]]}〉てあげた。}

(179)a. 〈母が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈父が娘に牛乳を買ってくるよう頼んだ〉。

b. 〈母が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈_{[FocP 父が_i 娘に_j 牛乳も_k _{[VoiceP t_i _{[CP _{[VoiceP t_j _[VP t_k 買っ]]てくるよう]頼ん]だ]}〉。}}}

またさらに、青柳（2006）の主張では説明できない現象として、日本語学習者の使用に対して日本語母語話者が「誤用」と判定している文がある。(180)は日本語の勉強に関する話題だが、文脈から、「学校で習う」、「他の時間に自習する」という要素が対比されることが明らかである。学習者の使用では、主語となりうる「自分」に「も」が付加している。下線部が母語話者による移動の対象となるものであり、母語話者による訂正案は、「は」のところに「も」が移動するというものである。この例では、「も」より低い位置には「よく勉強する」しか見られず、この「も」の位置では対比されなければならない「ほかの時間」が作用域に入らない。そのため、母語話者は(180)を無意識的に「誤用」として判断したと考えられる。

(180)それから、学校の方は自分でよくならって、[ほかの時間はも][自分も]よく勉強しよう]と思っています。(寺村（1990）、中国、6981)

また、(181)は「言葉を学ぶ」と「文化を学ぶ」ことが対比され、「学ぶことも」の「も」が誤用とされる例である。「文化も」は「役に立つ」の主語ともなるため「学ぶこと」より高く位置すると考えることができ、その位置関係から「学ぶこと」に意味的影響を及ぼすことができると考えられる。一方「学ぶこと」は、「文化」に意味作用を及ぼすことができず、付加する「も」が過剰だと判断されるのである。

(181)また作文をして見てそれを正しく直した後、声を出して読んで見ることもいいだと思う。最後に外国人友達に会うのだ。言葉だけではなく[文化も][学ぶことも]ができて]]たくさ役に立つだと思う。(日本語学習者作文コーパス、韓国語、中級、KG094)

生成文法における意味の計算過程において、多くの現象が LF 部門における要素上昇により解決されているが、本稿では、「も」に関連する問題に対して顕在的な位置関係のみで解決できることを示し、LF 部門における統語論的操作をできるかぎり簡潔化することを試みる。

2.5.4. 「も」による焦点

とりたて詞のもつ焦点性は、É. Kiss (1998) に従うと統語論的操作が適用される識別焦点 (Identificational Focus) ではなく、情報焦点 (Information Focus) である。É. Kiss (1998: 248) によると、識別焦点は統語計算の外ではたらく情報焦点とは以下の点において異なるという。

- (182)(i) The identificational focus expresses exhaustive identification; information focus merely marks the nonpresupposed nature of the information it carries.
- (ii) Certain types of constituents, universal quantifiers, *also*-phrases, and *even*-phrases, for example, cannot function as identificational foci; but the type of constituents that can function as information focus is not restricted.
- (iii) The identificational focus does, information focus does not, take scope.
- (iv) The identificational focus is moved to the specifier of a functional projection; information focus, however, does not involve any movement.
- (v) The identificational focus is always coextensive with an XP available for operator movement, but information focus can be either smaller or larger.
- (vi) The identificational focus can be iterated, but information focus can project.

まず、(182 i)について、日本語の「も」の基本的機能は「累加」であるため、当然排他性は見られない。しかし、以下の文であれば、新情報として焦点を置くべきなのは、「誰」であり、実際に日本語の「も」は、Vallduví (1995) や高見 (1998) の議論するような「新情報」を示す要素と完全に一致するわけではない。

(183) A: 誰がケーキも食べたの？

B: 太郎だよ。

また、É. Kiss (1998: 245) は、識別焦点について以下のように定めている。「も」は、確かに排他的下位集合 (Exhaustive Subset) を示すものではないが、可能性のある他の集合を想定するという点では類似しており、識別焦点の機能を「排他性」に限らなければ「も」にも適用される特徴をもつと考えることができる。

(184) The function of identificational focus: An identificational focus represents a subset of the set of contextually or situationally given elements for which the predicate phrase can potentially hold; it is identified as the exhaustive subset of this set for which the predicate phrase actually holds.

次に、(182 ii) に関して、識別焦点となるものは、分裂文が可能であるが、ハンガリー語では、*also* もつ句が離れる分裂文が許されないことを示している。しかし、日本語の「も」をもつ句は、分裂文が許される。よって、日本語の「も」とハンガリー語の *also* に相当する語とは、統語論的特徴が異なり、同一の情報焦点として扱う必要はないと判断される。

(185) *Mari egy kalapot is nézett ki magának.

Mary a hat.ACC also picked out herself.DAT

'It was also a hat that Mary picked for herself.' (É. Kiss 1998: 252)

(186) 太郎を知っているのは、次郎もだ。

(182 iii) に対し「も」が作用域をもつこと、(182 iv) に対し「も」が指定部移動を要する場合があること、さらに (182 v) に対して「も」の焦点はその生起位置によって定まることを次章より示し、識別焦点として扱えることを主張する。最後に、(182 vi) に関して、日本語の「も」は、焦点の拡張も文中での多重生起も許されるため、どちらの特徴も有していることがわかる。

(187) 太郎は、花子が〈朝ごはんを食べたこと〉、〈公園へも行ったこと〉を知っている。

(188) 太郎は、花子が公園へも行ったことも先生にも伝えた。

上記に従うと、「も」は(182 i)-(182 ii)を見る限りでは、情報焦点であるが、(182 iii)-(182 vi)に述べられる識別焦点の特徴も有する。現代日本語の「も」が、識別焦点としての特徴と、情報焦点としての特徴を合わせもつことから、本稿では、日本語において統語論的操作が適用される識別焦点と統語論的操作が関係しない情報焦点は連続体であるとし、「も」のもつ統語論的な特徴から、焦点素性としての「も」の統語論的な性質を明らかにする。

2.5.5. 「も」による焦点の拡張

以上、「も」による焦点、作用域の決定には、「も」の統語論的操作がかかわるということ論じたが、Shudo (2002) に従うと、「も」の作用域が命題まで及ぶとき（焦点の拡張）に語用論的な解釈が必要である。(189a)は、「花子(x)」も「太郎」も「就職が決まる」といった性質(F)をもち、(190)のように命題内の要素を用いて「性質 F をもった要素が x の他に存在する」と示すだけでも意味は十分に表示されるが、(189b)では、「太郎」が「就職が決まる」という性質(F)を有していないため、「太郎が専門学校を卒業する」と「花子(x)が就職が決まる」を文脈上含む「～が成長して進路が決まる」という事態を想定しなければならない。そのため(191)のように「文脈に関連性があり ($R(H(x), C)$)、F を文脈上必ず伴う ($F(x) \sqsubseteq_c H(x)$) 性質 H」が必要となる。本稿においても Shudo (2002) の主張するとおり焦点の拡張が生じると語用論的な推論がはたらくとし、考察を進める。

(189)a. (〈太郎〉も) 〈花子〉も就職が決まった。

b. (〈太郎も専門学校を卒業し〉,) 〈花子も就職が決まった〉。

(190)MO (x, F)

x is a constituent marked by mo;

F is a property

Proposition: F(x)

Presupposition: $\exists y [y \neq x \ \& \ F(y)]$ (Shudo 2002: 4-5)

(191)MO (x, F)

Host proposition: F(x)

Mo-presupposition: $\exists y \exists H [y \neq x \ \& \ H(y) \ \& \ F(x) \sqsubseteq_c H(x) \ \& \ R(H(x), C)]$ (Shudo 2002: 57)

2.6. 多重排出モデル

本稿では、「も」にかかわる統語論的操作を分析する上で、Uriagereka (1999) 等による多重排出 (Multiple Spell-Out) モデルを採用する (図 8 参照)。多重排出モデルを採用すると、排出は何回でも可能となる。また、従来表面的に現れる音声解釈 (PF: Phonetic Form) 部門、意味を解釈するレベルである意味解釈 (LF: Logical form) 部門が設定されていたが、文は位相 (Phase) ²⁰ごとにそれぞれ併合 (Merge) や一致 (Agree) などの操作を適用してから音声にかかわる調音・知覚システム (Articulatory-Perceptual System)、意味にかかわる概念・意図システム (Conceptual-Intentional System) に排出 (Spell-Out) ²¹されるという。

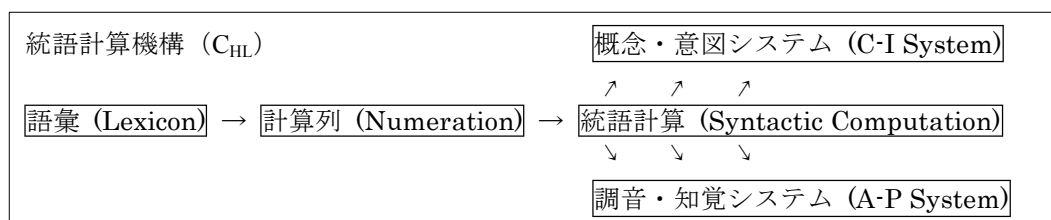


図 8 多重排出モデル

また、従来 LF で行われるとされてきた操作は、概念・意図システムに送られるまでの言語計算システムである狭義の統語論 (Narrow Syntax) において計算されるという立場をとる。すなわち、文は、統語計算において付加対象や生起しうる階層が決定したのち、 ϕ 素性の一致や、[wh]素性の一致、作用域の決定を経て概念・意図システムにて読み取り可能な構造が送られるということを前提とする。本稿では、上記のモデルから狭義の統語論 (Narrow Syntax) にて一致が生じるということを前提とし、「も」の多様性について議論していきたい。

²⁰ Chomsky (2000) 他では、排出が行われる単位として CP と $v(*)P$ を位相 (Phase) と呼ぶ。DP も位相として含まれることがあるが、位相に関する議論は別稿に譲る。Chomsky (2000) 等による位相不可侵条件 (PIC: Phase Impenetrability Condition) より、言語計算も位相の度に行われるため、すでに排出された位相は「言語計算が完了したものとして一定の部分を除いて言語計算にとっては見えなくなる (中村・金子・菊地 2001: 253-254)」。以下のように「も」が位相より外側に位置する場合、排出された後の構造の中に「も」の累加性が及ばないため、その中の要素に影響を与えることができないと考えられる。

6) a. [英語を研究する人]も採用する。

b. [英語も研究する人]を採用する。 (沼田・徐 1995: 179)

²¹ より最近の議論では転送 (Transfer) と呼ばれるため、多重転送モデル (Multiple Transfer Model) としても良いと考えられるが、本稿では、モデルに関して深く議論しない。

第3章 「も」の階層構造上の生起位置

本節では、多様な用法をもつ「も」の各生起位置について、まず第2.2節における議論をもとに各「も」の付加対象(X^0 、または $X^{\max}$)を提案し、また第2.3節における議論をもとに各「も」が生起する階層(vP、FinP、またはForceP内)を明らかにする。

3.1. 累加の「も」の付加対象と階層

とりたて詞は、宮田(1948)、寺村(1991)等も述べているように、格助詞などとは異なり文中の様々な要素に付加する点が特徴的である。累加の「も」の分布に関しても多くの研究が見られるが、第1.1.2節、第2.1節にて触れたとおり、「も」の文中の分布は比較的自由であり、統語論的にも必須の要素ではない付加詞である。

(192) 太郎が来た。

(193) 太郎も来た。

生成文法の観点から「も」を分析している青柳(2008: 40)も「も」が付加しうる要素に関して「とりたて詞は統語的に付加詞であるがゆえに、他の要素を選択せず、選択もされない」と述べている。このように、従来の研究では、とりたて詞の生起分布について付加が可能な要素が列挙されているのみであり、生起位置の条件に関して特に注目されることはなかった。

沼田・徐(1995: 190)は、終助詞等を含む、奥津(1974)の文末詞にあたるもの、文頭の応答詞、「けっして」「やっ」とや「意外にも」「うまいことに」「辛くも」等の陳述副詞や文副詞、主題や推量の「だろう」「まい」に「も」が付加できない(フォーカスになれない)という点を指摘しており、実際には「も」が付加できない要素も多く存在することがわかる。

(194) *姉もの友人(名詞+の)

(195)*大きなも家具を運ぶのは大変だ。(連体詞)

(196)*花子は泣きも叫んだ。(語彙的複合動詞)

(197)??私たちは助けも合っている。(統語的複合動詞)

また、青柳 (2006) は、とりたて詞が必ず何らかの基体 (Host) と形態的に併合しなければならぬという接語的 (Clitic) な性質をもつことから、形態部門²²においてとりたて詞と主要部が併合するということを主張している。

(198)a. 統語部門：最大投射 $X^{\max}$ に付加する

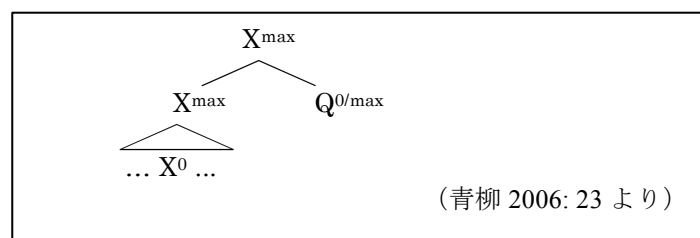


図 9 青柳 (2006) によるとりたて詞の生起

b. 形態部門： X^0 と形態的に併合する

$$\dots X^0 + Q^0 \dots$$

しかし、累加の「も」は以下のように助詞残留が可能であり、「も」が新たに付加される場合であっても先行文脈から明らかであれば、「も」が付加対象となる要素を顕在的に必要としないことがわかる。よって、累加の「も」は主要部に付加する必要がないと考える。

(199)A: 今日太郎だけじゃなくて花子も呼んだんだよね？

B: うん、 $\emptyset$ も呼んだよ。

(200)A: 田中さんが卒業したらしいけど、山田さんは？

B: $\{\emptyset \text{ も } \# \emptyset\}$ 、卒業したらしいですよ。

²² 青柳 (2006) は、形態部門は排出後の PF 部門に送られる過程で生じることを前提としており、「語順は PF 側の派生の形態部門 (Morphological Component) で決定する (青柳 2006: 5)」という立場を取っている。

また、累加の「も」の名詞句内の生起が容認されないという観察に対して、「も」が統語部門において最大投射に付加すると考えれば解決するだろう。

- (201)a. ジョンは洋食が好きだが、[_{DP} 日本の料理]も食べられる。(DP：名詞句)
b. *ジョンは洋食が好きだが、[_{DP} 日本もの料理]が食べられる。
- (202)a. コンサートは東京で行われるが、[_{PP} 大阪で]も行われる。(PP：後置詞句)
b. *コンサートは東京で行われるが、[_{PP} 大阪もで]行われる。
- (203)a. 花子は先日旅行へ行き、[_{VP} 高級バッグを買い]もした。(VP：動詞句)
b. *花子は先日旅行へ行き、[_{TP} 高級バッグを買った]も。
- (204)a. タイ料理は辛いが、[_{AP} とても甘く]もある。(AP：形容詞句)
b. *タイ料理は辛いが、[_{AP} とてもも甘い]。
- (205)a. 太郎は上司に次郎が遅刻すると伝え、[_{CP} 花子が仕事を休むと]も伝えた。(CP：補文)
b. 太郎は上司に次郎が遅刻すると伝え、[_{CP} 花子が仕事を休むもと]伝えた。

次に、累加の「も」の属する階層について、榎原（2015）では、「も」は *vP* 内に生起することを述べている。榎原（2015）は、井上（2011）による真正モーダル²³に「も」が付加

²³ モダリティ要素の中で「も」が付加できるものは、過去形にすることができる。過去形にできるモダリティとは、仁田（1989）、井上（2011）によると、「真正モーダル」とは対立する「擬似モーダル」である。仁田（1989）では、「擬似モーダル」は形式自体が過去や否定になったり、話し手以外の心的態度を表したりすることがあると指摘されている。「かもしれない」「ようだ」「らしい」「たい」「つもりだ」「(し) そうだ」「はずだ」「にちがいない」などが、擬似モーダルの例としてあげられる。

7) a. 真正モーダル

- (i) 日本語では、発話行為のモーダルが範疇として独立しており、認識モーダルと区別される。
- (ii) 日本語の真正モーダルには時制の分化がない。
- (iii) 「だろう」は、先行文に時制の分化を許す。「だろう」を除いて、真正モーダルは先行文に時制の分化を許さない。すなわち、先行文は否定形時制辞（non-finite tense）を持つ。
- (iv) 南（1974）の C の従属節には「推量」の認識モーダル「だろう」「まい」が現われることがある。他の真正モーダルは引用節を除く他の従属節には許容されない。
- (v) 主文は、発話行為のモーダルが一つ選ばれて始めて文として成立する。定形時制辞で終わる文と認識モーダルで終わる文は、表面上発話行為のモーダルを欠いているように見えるが、音形を持たない発話行為のモーダルが選ばれていると考える。

b. 擬似モーダル

真正モーダルの他に、擬似モーダルが多数存在する。これらは(i)時制の分化を許し、

できないことを指摘している。井上（2011）によると、真正モーダルは、主文内から認識モーダル、発話行為のモーダルへと要素が移動することによって文として成立する。

(206)a. *明日は風が吹くかもしれないし、雨が降るでもあろう。（だろう）

b. *明日は雨が降るだろうた。

(207)a. *（雨が降るそうだ。）風が強くなるそうでもある。（伝聞・そうだ）

b. *風邪が強くなるそうだった。（いずれも榎原 2016: 34）

一方擬似モーダルは、IP を補部とする述語 V をもつという。すなわち擬似モーダルは主文の VP 内に生起させることができるということが明らかである。よって、累加の「も」は VP に付加できることが示される。

(208)a. 彼は先に帰ったようでもある。（ようだ）

b. 彼は先に帰ったようだった。

(209)a. 彼に素直にあやまるべきでもある。（べきだ）

b. 彼に素直にあやまるべきだった。

(210)a. （北海道物産展が行われるらしい。）バーゲンが行われるらしくもある。（らしい）

b. バーゲンが行われるらしかった。（いずれも榎原 2016: 31）

三原（2012）に従えば、vP 内に生起できる要素は、A の段階に属する階層にあるということを表す。一方、沼田（1989）では、南（1974）に従い属格の「の」の直前に生起できる要素は A 類従属節内の要素であるという。沼田（1989）の分析を援用すると、累加の「も」は名詞句内には生起されず、B 類従属節の中に位置することが可能であるため、B 類に属する階層であるということになる。

(211)*北海道からもの応募（沼田 1989: 166 より）

(212)（彼は盲腸の時以外に 3 年前）足を折つても、この病院に入院している。（沼田 1989: 166）

(ii)否定形でも現われ、(iii)話し手以外の者の見解に対する認識を表わすことができ、
(iv)真正モーダルを加えて重出可能であり、(v)先行文にも時制の分化を許す。

（井上 2011: 16-17）

より)

(213)[親が危篤の時にも舞台を休まないで]頑張った。(沼田 1989: 167 より)

属格の名詞句の中に含有されれば A の段階の要素となることは、実際に以下のように、A 類従属節が属格の「の」の直前に生起可能であることから支持されるだろう。

(214)a. [テレビを見ながら]の食事 (A 類従属節)

b. *[晴れたら]の運動会 (B 類従属節)

c. *[電車が遅れたから]の遅刻 (C 類従属節)

しかし、属格の前に A 類従属節を生起させると、累加の「も」は属格の前節内に生起可能であり、A の段階の要素であると考えることができる。南 (1974) は、助詞の「の」が後続していても B の段階のものがあることを指摘しているが、沼田 (1989) の指摘する属格の直前位置は、後ろの「の」との接続が可能かどうかという属格との形態論的環境がかわり、従属節の階層の問題ではないと考えられる。

(215)[仕事もしながら]の子育ては想像以上に大変でした。(https://qa.mamari.jp/question/3093349)

(216)何年もやってきて慣れた手つきの方が新米にコツを伝えながら、[おしゃべりも楽しみつつ]の作業が続きました。(http://www.sakai015-office.jp/article/14255961.html)

以上より、累加の「も」は南の階層構造においては A の段階、すなわち vP 内の最大投射に付加するということが明らかになった。

3.2. 極限の「も」の付加対象と階層

3.2.1. 不定語と結びつく「も」の付加対象と階層

日本語の疑問を表す Wh-句 (だれ、なに、いつ、どこ、どの、……) は不定語 (Indeterminate Pronominals) と呼ばれている (Kuroda 1965、Tsai 1994)。不定語と結びつく「も」は、「全て」を意味する全称量化の表現効果をもつが、以下のような助詞残留は全称を表すものとして現れる「も」(以下、全称の「も」と呼ぶ) としては容認されにくく累加の「も」とし

ては容認されることが明らかである。全称の「も」は以下の例から、「も」のみの残留が許されず、付加対象を明示する必要があるため、青柳（2006）や Hiraiwa (2005ab) の主張のとおり主要部に直接付加する構造をもつことが予想される。

(217) A: 先生は一人だけじゃなくてどの子も叱りましたか。

B: # $\emptyset$ も、叱りました。（全称の「も」）

(218) A: 先生は次郎だけじゃなくて太郎も叱りましたか。

B: $\emptyset$ も、叱りました。（累加の「も」）

不定語と結びつく「も」が D 主要部として「誰も」「何も」を出発点とし顕在的な主要部移動（Head Movement）をすると主張する Takahashi (2002) は、以下のように上昇した「も」が元位置を c-統御していなければならないという制約があるとしている。「も」が不定語以外の主要部に付加することを提案しても、不定語は「も」によって値を与えられなければならないため、(219)や(220e)は容認されないことが説明される。

(219) a. *[誰- t_i が書いた本が][学生も $_i$]感銘させた。

b. *[学生も $_i$][誰- t_i が書いた本を]読んだ。 (Takahashi 2002: 584 より)

(220) a. 先生は〈どの学部の学生〉も誘った。

b. [TP[DP 先生は][ν P[DP[どの学部の学生]D+も]誘っ]た]。

c. 先生は〈どの学部もの学生を〉誘った。

d. [TP[DP 先生は][ν P[DP[DP どの学部]D+も]の学生を誘っ]た]。

e. *先生も 〈どの学部の学生を〉誘った。

f. [TP[DP[DP 先生]も][ν P どの学部の学生を誘っ]た]。

また、「も」の主要部移動では説明できない例が存在する。²⁴Takahashi (2002) は「も」が D 主要部であり、作用域移動（Scope Shift）のためにその移動先の付加対象が量化的（Quantificational）でなければならないことを示している。「も」が D 主要部であるとする

²⁴ 現代日本語では、以下のように「も」が不定語と顕在的に直接結びつくことが許されないことから、なぜ主要部移動が生じるのかという点を明らかにしなければならない。

8) a. [誰が来て誰が来なくて]もあなたは来ましたか。

b. *[誰もが来て、誰もが来なくて]、あなたは来ましたか。

ならば、動詞句や後置詞、形容詞に後続できる「も」は、D 主要部ではない他の範疇の要素であると説明しなければならない。不定語と結びつく「も」は、以下の例が可能であることから、付加する範疇を選ばない同一の要素であると考えたい。

(221) 太郎は何を食べもする。(VP)

(222) 何からも逃げてきた。(PP)

(223) こどもってのはみんな魔法を使えるわけで、彼女らにかかれば世界はどんな色にでもどんなに楽しくもできてしまいます。(http://brasileiro.jugem.jp/?eid=21) (AP)

ただし、Takahashi (2002) も指摘しているように、以下のような引用の「と」節以降に直接付加した場合は、否定極性とならなければならないことが指摘されている。不定語と「も」の距離が遠すぎるために他とは異なると考えられるが、本稿では、こういった極性を示す「も」も考察の対象に含め、統一的に分析していきたい。

(224) a. *誰が好きだと言いもした。

b. 誰が好きだと言いもしていない。

(225) a. *誰が好きだとも言った。

b. 誰が好きだとも言っていない。

(226) a. *太郎は誰を花子に馬鹿だと言いもした。

b. 太郎は誰を花子に馬鹿だと言いもしなかった。(三原・平岩 2006: 244 より)

また、沼田 (1989) のテストを援用すると、不定語と共起する「も」は属格の「の」の前に生起させることができ、当然目的語としてもはたらくため、不定語と結びつく「も」は A の段階に属すると言える。

(227) 自転車に取り付けるライトは、その自転車に乗る使用者自身だけでなく、道を歩くどの人もの安全に関わってくるため、適当に選ばずにしっかりとした基準を持って慎重に選ぶ必要がある。(http://u-note.me/note/47505836)

(228) 教師は、どの子もの成長を望み、そのための努力を惜しまないことが大切な職業で、単に好きだからなってよい職業だとは思えません。(http://www3.ssj.gr.jp/himeji/sosa-es/)

よって、不定語と結びつく「も」も基本的には付加対象となる範疇を選ばず、A の段階で生起する要素であるということが言える。付加対象については、主要部付加であることを主張するが、第 4 章において一致の観点からもより深く議論する。

3.2.2. 数量表現と結びつく「も」の付加対象と階層²⁵

数量詞に付加する「も」は、(229a)や(230a)のように数量の大きさや小ささを強調するはたらきをもつ。しかし、日本語母語話者には「全て」「両方」などといった普遍数量詞との共起は容認されない。(229b)や「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」から得られた(230b)のようなデータは特に中国語を母語とする日本語学習者に顕著に見られるが、日本語では普遍数量詞への「も」の付加が許されない。

(229)a. 学生が 100 人も来た。

b. *学生が全員も来た。

(230)a. 花子は家で 3 ヶ国語も使う。

b. A: おうちでは中国語ですか？日本語ですか？

B: *あの一、両方も使います。(I-JAS、中国語、JJE41-I、00540)

本節ではこれらのデータを出発点とし、「も」と各数量詞の生起位置、共起に関するデータを分析することで「も」と数量表現の統語論的な関係を明らかにする。

3.2.2.1. 数量表現の統語構造

まず、「3 人」や「5 冊」といった数量的数量詞と名詞句の統語論的關係について、岩田(2013)より、図 10 のとおり①Q ノ NC 型([[[NQ]ノ][NP]])、②N ノ QC 型([[[NP]ノ][NQ]])、③NQC 型([[[NP][NQ]])の三つ(Q は数量詞、N は名詞、C は格である)を主な基本的な構造として考える。

²⁵ 本節は榎原(2017a)から内容を大幅に加筆修正したものである。

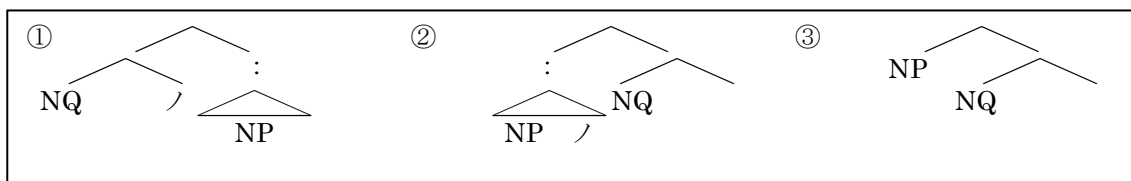


図 10 数量表現の基本構造

一般に、数量詞の遊離は、名詞句の移動の過程で数量詞が残留したとものとされている。Watanabe (2008) の DP の構造に従い①Q / NC 型、②N / QC 型、③NQC 型の数量表現と名詞句との構造を図示すれば、それぞれの派生過程は以下のように示せるだろう。ただし、②に関しては、「N のうちの Q」という解釈とならなければならないため、左に新たに DP を必要とする。

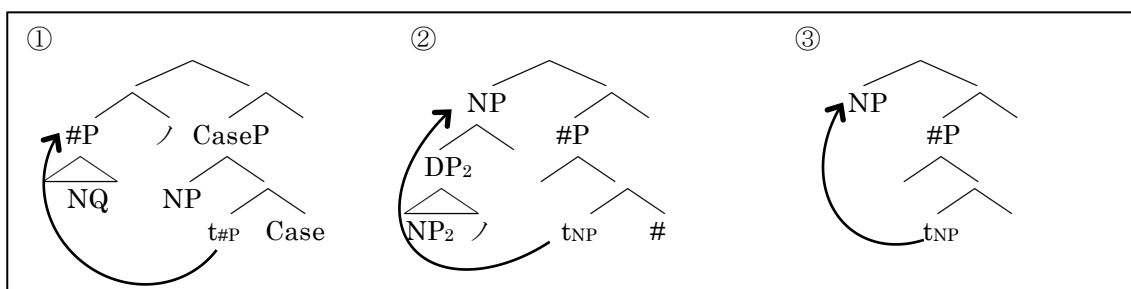


図 11 数量表現と名詞句の派生

数量的数量詞 (NQ: Numeral Quantifier) と普遍数量詞 (UQ: Universal Quantifier) の位置関係については、Ochi (2012) や Fitzpatrick (2006) によっても議論されており、(231)より、日本語の「全員」「すべて」といった普遍数量詞が「30 人」「6 本」などの数量的数量詞より外側に位置するということが明らかである。

- (231)a. 学生 30 人 (が) 全員 やってきた。
 b. *学生 全員 (が) 30 人 やってきた。

Ochi (2012) は、数量的数量詞は類別詞 (Classifier) を主要部、普通名詞を補部、数詞を

指定部とする CLP²⁶という構造をもち、さらに数量的数量詞句を補部とし、普遍数量詞を主要部とする $\forall P$ をその上に形成すると説明している。普通名詞が上昇し、DP などの指定部となることで、数量詞の残りの部分が元位置に残るという。

(232) [XP[NP N] [$\forall P$ [CLP 数詞 t_{NP} 類別詞 CL] 普遍数量詞 UQ]X]



(233) [DP[NP 学生][$\forall P$ [CLP 30 t_{NP} 人 CL]全員 UQ]が]やってきた。



(234) [DP[NP 学生]が][$\forall P$ [CLP 30 t_{NP} 人 CL]全員 UQ]やってきた。



UQ の生起する位置をデータでもって観察すると、名詞句と数量詞のどの構造をとっても UQ が「30 人」と名詞が含まれる複合的な句に付加したものや複合的な句の後方に離れて位置しているものが容認されることがわかる。

①Q ノ NC 型

(235)[30 人の学生ら]全員が来た。

(236)[30 人の学生ら]が全員来た。

②N ノ QC 型

(237)[学生の 30 人ら]全員が来た。

(238)[学生の 30 人ら]が全員来た。

③NQC 型

(239)[学生 30 人ら]全員が来た。

(240)[学生 30 人ら]が全員来た。

²⁶ Nakanishi (2008) では、残留される数量詞を遊離数量的数量詞 (Floating Numeral Quantifier) と呼び、構造を示していた。数量表現の詳細なラベルや構造については、主に Watanabe (2008) を基に議論を進めるが、本稿において、複雑な派生過程を想定する必要はない場合は Ochi (2012) による表示も併用する。Nakanishi (2008) やそれぞれの相関性については、別稿にて検討したい。

このような例から提案される UQ のみの遊離が許される構造は、図 12 のように示される。
 ①Q ノ NC 型、②N ノ QC 型、③NQC 型のどの型においても UQ のみを切り離すことが許され、UQ によって付加されていた CLP やその中の要素が移動していくのである。

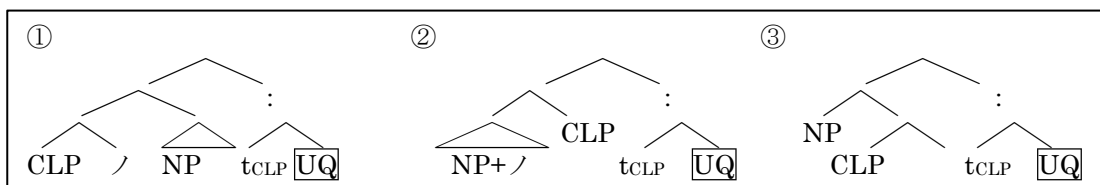


図 12 UQ のみ遊離する場合の統語構造

次に、その他の例を観察すると、UQ は NQ 「30 人」に後続した形でなければ許されることがわかる。ただし、(242)は「30 人」=「学生」という解釈が得られないため、(242)の場合は、「先生」など他の名詞が音形のない形で含まれていると考えられる。

①Q ノ NC 型

(241) *全員[30 人の学生]が来た。

(242) [[[30 人]全員]の学生]が来た。

また(243)は「全員」の後にポーズをおくと容認されなくなるため、「全員」が DP 全体を修飾しているのではなく、「全員」の述語として「学生」が現れることがわかる。この場合、「30 人が全員である」ということではなく「全員が学生である」という解釈が生じる。上記の(242)の「30 人全員」や(244)の「30 人」は「学生」の人数として容認されない。「の」の前の名詞句が後続する名詞句と異なる事物を示すのは、「の」の直前における普遍数量詞の句の右の構造からの派生が容認されていないためであると考えられる。また、(245)においても、「学生のうちの 30 人全員」という解釈を要する。

②N ノ QC 型

(243) [[[全員]学生]の 30 人]が来た。

(244) *[[[学生]全員]の 30 人]が来た。

(245)[[学生]の 30 人全員]が来た。

また、③NQC 型においても同様に、UQ は NQ の「30 人」に直接付加した形でなければ許されないということが言える。

③NQC 型

(246)*全員[学生 30 人]が来た。

(247)*[[学生]全員]30 人]が来た。

(248)[[学生]30 人全員]が来た。

UQ が名詞句と離れて位置する場合、(252)のように NQ の句と UQ の句が併合し、NP が切り離されるという構造、または(254)のように NQ と UQ が同時にかき混ぜられ NP が残るという構造のみが容認される。

③NCQ/QNC 型

(249)*全員[学生]が[30 人]来た。

(250)*[学生]全員が[30 人]来た。

(251)*学生が全員[30 人]来た。

(252)学生が[30 人]全員来た。

(253)*全員[30 人]学生が来た。

(254)[[30 人]全員][学生]が来た。

(255)*[30 人][学生]全員が来た。

(256)*[30 人][学生]が全員来た。

以上から、それぞれの表現型において NQ (CLP) と UQ とが併合される構造を以下のよう
に想定することができる。①Q ノ NC 型の場合、構造は[_{DP}[[_{NQ}]UQ]ノ][_{NP}]]のように表
示されうるが、Watanabe (2008) の主張する構造から、外に格を与えることができない QP
より大きな構造をもち、UQ をもつ構造に「の」を与えるには、新たに DP をたてる必要が
あると説明することができる。よって、①Q ノ NC 型は「の」の前の構造の、同じ DP 内か
らの移動は成立しないと考えることができる。②N ノ QC 型[_{DP}[_{NP}[_{DP}NP ノ]]][_{NQ}]UQ]]の構

造においては、普遍数量詞がない場合と同様に「の」の前の DP と UQ によって付加される CLP は異なった構造であると考えられ、以下のように表示される。③NQC 型の図においても、NP が CLP からさらに上昇した結果 $[_{DP}[NP][[_{NQ}UQ]]]$ のような構造が考えられる。

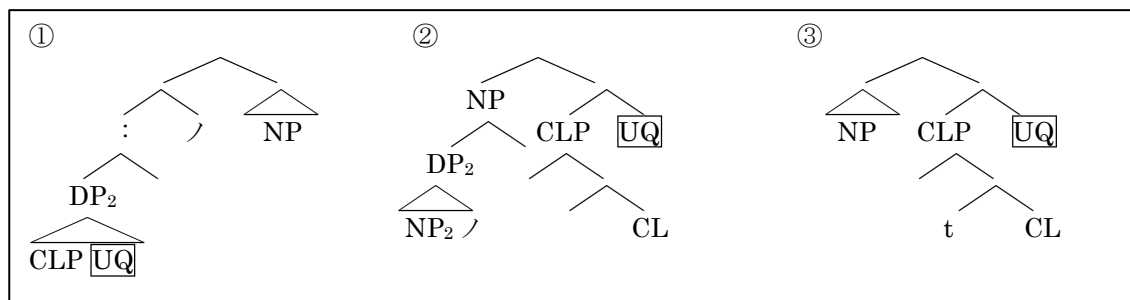


図 13 UQ が NQ と併合している場合の統語構造

3.2.2.2. 数量表現と「も」の統語構造

一方、数量の大小を強調する「も」は、以下のように、①Q ノ NC 型、②N ノ QC 型、③ NQC 型のどの型においても、「学生」に「も」が後続すると容認されない、もしくは累加の「も」としてしか解釈されず、「30 人」から「も」が離れると数量を強調する効果がなくなることがわかる。

①Q ノ NC 型

- (257) *も[30 人の学生]が来た。
 (258) [[30 人]もの学生]が来た。
 (259) #[30 人の学生ら]もが来た。
 (260) *[30 人の学生ら]がも来た。

②N ノ QC 型

- (261) *[[も学生]の 30 人]が来た。
 (262) *[[学生]もの 30 人]が来た。
 (263) 学生の[30 人]もが来た。
 (264) #[学生の 30 人ら]もが来た。
 (265) *[学生の 30 人ら]がも来た。

③NQC 型

(266) *も[学生 30 人]が来た。

(267) #[学生も 30 人]が来た。

(268) 学生[30 人]もが来た。

(269) ??[学生 30 人ら]もが来た。

(270) *[学生 30 人ら]がも来た。

③NCQ/QNC 型

(271) *も[学生]が[30 人]来た。

(272) #[学生]もが[30 人]来た。

(273) *学生がも[30 人]来た。

(274) 学生が[30 人]も来た。

(275) *も[30 人]学生が来た。

(276) [30 人]も[学生]が来た。

(277) #[30 人][学生]もが来た。

(278) *[30 人][学生]がも来た。

ここから、数量を強調したい場合には数量表現に「も」が直接付加する必要があることがわかる。以下に、数量的数量詞と共起する「も」の構造を示す。

(279)a. 先生は学生を〈30 人〉も誘った。

b. [TP[DP 先生は][vP 学生を[CLP30 人も]誘っ]た]。

(280)a. #先生も学生を〈30 人〉誘った。

b. [TP[DP[DP 先生]も][vP 学生を 30 人誘っ]た]。

c. #先生は学生も〈30 人〉誘った。

d. [TP[DP 先生は][vP[DP[DP 学生]も]30 人誘っ]た]。

e. #先生は〈30 人〉の学生も誘った。

f. [TP[DP 先生は][vP[DP[DP30 人の学生]も]誘っ]た]。

また、数量表現と共起する「も」は(281c)や(282b)のように累加の「も」では現れにくい属格の「の」の直前に生起できる点が特徴的である。(281c)と(282b)の「30 人」に付加している「も」は極限の「も」として「30 人」が多いことを示すが、(282c)の「学生」に付加している累加の「も」と極限の「も」は生起できる位置や文中要素へのはたらき方が異なるため、一文中に「も」が複数回現れることが許される。

(281)a. 田中先生の学生が待っている。

b. *田中先生もの学生が待っている。

c. 30 人もの学生が待っている。

(282)a. 先生が来た。学生が 30 人も来た。

b. 先生が来た。そして 30 人もの学生が来た。

c. 先生が来た。30 人もの学生も来た。

これは、沼田（1989）のテストを援用すれば、数量表現に共起する「も」が不定語と共起する「も」と同様、少なくとも南（1974）の A の段階に属する要素だということになる。Watanabe（2008）で示された QP や DP が属格の「の」の前に生起できないことから、生成文法では「も」が QP や DP より内部に生成される構造の中に生起できるということが考えられる。数量表現と結びつく「も」には DP といった機能範疇の最大投射ではなく、「30 人」、「5 冊」といった数量的数量詞に直接付加するという統語論的な特徴があることが予想される。

以上本稿では、極限の「も」の分析を統一化し、数量の大小を強調する機能のある「も」を不定語と結びつく「も」と同様に数量詞句の主要部である類別詞（CL）に付加することを提案する。より詳細な分析は、第 4 節における一致の考察にて明らかにする。

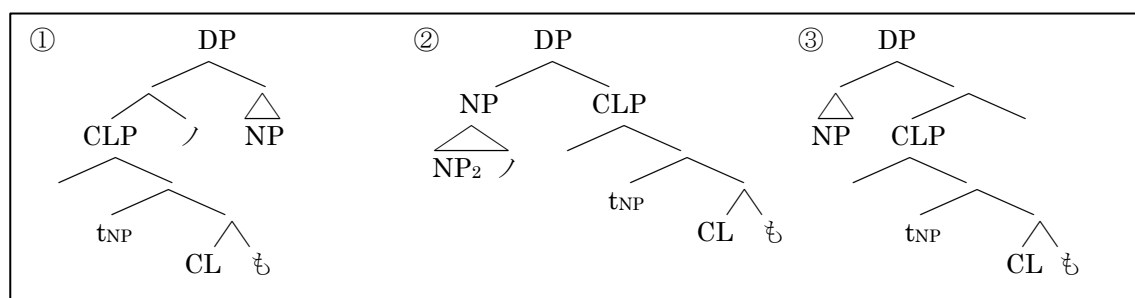


図 14 数量表現と結びつく「も」の統語構造

3.2.2.3. 「も」と普遍数量詞の共起

以上の観察を踏まえ、「も」と UQ の同一文中の共起関係を観察すると、以下のように、CL に直接付加する位置に「も」が生起し、CLP の外に UQ が生起すると考えられる(284)のような構造においてのみ、「も」と UQ が共起可能であることが説明される。

(283) *学生が全員も来た。

(284)a. [30 人もの学生]全員が授業に出席している。

b. [30 人もの学生]が全員授業に出席している。

c. [学生の 30 人も]が全員授業に出席している。

d. [学生 30 人も]が全員授業に出席している。

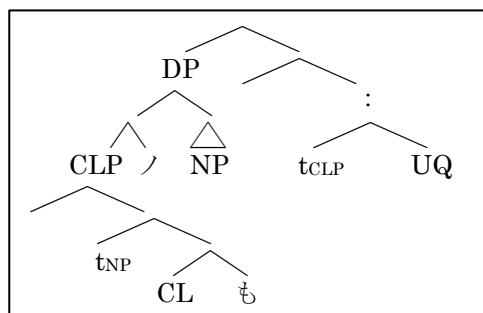


図 15 (284b)の構造

NQ、「も」、UQ が連続しているように見える(285)のような例は、統語構造上は非文とはならない位置に「も」や UQ が生起すると考えても良いはずであるが、実際には認められない。これは、「も」の介在によって、NQ と UQ の形態論的な結びつきを阻止しているからではないかと考えられる。

(285)a. *学生の[30 人も]全員が授業に出席している。

b. *学生[30 人も]全員が授業に出席している。

c. *学生が[30 人も]全員授業に出席している。

e. *[30 人も]全員学生が授業に出席している。

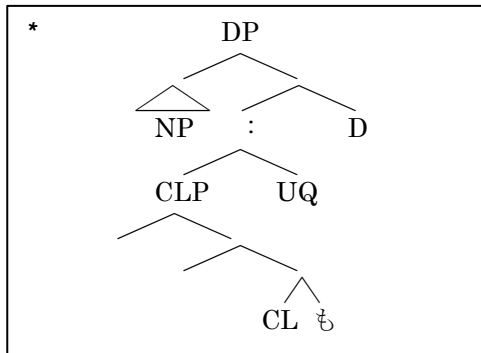


図 16 数量表現と「も」の介在

以上、数量を強調する「も」は、不定語と同様、CL 主要部に付加することを提案した。

3.3. ほかしの「も」の付加対象と階層²⁷

本節では、ほかしの「も」が統語構造上のどの位置に生起するかを第 1.2.3 節にて提案した分類をもとに提案する。ほかしの「も」の統語論的な特徴として、述部内に生起しないことが指摘されている（定延 1995、野田 1995 他）。以下のように、目的語や付加詞に付加する(287c)、(288c)や動詞句後の(286c)、(287e)、(288e)といった例が累加の「も」としてしか解釈されないことがわかる。

- ・(ア) のほかしの「も」（典型例表示の「も」）

(286)a. 夏も真っ盛りですね。

b. [CP[TP[_{VP}[DP 夏も]真っ盛りで]す]ね]。

c. #夏が真っ盛りでもありますね。

d. [CP[TP[_{VP}[DP 夏が]真っ盛りでも]あります]ね]。

- ・(イ) のほかしの「も」（時にかかわる「も」）

(287)a. 3 月も中旬を過ぎたかあ。

b. [CP[DP3 月も][TP[_{VP} 中旬を過ぎ]た]かあ]。

c. #3 月は中旬も過ぎたかあ。

²⁷ 本節は榎原（2017c, 2018c）の内容の一部に基づき加筆修正したものである。

- d. [CP[DP3 月は][TP[_{VP}[DP 中旬も]過ぎ]た]かあ。
- e. #3 月が中旬を過ぎもしたかあ。
- f. [CP[DP3 月が][TP[_{VP}[_{VP} 中旬を過ぎ]も]した]かあ。

・(ウ) のぼかしの「も」(潜在的意識活性化の「も」、解釈の「も」)

- (288)a. (疲れやすくなって) お前も年を取ったな。
- b. [CP[DP お前も][TP[_{VP} 年を取っ]た]な。
 - c. # (疲れやすくなって) お前は年も取ったな。
 - d. [CP[DP お前は][TP[_{VP}[DP 年も]取っ]た]な。
 - e. # (疲れやすくなって) お前は年を取りもしたな。
 - f. [CP[DP お前は][TP[_{VP}[_{VP} 年を取り]も]した]な。

このことから、第 1.2.3 節にて提案した典型例表示の(ア)の「も」、時にかかわる(イ)の「も」、一般則や解釈を表す(ウ)の「も」といったぼかしの「も」は、各階層の指定部にある要素に付加されるということが考えられる。

また、ぼかしの「も」が属する階層について、沼田(1989)は、ぼかしの「も」が(289)のような「れば」節や(290)のような連体節に内包できることから B の段階に、三井(2001)は、(291)のような逆接の「が」節や(292)のような因果用法のテ形節内に生起させることができることから C の段階に位置付けられるとしており²⁸、ぼかしの「も」の属する階層については従来見解が一致していなかったことが問題であった。

(289)この辺は、3 月も中旬を過ぎればずっと春らしくなる。(沼田 1989: 179)

(290)年の瀬もおしつまった 12 月末 (沼田 1989: 179)

(291)この辺りも随分変わったが、ここの空き地だけはそのままだ。(三井 2001: 71)

(292)お前も無事大きくなって、お父さんは一安心だ。(三井 2001: 71)

(ア)(イ)(ウ)でもって上記の例文を分類すると、沼田(1989)の言及していた(289)や(290)の「も」は時にかかわる(イ)の種類の「も」、三井(2001)の言及する(291)や(292)

²⁸ 野田(1995)では、ぼかしの「も」は D の段階に属する要素であると述べられているが、ぼかしの「も」の呼応については、第 4.5 節にて詳細に論じる。

の「も」は(ウ)の種類「も」であり、(ア)(イ)(ウ)の「も」は、統語論的にも異なる種類の「も」であることが予想される。以下では、(ア)(イ)(ウ)の「も」が生起する階層についてより詳細に検討する。

3.3.1. (ア)の「も」の属する階層

「宴」の中の「たけなわの宴」、「南」の中の「赤道直下」など典型例を想定させる(ア)の「も」は、(293)のように名詞+「の」+名詞の構造の中での生起が可能であることから A の段階の名詞句に収まり、(294)のように A 類従属節の構成要素である名詞+格助詞の一部としても現れることから、A 類従属節を収める B 類従属節、C 類従属節にも含まれることが明らかである。よって、(ア)の「も」は A の段階に属する要素であると考えられる。

(293)[宴もたけなわ]の会場に、いきなり勢いよくドアを開けて入っていった担当者。(A) (<http://www.vill.shimukappu.lg.jp/shimukappu/today/nmudtq0000009ckz.html>)

(294)この後、[南も南、赤道直下を]目指しつつ島を巡る予定です。(A)

(295)[いよいよ夏も真っ盛りですが]、皆様、体調はいかがでしょう。(C) (http://www2.kobe-u.ac.jp/~ymiura/hp/RA_letter_1108.html)

(ア)の「も」が A 類従属節に属すると観察されることから、この「も」は vP 内で生成されるということが提案される。

(296)[$DP[NP[NP$ 宴+も]たけなわ]の会場]

3.3.2. (イ)の「も」の属する階層

時の流れを想定させる(イ)の「も」を想定した場合、(297)、(298)のように A 類従属節内では累加の「も」としてしか解釈されない。一方、(イ)の「も」は「れば」節の(299)、「たら」節の(300)、「と」節の(301)、「のに」節の(302)といった B 類従属節や、逆接の「けれど」節の(303)といった C 類従属節内に現れるため、B の段階に属する要素であることが明らかである。中尾(2008)や三井(2001)では、時にかかわる「も」は「時間推移とともに変化した対象」を主題とするものと同様に扱われていたが、時間の推移を直接的に表現している「状態変化タイプ」は B 類従属節内での生起が可能であることがわかる。

- (297)#[春も終わりつつ]暖くなるだろう。(A)
- (298)#[冬も近づきながら]京都の紅葉も終わりかけていますね。(A)
- (299)[卒業式も終われば]次は入学式です。(B) (<http://tanaka-yuki.com/spring/post-10903/>)
- (300)〔子ども靴について〕でも[春も過ぎたら]履けなくなるんすかね。成長はやいっすね。
(B) (<http://nekogatasan.jugem.jp/?eid=61>)
- (301)[夏も終わりに近づくと]、気になるのがパサパサになった髪の毛。(B) (<https://news.walkerplus.com/article/119185/>)
- (302)〔固定電話について〕[もうすぐ平成も終わるのに]まだ昭和な風習を引きずってるの？
って思います。(B) (<http://keisukenaga.com/?p=16844>)
- (303)[3 月になって春ももうすぐだけれど]、まだまだ寒いときは、洋服選びも悩みます。(C)
(<https://ameblo.jp/20-8/entry-12255431738.html>)

(イ) の「も」が B 類の従属節内に生起できることから、FinP 内で生起していると考えられる。また、属格の「の」の前に生起できないことから、vP より上の階層に現れる必要がある。

- (304)春も終わるなあ。
- (305)*[_{NP} 春も]の終わりは雨が降りますねえ。

3.3.3. (ウ) の「も」の属する階層

(306ab)の例が累加の「も」として解釈されないことから明らかであるように、三井(2001)は、(ウ) のぼかしの「も」が連体節より上の階層で生起することを指摘している。

- (306) a. #[_{CP}[_{TP}[_{DP} お前も]][_{vP} 年を取]ると]、親が心配するよ]。
b. #[_{CP}[_{FinP}[_{DP} お前も]][_{vP} 年を取]た]ことを親が心配している]。
c. [_{CP}[_{ForceP}[_{DP} お前も]][_{FinP}[_{vP} 年を取]た]が]、親はもっと年を取っている]。

また、「も」が属格の「の」の前に生起できないことから、(ウ) の「も」が A 類従属節に属さない可能性が予想される。

(307)おまえも鬱陶しいなあ。

(308)*[NPおまえも]の鬱陶しさは10年経っても変わらないなあ。

(309)[CP[DP[DPおまえ]も][FinP[_{VP}鬱陶し]い]が]、もうすぐ還暦。

より詳細に観察すると、一般則を想定させる潜在的意識活性化の「も」、別様の解釈の可能性をにおわせる解釈の「も」は、以下のように、どちらも主語が含まれない「つつ」節の(310)や継続の「ながら」節の(313)などのA類従属節内には生起できず、「れば」節の(311)や「と」節の(314)などのB類従属節内では累加の「も」としてしか解釈されないことがわかる。潜在的意識活性化の「も」と解釈の「も」はどちらも「し」節の(312)や「から」節の(315)、逆接の「が」節の(316)といったC類の従属節内にしか生起できないため、(ウ)の「も」がCの段階に属する要素であることがわかる。

・潜在的意識活性化の「も」(時にかかわる「も」を除く)

(310)*わたしたちは[息子も成長しつつ]幸せに暮らしています。(A)

(311)#[君も大人になれば]、親が喜ぶと思うよ。(B)

(312)[息子も成人したし]、懐石料理を食べさせてあげたかったですね (C) (<https://retty.me/area/PRE33/ARE239/SUB23901/100000613839/23623192/>)

・解釈の「も」

(313)*[その財布も古くなりながら]端が破れていっていますね。(A)

(314)#[君もうるさいと]、迷惑がかかるよ。(B)

(315)やっぱり、[私たちも日本人だから]、お茶を飲むと安心するっていうか……。 (C) (https://www.1101.com/store/nihoncha/report_02.html)

(316)[そんなオレに追い討ちの言葉をかけてくるメヌエツトもしつこいが]、紅茶を持ってきたリサは何が面白いのか笑いながら淹れた紅茶を差し出してくる。(C) (<https://syosetu.org/novel/70727/178.html>)

さらに詳細に、C類に属すると考えられる(ウ)のぼかしの「も」と各範疇の要素との共起関係についてカートグラフィー研究の観点から表5のように整理すると、連体形の節

(FinP) より上位の節でぼかしの「も」が生起し、連体形の節 (FinP) 以下の階層では「も」は累加の「も」としてしか解釈されないことがわかる。(ウ) のぼかしの「も」が νP といった小さな節の中に生起できないこと、さらに FinP より上位にある FocP などにもぼかしの「も」が生起可能であることが予想される。

表 5 C 類ぼかしの「も」の生起階層

範疇	要素	例文
ForceP	終助詞	息子 <u>も</u> 大人になった <u>なあ</u> 。
TopP	主題句	うちは、息子 <u>も</u> 大人になってやっと落ち着きました。
FinP	連体形	#[息子 <u>も</u> 大人になった]田中さんがここで暮らしている。
TP	と	#息子 <u>も</u> 大人になると、身長が伸びるだろう。
νP	連用形	#息子 <u>も</u> 大人になり <u>そう</u> で、みんな安心している。

また、(ウ) のぼかしの「も」をもつ(317)は、(イ) のぼかしの「も」をもつ(318)とは異なり同一指示表示をもつ再述代名詞との共起が可能である。(317)は問題なく「太郎」の言動に対する解釈を示すことができることから、(ウ) のぼかしの「も」は CP に属する階層に基底生成されることができる。よって(319)のように、累加の「も」は FinP より低い階層に、(ウ) のぼかしの「も」は FinP から ForceP の中に基底生成されるという構造の違いを示すことができる。

(317)a. 太郎もお前はバカだなあ。(ぼかし)

b. [CP[DP 太郎も]_i[FinP[DP お前は _i][νP バカだ]]なあ]。

(318)a. ??3 月もその時期が近づいているねえ。(ぼかし)

b. [CP[DP 3 月も]_i[FinP[DP その時期が _i][νP 近づいてい]る]ねえ]。

(319)a. 太郎もバカだなあ。

b. [CP[FinP[DP[DP 太郎]も][νP バカだ]]なあ]。(累加：太郎以外に「バカ」がいる)

c. [CP[DP 太郎も]_i[FinP[DP *pro*_i][νP バカだ]]なあ]。(ぼかし：太郎に対する解釈)

(320)a. 3 月も近づいているねえ。

b. [CP[FinP[DP[DP 3 月]も][νP 近づいてい]る]ねえ]。

c. *[CP[DP3 月も]_i [FinP[DP *pro*_i][vP 近づいてい]る]ねえ]。

以上から、(ア) (イ) (ウ) の「も」は、それぞれ文の階層構造の A、B、C の段階に属する要素に対応することが明らかとなった。すなわち、(ア) の「も」は vP 内で生成され、(イ) のほかしの「も」は vP から FinP の間に生起すること、(ウ) の「も」は FinP より上の階層で生起することが明らかとなった。(ア) (イ) (ウ) の「も」はそれぞれの段階において、異なる振る舞いを見せることが明らかとなった。次章より、これらをそれぞれ A 類、B 類、C 類のほかしの「も」と呼び、三種を個別に観察・分析する。

3.3.4. ほかしの「も」の付加対象

以上、ほかしの「も」の生起する階層について論じたが、以下ではほかしの「も」がどのような要素に付加しうるか確認しておく。(ア) (イ) (ウ) の「も」を名詞句などの投射内に組み込めるかをそれぞれテストする。(ア) の「も」は、属格をもつ句の中に生起することができる。第 2.2 節で述べたとおり、DP は「の」の前に生起できないため、DP を付加するものではないことが明らかである。(ア) の「も」は、「も」の直後に「も」がとりたてた要素を後続させることができるが、(321c)や(321d)のように、後続する要素に属格をもつ句をそのまま後続させることができないため、「も」は句全体に付加しているわけではないと考えられる。ここから、(ア) の「も」を主要部付加だと考える。²⁹

・(ア) の「も」

(321)a. 室津城での[DP 婚礼の宴もたけなわの時]、赤松の軍は攻め寄せた。(DP : 名詞句) (h

<https://ameblo.jp/akane12777/entry-11744879852.html>)

b. [NP 宴+も]たけなわ

c. 福岡県田川郡香春町。北九州市の下です。[NP 福岡県の筑豊地域の端っこ]も端っこです。(http://kakeru.town.kawara.fukuoka.jp/enjoy/384/)

d. ??福岡県の筑豊地域の端っこも福岡県の筑豊地域の端っこです。

²⁹ 本稿において観察できた (ア) の「も」は、主に名詞に付加するもののみであった。また、不定語と結びつく「か」や数量を強調する「も」も主要部に付加する「も」として同様の振る舞いを見せることが予想される。

それに対し、(イ) や (ウ) の「も」は名詞句内に介在させることができず、用法の制約上名詞的な要素以外のものを付加対象とすることも困難である。³⁰

・(イ) の「も」

(322)#[_{DP} 卒業式も始まりのとき] (DP : 名詞句)

・(ウ) の「も」

(323)#[_{DP} 太郎も大学生のとき] (DP : 名詞句)

以上から、(ア) のぼかしの「も」は vP 内の主要部に、(イ) の「も」は $FinP$ 以下の指定部に位置する最大投射に、(ウ) の「も」は $ForceP$ 以下の指定部に位置する最大投射に付加する要素であるということが考えられる。

3.4. まとめ

以上、(ア) の種類のぼかしの「も」①、不定語と共起する「も」②、そして数量表現と共起する「も」③は主要部に付加すること、その他の「も」は最大投射に付加することを示し、大きく主要部 X^0 に付加するものと最大投射 X^{max} に付加できるものの二つに大別されることを提案する。

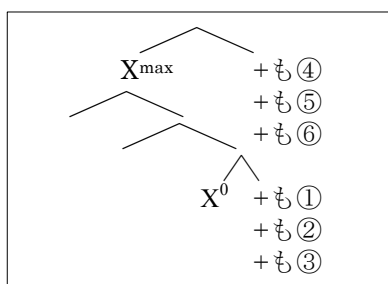


図 17 各「も」の付加対象

³⁰ 実際には、NP への付加や他の範疇の最大投射への付加が考えられるため、DP 内への生起の可否のみによってそれぞれの「も」の付加対象を定めることができない。(イ) の「も」や (ウ) の「も」に関しては、付加対象を主要部としてもあまり大きな問題は生じず、最小句構造を採用すると、最大投射、主要部に固執する必要もなくなるが、本稿においては、累加の「も」との類似性からこれらを最大投射付加とする。

さらに、階層ごとに見ると、(ア) の種類のぼかしの「も」①、不定語と共起する「も」②、数量表現と共起する「も」③、そして累加の「も」④は、A の段階に相当する *vP* 内、(イ) のぼかしの「も」⑤は B の段階に相当する *vP*～*FinP* (の指定部)、(ウ) のぼかしの「も」⑥は C の段階に相当する *FinP* より上の階層 (の指定部) において生起することが明らかとなった。次章より、本提案によって「も」の他の現象を説明できることを示す。

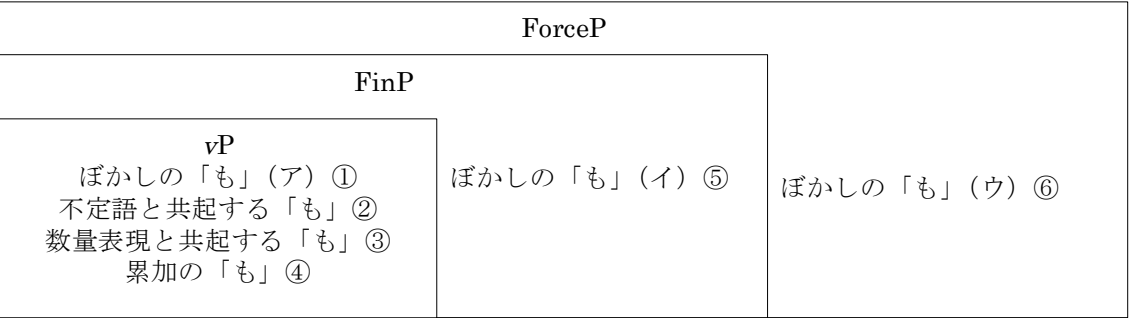


図 18 各「も」の生起階層

第4章 「も」による一致現象

第3章では、各用法の「も」がそれぞれ異なる位置に生起することが明らかとなったが、Shimoyama (2006) も指摘しているように(324)のような構造の文は、「も」は累加の「も」としても、全称を示す「も」としても解釈される。しかし、各「も」の生起位置だけでは、なぜ一方では Wh 疑問の解釈が得られ、一方では得られないのかという点が説明されない。そこで本節では、各「も」と他の要素との結びつきについて、「一致」という点から明らかにする。

(324) 洋子は[[[太郎が何年に何について書いた]論文]も優だったか]知りたがっている。
(Shimoyama 2006: 146 より)

4.1. 情報構造

青柳 (2006: 135) では、とりたて詞と焦点との関連付けは、それぞれが「お互いに持つ焦点素性[+focus]の共有 (Feature Sharing)、またはこの素性に関する一致 (Agreement) だともみることができる」としており、係助詞の「も」は LF 部門においてとりたて詞が焦点素性[+focus]を文中の様々な要素と一致させられるよう非顕在的に上昇することができることを主張している。

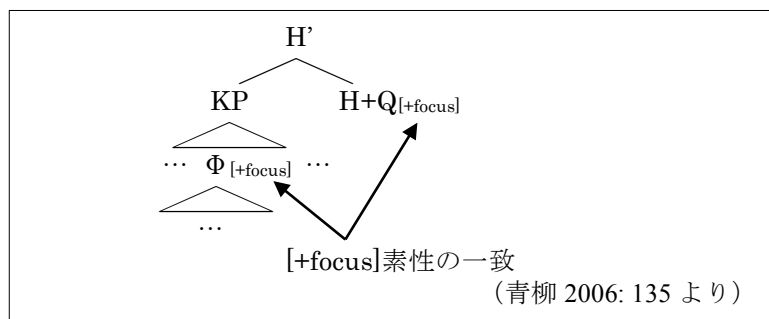


図 19 とりたて詞の[+focus]素性の一致

第 2 章では、項削除が一致とかかわり、助詞残留が項削除と同様に分析できることを示した。そのため、「も」の助詞残留が可能なのは、「も」の付加対象と一致関係にない場合であることが考えられるが、累加の「も」として解釈される文において助詞残留のテストを行うと、「も」のみの残留が可能であることから、統語構造において主に議論される ϕ 素性や [Q] 素性などの一致が、累加の「も」と他の要素の間では生じていないことが予想される。

(325) a. A: どの学生も呼んだの？

B: # $\emptyset$ も、呼びましたよ。

b. A: 文学部の学生も呼んだの？

B: $\emptyset$ も、呼びましたよ。

本稿では、累加性が語用論的推論を要するという Shudo (2002) から、青柳 (2006) の主張するような [+focus] 素性の一致が情報構成の段階において生じると仮定し、文の階層構造と情報構成を担う情報構造との関連性を検討する。Vallduví (1992, 1995) は、カタルーニャ語のデータにおいて、LF 部門における構造と情報構造 (IS: Information Structure) が異なること、またカタルーニャ語では LF の構造よりも情報構造の方が表層構造 (S-Structure) を維持していることを指摘している。(326)は、情報構造では、LINK を担う *a la festa (to the party)* が左へ切り離され、焦点 (FOCUS) となる *TOTHOM (everybody)* は、IP の中に位置していなければならないのに対し、論理形式では、量化表現である *TOTHOM (everybody)* が切り離されなければならないということを示している。

(326) a. [IP A la festa₁ [IP=F hi₁ vaig enviar TOTHOM t₁]]

to the party loc 1s-past-send everybody

‘The party [F (I) sent EVERYBODY to].’

b. IS: [IP A la festa₁ [IP=F vaig enviar TOTHOM t₁]]

c. LF: [IP tothom₂ [IP a la festa₁ [IP hi₁ vaig enviar t₂ t₁]]] (Vallduví 1992: 127)

よって、Vallduví (1992, 1995) は LF とは異なる情報構成 (Information Composing) の段階

において情報構造 (Information Structure) がもたらされることを提案している。情報構造は、聞き手の知識 (Knowledge-Store) に新たに寄与する情報を担う FOCUS、聞き手の知識のどこに情報を加えるかを指示する LINK、残りの TAIL という部分から構成され、コミュニケーションをとる間に更新 (Update) されると説明し、以下の図 20 のようなモデルを提案している。

(327) IS Configuration: [IP link [IP [IP focus] tail]] (Vallduví 1992: 126)

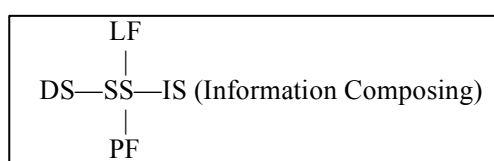


図 20 Vallduví (1992, 1995) による情報構造のモデル

日本語では、情報構造に関する研究は、機能文法の立場から久野 (1978)、高見 (1998) 等多く見られるが、日本語でも、FOCUS の性質をもつ要素がより核に近い位置に生起し、Vallduví (1992, 1995) の主張する構造が適用されることがわかる。

(328) A: 次郎はボストンに花子と行った？

B₁: #うん、ボストンに行ったよ。

B₂: うん、花子と行ったよ。(久野 1978: 54)

(329) 情報の流れの原則：強調ストレスや形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は、通例、より重要でない情報からより重要な情報へと配列される。(高見 1998: 131)

(330) 日本語の構文法規則により、動詞の位置は文末に固定されているから、動詞が古いインフォーメーションを表わす場合には、その直前の位置が、文中の最も新しいインフォーメーションを表わす要素のための予約席となる。(久野 1978: 60)

(331) [s →→→→⊗|V] (高見 1998: 131 より)

(332) [教室に link[[何が focus]あります tail]]か。³¹

³¹ TAIL の構造については、Vallduví (1992, 1995) では FOCUS と切り離されることを主張しており、日本語では後置文などが対応すると考えられるが、本稿においては TAIL の位置は

情報構造を顕在的な階層構造として捉えた場合、日本語におけるかき混ぜ焦点句について議論しなければならない。日本語において一般的なかき混ぜ対象となる句は、網羅的かつ識別的な焦点となることが指摘されている（中村 2011）が、情報構成上の表現効果という点においては、FocP の指定部にあると考えられない文中要素を音韻的に強調させた場合とほとんど変わらない。また、Otsu (1994) は、かき混ぜ句はそれが先行文脈によって示され、談話主題（Discourse Topic）として用いられることを指摘している。ゆえに、焦点句にある要素は、聞き手の情報の蓄積のどこに情報を加えるかを指示する LINK としての役割も担うことがわかる。以下の(333b)であれば、「カフェラテ」という情報のファイルに「私が頼んだもの」を加えるという説明が可能である。よって、かき混ぜ句の移動先である FocP は、FinP 以下で焦点が当てられる要素が、LINK としても機能を果たす場合に位置することができる移動先として考えたい。

〔注文確認の場面〕

- (333)a. 私は カフェラテを 頼んだんですけど。
 b. カフェラテを_i、私は_{t_i}頼んだんですけど。
 c. 私は カフェラテを 頼んだんですけど。

また、(335)のように、いわゆる「 θ 純粋主題³²（三原 1994、藤平 2015）」をもつ文中の要素がかき混ぜられる場合、顕在的には FOCUS を担う要素が主題を担う要素を越えるが、Vallduví (1995) も指摘する英語の例と同様に、かき混ぜられた「犬小屋」にも（作品という）スケールを指示する機能があり、「犬小屋」は聞き手が持つ「作品」というスケールのファイルカードを示す LINK としてはたらくと考えられる。また、(336)のような「 θ 純粋主題（三原 1994、藤平 2015）」を越える焦点要素のかき混ぜが許されないことから、純粋な LINK を担う句を越えて先行する焦点句が存在しないことが示される。よって、上記の(327)の構造は、日本語にも適用されるということがわかる。

重要ではないため、深く議論しない。

³² 純粋主題とは、後続命題と主題・叙述関係を持つ要素である。純粋主題文は、まずあるものや事態について主題として提示し、後続部分では主題句について語る文という構造になっている。また純粋主題は、述語と θ 関係を持つ θ 純粋主題と、述語と θ 関係を持たない θ 純粋主題に分類することができ、これらはその振る舞いが異なる。（三原 1994）

(334) A: 林君は何をしたの？

B: 林君は犬小屋を作ったよ。

(335) a. [L 犬小屋を i]、[T 林君は e_i 作った]。(動作主) (三原 1994: 197)

b. 進学のことので i 、岩崎君は e_i 悩んでいます。(経験者) (三原 1994: 197)

c. 太平洋戦争で i 、夫は e_i 戦死しました。(被動作主) (三原 1994: 197)

(336) a. [L 魚は]、[[F 鯛が]いい]。

b. [L 三和銀行は]、[[F 坪井君が]名古屋支店に勤めています]。(三原 1994: 197 より)

(337) a. *[F 鯛が i 、[L 魚は]、 t_i いい]。

b. *[F 名古屋支店に i 、[L 三和銀行は]、坪井君が t_i 勤めています]。(藤平 2015: 23)

南 (1974, 1993) の文の階層構造においては、田窪 (1987) でも指摘されているように、C 類従属節は焦点の範囲外であり、焦点は B 類従属節以下に及ぶことがわかっている。

(338) a. *[金があるから結婚する]のはよくない。(C)

b. 金があるから[結婚する]のはよくない。(B) (田窪 1987: 41)

語用論や談話構造とのインターフェースを担う構造としてカートグラフィーにおいて議論されてきた構造と Vallduví (1992, 1995) による情報構造が表層構造と顕在的に対応し、統語論において結びつけることができれば、より体系的な分析が可能になる。上記のように、日本語において LINK 機能を担う主題が高い位置に生成されることから、精緻化された CP 層は、それぞれ LINK を担う階層として対応させられると考えたい。本稿では、以上を踏まえ、日本語における情報構造を異なる段階として設定するのではなく、狭義の統語論 (Narrow Syntax) において、階層構造上で処理されるものであるとする。情報構成にかかわる統語構造を二分化し、FinP 以下を FOCUS の階層、FinP より上の階層を LINK の階層に対応するとし、分析を進めてゆく。

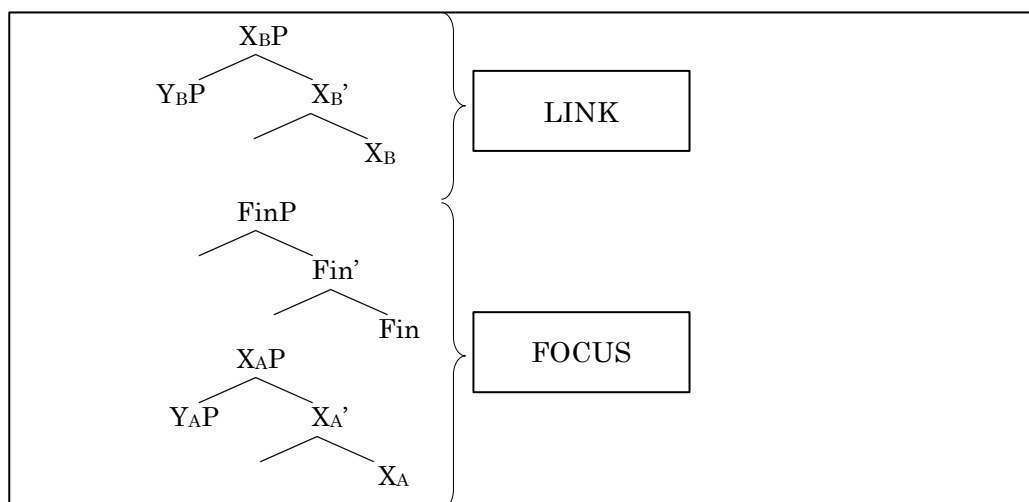


図 21 統語構造と情報構造との対応

4.2. 情報構成にかかわる素性の一致

青柳 (2006) の述べるような焦点素性は情報構造にも通用する概念であるとし、[+FOCUS]素性の一致は、FOCUS の階層で生じる情報素性の「一致」であると考えたい。「も」をもつ句は情報構造上ではたらく情報 (Information) にかかわる素性をもっており、それが FOCUS の階層においては[+FOCUS]素性として、LINK の階層においては[+LINK]素性として、素性の一致を生じさせることを提案する。³³ FOCUS 素性の一致過程においては、「既存の知識に対する新情報や修正内容」が明示される必要がある。「も」に関しては、とりたてた要素との一致によって、とりたて対象と既知の要素とを対比させ、その対比された集合の中に同類の要素として情報を新しく加えるという機能をもつという説明が可能である。先行文脈と当該事態との対比から、Shudo (2002) に述べるような語用論的な計算が生まれるため、「も」ととりたてた要素との素性照合が生じた後、それが語用論計算の単位となり、語用論の段階へ送られるということを仮定したい。

³³ 本稿では、便宜的に[+FOCUS]素性、[+LINK]素性と呼んでいるが、情報構成にかかわる素性は単一であり、[+FOCUS]として機能するか、[+LINK]として機能するかはその素性の照合が起こる階層によって決定すると仮定したい。

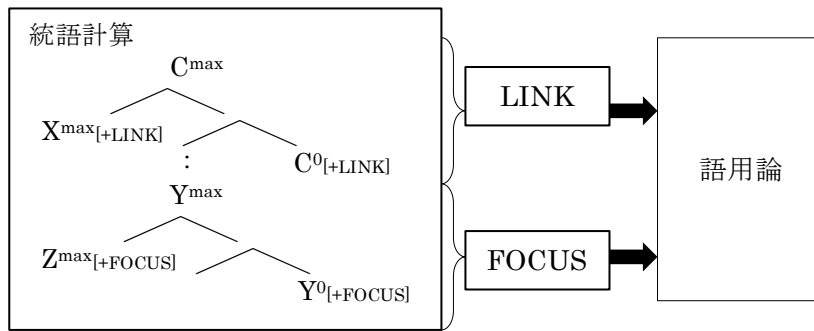


図 22 情報構成にかかわる階層と素性照合

Hoji (1985) や Tomioka (2007) は、日本語の Wh 移動に[+FOCUS]素性をもつ要素の介在が許されない介在効果 (Intervention Effects) が見られることを指摘し、以下のような「も」の句も[+FOCUS]素性をもつために「も」をもつ句が不定語に先行できない点を指摘している。Tomioka (2007) は、以下の例から「も」のもつ[+FOCUS]素性によって同じく[+FOCUS]素性をもつ不定語の非顕在的移動を妨げ、結果不定語と C 主要部との一致が生じないとしているが、ここでも「も」「何」「の」がもつ[+FOCUS]素性の相対性 (Relativity) がかわるということが予想される。

(339)a. ?*誰も何を読まなかったの？

b. 何を誰も読まなかったの？

(340)a. ??誰もが何を読んだの？ (Tomioka 2007: 98 より)

b. 何を誰もが読んだの？

(341)a. ???ケンも何を読んだの？ (Tomioka 2007: 98 より)

b. 何をケンも読んだの？

(342)[Wh₁ [~ [INTV_[+FOCUS] t₁]]] (Tomioka 2007: 109)

└LF movement * ─┘

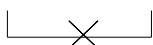
(343)[Wh₁ [~ [intv_[-FOCUS] t₁]]] (Tomioka 2007: 109)

└LF movement OK ─┘

この場合の[+FOCUS]素性の一致も、情報構成を担う段階で見える現象であると考えることができる。(344b)のような構造では、[+FOCUS]素性をもつ不定語は「も」自体と結びつ

き、「も」をもつ句と C 主要部が結びつければ良いため、不定語と C 主要部が直接結びつく必要はない。一方、(344a)や(344c)は階層構造的に[+FOCUS]素性をもつ「も」を含んだ句が不定語と C 主要部に介在しているため、[+FOCUS]素性をもつ要素を越えた移動が生じることはない。

(344) a. [CP[TP[DP 太郎 も]_F [何を食べ]た]の]？



b. [CP[[DP[DP[C 誰をたたいた]子ども]も]_F 叱られた]の]？



c. [CP[TP[DP 誰をたたいた子ども]も]_F [誰に叱られ]た]の]？



またこれを「一致」の問題だとすると、音韻的な強調や「も」付加など音声的に焦点が具現化されていることがあるということから、[wh] ([Q]) 素性の一致、 ϕ 素性の一致とは異なる種類の一致現象であると考えられる。本稿では、このような[+FOCUS]素性の一致が日本語学において論じられてきた「作用域」に繋がるとし、「も」の累加性の及ぶ範囲が「も」のもつ[+FOCUS]素性または[+LINK]素性の一致によって決定することを提案する。

4.3. 累加の「も」による一致

まず、累加の「も」による一致について、(345)や(346)のように、「も」の前の名詞句を削除し、「も」のみ残留することが許されることから、LF コピー分析を採用すれば「も」と「も」の付加対象となる要素との間には、「一致関係」がないということになる。よって累加の「も」は、統語構造上の ϕ 素性や[Q]素性の一致にはかかわらないと考えることができる。

(345) A: 太郎も食べたものがあるらしいよ。

B: {太郎 $\emptyset/\emptyset$ も/ $\emptyset$ } 何を食べたの？

(346) A: 文学部の学生は昨日 TOEIC を受験した。[工学部]_F の学生も受験した。

B: {工学部の学生 $\emptyset/\emptyset$ も/ $\emptyset$ } 昨日受験したの？

青柳 (2006) や Tomioka (2007) は、累加の「も」が[+FOCUS]素性を有することを認めて

おり、本稿においてもそれを支持する。青柳（2006）は、「も」の作用域の決定に[+FOCUS]素性の一致がかかわることを指摘している。以下のように、「も」のもつ[+FOCUS]素性は「も」が及ぶ領域の中で照合相手を見つける。(347)に見られるような「も」をもつ句ととりたて対象との一致によって、(348b)のように「太郎」と「ケン」が異なる本を読むという解釈が可能となる。

(347) [CP [TP ケン も [vP 『坊ちゃん』を読ん]だ]よ]。

| | [+FOCUS]

(348)a. 〈太郎〉 も 〈ケン〉 も 『ころ』を読んだよ。

b. 〈太郎が『ころ』を読み〉、〈ケン も 『坊ちゃん』を読んだ〉よ。

一方、以下のように、「も」の[+FOCUS]素性が不定語・C 主要部間の結びつきを阻害しないとき、同じ階層の指定部に位置する不定語のもつ[+FOCUS]素性と主要部にある C 主要部のもつ[+FOCUS]素性とが結びつくため、「も」のもつ[+FOCUS]素性は少なくとも不定語とは結びつくことができず、結果(350B₂)のような、「太郎」と「ケン」が異なる本を読むという解釈が得られにくい。

(349) [CP 何を _i[TP [vP ケン も _{t_i}読んだ]の]の？

| X | [+FOCUS]

(350)A: 〈太郎〉は何かを読んだようだけど、何を〈ケン〉 も読んだの？

B₁: 〈太郎〉 も 〈ケン〉 も 『ころ』を読んだよ。

B₂: ?? 〈太郎が『ころ』を読み〉、〈ケン も 『坊ちゃん』を読んだ〉よ。

このように、累加の「も」は、情報構成における[+FOCUS]素性の一致がかかわり、それが「も」の累加性が実質的におよぶ作用域と対応するということを示した。よって累加の「も」は、FOCUS の階層における素性の照合によって累加性が及ぶと考えることができる。

4.4. 極限の「も」による一致

4.4.1. 不定語と「も」との一致³⁴

次に、不定語と共起する「も」の派生過程について論じているものは、数多く存在する。本節では、不定語と「も」および「か」との振る舞いから、全称的表現を表す「も」の生起位置について検討する。Nishigauchi (1990) では、LF 部門において Wh-句が移動し、「か」や「も」と結びつくという主張をしている。疑問を表す「か」は、その不定語に値を与えるという点で、「も」と類似している。また、Nishigauchi (1990) によれば、日本語の不定語と「も」や「か」との関係に局所性が見られ、(351)のような構造の場合、不定語はより近い「か」と結びつき、「も」は累加の「も」として解釈される。

(351) [[誰が書いたか]メアリーが知リたがっている手紙]にもジョンが返事を書いた。



Nishigauchi (1990) は、島 (Island) を越える Wh-句に対し、D 連結 (D-Linked) ³⁵ の例であることを示しているが、日本語には D 連結ではない (Non-D-Linked) 例でありながら、連体節などの (引用の「と」節を除く) 島を越える例が多く存在し、もし Wh-句が LF 部門における移動を伴うなら、島の制約に違反した移動であるということになる。

(352)a. [太郎がどこで読んだ本]も面白かった。

b. A: [太郎がいったいどこで読んだ本]が面白かったの?

B: 図書館で

(353)a. [太郎が何を見て感動したと言っていた場所へ]も行きたい。

b. A: [太郎がいったい何を見て感動したと言う場所へ]行きたいの?

B: 朝日を (見て)

(354)a. [誰が来たという話]もうそだった。

b. A: いったい[誰が来たという話]がうそだったの?

³⁴ 本節は榎原 (2017b) から内容を大幅に加筆修正したものである。

³⁵ D 連結とは、ある談話の状況の中で、Wh-句の選択肢や回答の範囲が定まっていることを表す概念であり、「どの子」と言うと、命題を満たす子が少なくとも一人いるという前提が必要となる。談話と連結している発話は、不定語と疑問のマーカーの結びつく距離が統語構造的に遠くても容認されるということが Pesetsky (1987) 等によって指摘されている。

B: ミキが

その代案として、無差別束縛 (Unselective Binding) (Heim 1982, Tsai 1994) が提案される。「も」はその作用域内の要素を無差別に束縛することができるとも考えられるが、不定語が「も」の作用域内になければならないという点は、とりたての対象を作用域内に持たなければならぬとする累加の「も」と共通していると言える。ただし、無差別束縛のアプローチを採用すると、「も」が「誰」に全称量化性を与えるということになり、全称の「も」を累加の「も」や他の「も」と統一的に分析するという立場からは、この「も」のみが全称性を担うという見方は望ましくない。

(355)[太郎がいつどこから何を買って]も、妻は許してくれた。

(356)[誰がどこで何をした後]も、お風呂に入る。

また、Takahashi (2002) によれば、(357)の「たいてい」は、不定語である「書いた人」にかかるのではなく「本」にかかるという。これは、「も」が付加対象となる名詞句と結びつかず、不定語のみと結びついているということである。そのため、「も」の機能が無差別束縛では説明できないことを主張している。

(357)誰が書いた本もたいてい面白い。(Takahashi 2002: 580 より)

一方 Shimoyama (2006) は、以下のような累加の「も」と不定語と結びつく「も」の多義性をあげている。Shimoyama (2006) も指摘しているように(358)のような文は、「も」は累加の「も」としても、全称を示す「も」としても解釈される。以下は、「全ての話題について、全ての年に書いた論文が優だったかどうか」という解釈と、「優だったのは何の話題の何年に書いた論文だったか」という二つの解釈が得られると考えられる。不定語と共起する「も」が累加の「も」と同じ意味、生起位置にあると考えると、Shimoyama (2006) の観察に説明を与えることができなくなり、無差別束縛のアプローチでは、説明できなくなる。

(358)洋子は[[[太郎が何年に何について書いた]論文]も優だったか]知りたがっている。

(Shimoyama 2006: 146、=(324))

(359)のような文では、「先生が誰かをたたいた子どもを全員叱ったかどうか確認している」という Yes/No 疑問文としても「先生は太郎をたたいた子どもを叱り、他に誰をたたいた子どもを叱ったか確認している」という Wh 疑問文としても解釈され、(B₁)と(B₂)どちらの回答も得られる。すなわち、不定語は、累加の「も」として解釈される場合は「も」を越えて「か」と結びつくことができるのに対し、極限の「も」として解釈される場合は「も」を越えて「か」と結びつくことができないということがわかる。よって、不定語は「も」との局所性にかかわらず全称の「も」と結びつくことも「も」を越えて疑問の「か」と結びつくことも可能であることがわかる。これらの二種類の解釈の違いを「一致」によるものであるとし、第3章にて提案したそれぞれの生起位置からの説明を試みる。

(359)A: 先生は誰をたたいた子どもも叱りましたか。

B₁: はい、(誰をたたいた子どもも)叱りました。(全称)

B₂: 花子をたたいた子どもも叱りました。(累加)

不定語と、「も」との一致関係について、Ikawa (2013) の主張を援用すると、以下の(360)や(361)のように不定語と「も」を同時に削除した場合には「学生全員」といった全称表現が削除されると解釈されるのに対し、不定語が削除され「も」が残された場合、「も」が「全て」を表す要素として容認されないこと、さらに(362)や(363)において「も」のみが省略された文が容認されないことから、「も」と不定語は統語論的に一致関係にあると考えることができる。

(360)A: どの本を選んだ学生もテーマを決めましたか。

B: {どの本を選んだ学生も／どの $\emptyset$ 学生も／# $\emptyset$ 学生も／# $\emptyset$ も／ $\emptyset$ } 決めましたよ。

(361)A: どの学部の学生も発表するの？

B: {# $\emptyset$ も／ $\emptyset$ }、発表してください。

(362)A: どの学部の学生も発表するの？

B: *えっ、どの学部の学生 $\emptyset$ 、発表するって？

(363)a. 誰がいつどの学生をたたいても許した。

b. *誰がいつどの学生をたたいて $\emptyset$ 、許した。

本稿では、主要部が探索子 (Probe) として素性の照合相手の目標 (Goal) を探し素性照合を行うという Chomsky (2000, 2001) における一致のシステムを採用する。³⁶Hiraiwa (2005b) も主張しているように、上記の(355)、(356)の「も」は複数の不定語と結びつくため、本稿においては Hiraiwa (2001, 2005ab) の主張するような多重一致 (Multiple Agree) を支持し、議論を進める。第 3 章では、累加の「も」を最大投射付加、全称の「も」を主要部付加として提案したが、本章において、それが顕著に現れることを示す。

・ 全称の「も」：主要部付加

① 先生が誰かをたたいた子どもを全員叱ったかどうか確認している。

(364) 先生は、[CP[DP[NP[CP 誰をたたいた]子ども]D+も]叱りましたか]。

↑ _____ [Q]

まず、全称を表す「も」として解釈される場合、「も」は主要部に付加し、不定語である「誰」を c-統御内から探すことになる。D 主要部に「も」が付加し「D+も」で量化詞的にはたらくと仮定すると、「D+も」は結合し (Kishimoto (2001) では複合主要部 (Complex Head) を構成すると述べている)、「も」の素性が継承できると考えることができる。不定語のもつ解釈不可能な[uQ]素性と「も」のもつ[iQ]素性が素性照合され、不定語一致 (Indeterminate Agreement) が生じると、「全称」として解釈される。また、D 主要部のもつ解釈不可能素性[uwh]も「誰」のもつ解釈可能素性[iwh]によって同時に照合されれば、主要部と「も」が同時にはたらくことが説明されるだろう。より目標 (Goal) に近い「も」によって不定語の[Q]素性が照合されると、不定語は「か」と結びつくことができなくなるため、文末の「か」は Wh 疑問文ではなく Yes/No 疑問文のマーカーとしてはたらくということが導き出される。

³⁶ 榎原 (2017b) では、[Q]素性における一致をもたらす関係として、指定部・主要部の一致 (Spec-Head Agreement) を採用していたが、指定部・主要部の一致を支持するには、Chomsky (1995) に従い、移動操作の適用対象が範疇全体ではなく、素性であるとする Move-F を採用する必要がある。不定語の場合、[Q]素性が LF で移動することを仮定しなければならず、LF 部門における計算が煩雑にならざるをえない。Chomsky (2000, 2001)、および Hiraiwa (2001, 2005ab) によって論じられた多重一致 (Multiple Agreement) を採用すると、指定部・主要部 (Spec-Head) の関係を維持する必要はなくなるため、Move-F を採用する必要もなくなる。しかし、後に述べるように、主要部に位置する「も」や指定部に位置する「も」と、他の位置にある「も」とに振る舞いの差が見られることから、指定部・主要部の一致 (Spec-Head Agreement) が積極的に適用される場合があることは否定しない。

以下に、全称の「も」として解釈される場合の樹形図を示す。

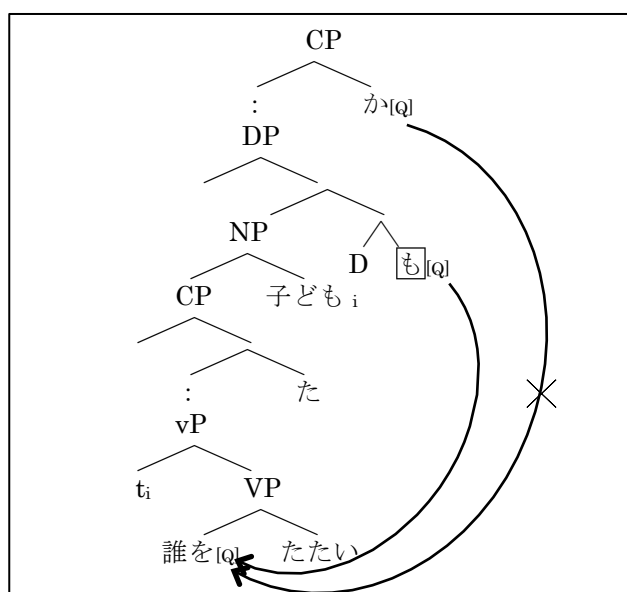
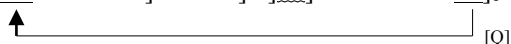


図 23 主要部に付加する「も」と不定語の一致関係

・累加の「も」：最大投射付加

②先生は太郎をたたいた子どもを叱り、他に誰をたたいた子どもを叱ったか確認している。

(365) 先生は、[CP[DP[DP[NP[CP 誰をたたいた]子ども]D]も]叱りましたか]



次に、「特定の子ども」以外の存在の可能性を表す累加の「も」として解釈された場合、「も」が DP に付加し[Q]素性の一致のための探索子となる主要部位置にないとすると、主要部 D は[Q]素性と照合する素性をもたないため、[Q]素性の一致は起こらない。不定語は C の主要部である「か」によって[Q]素性が照合されることで、Wh 疑問文として文が解釈されるということがわかる。以下に、累加の「も」として解釈される場合の派生を示す。

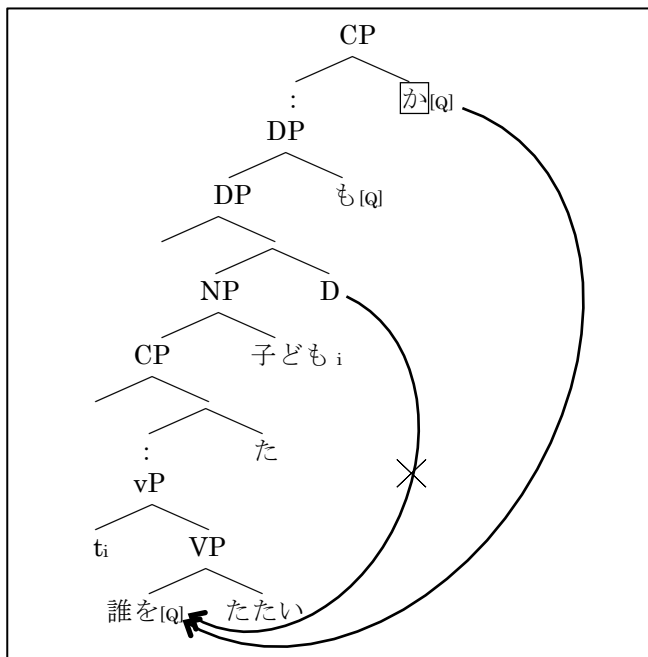


図 24 最大投射に付加する「も」と不定語の一致関係

「も」が動詞句に後続している場合であっても、累加の「も」としての解釈に加え、全称の「も」としての解釈が得られる。この場合、①の全称の解釈をもたらす全称の「も」は v 主要部に付加し、「 v +も」と不定語との素性照合が生じると考えることができる。②の累加の解釈となる場合は、 vP に付加し、主要部にないため不定語「誰」との一致は生じない。このようなアプローチをとることによって、動詞句に後続する「も」も統一的に扱えるようになる。

(366) 先生は、誰をたたきもしましたか。

① 先生が子どもを全員たたいたかどうか確認している。

(367) A: 先生は、 $[CP[FinP[vP[VP$ 誰をたたき $]v$ +も $]$ しました $]か$ $]$ 。



B: はい、誰をたたきもしました。

② 先生が（叱った上に）たたいた子どもが誰か確認している。

(368) A: 先生は、[CP[FinP[vp[vp 誰をたたき]も]しました]か]



B: 太郎をたたきもしました。

以上、不定語と共起し、全称として解釈される「も」は、累加の「も」とは異なり主要部に直接付加し、「か」と同様不定語に値を与える要素として不定語がもつ[Q]素性の照合が行われること、不定語が局所的に「か」や「も」と一致するということを確認した。このように、不定語と「も」は、「も」が主要部に位置することで[Q]素性の一致が説明されることが明らかになった。

4.4.2. 数量表現と「も」との一致

不定語と結びつく「も」においては、その一致関係から主要部に直接付加するという構造を提案したが、数量表現と結びつく「も」は、以下のテストより、「3 人」と「も」どちらか一方の削除が許されることから「も」と数量表現自体には一致関係がないということが明らかである。

(369) A: 今年は学生が 3 人も発表するの？

B: {3 人も／3 人 $\emptyset$ ／ $\emptyset$ も}、発表するんですよ。

また、数量を表す不定語である「何人」と「も」が共起した場合、(370)と同様、(371)のうち不定語のみが削除され「も」が残留する例が容認されないことから、不定語と「も」が一致を要する関係にあることがわかる。さらに、(372)では「どの学部」への答えとして(372B₂)が容認されるのに対し、(373A)の「何人」への答えとして(373B₂)のような「30 人も」が容認されない。このことから、(373A)は「何人」をきく Wh 疑問文として解釈されず、不定語が「も」を越えないため、疑問文の文末形式と結びつかないことがわかる。第 3.2.2 節にて議論したように「も」が CL 主要部にあるとすると、不定語である以前に数量表現「何人」の一部である「何」は、「も」と CLP 内で指定部・主要部の関係にあるということになる。素性照合の対象が顕在的に指定部・主要部の関係にある場合は、義務的に素性が照合されると説明することができる。

(370)A: 今年はどの学生も発表するの？

B: {どの学生も／*どの学生 $\emptyset$ ／# $\emptyset$ も}、発表するんですよ。

(371)A: 今年は何人も発表するの？

B: {何人も／*何人 $\emptyset$ ／# $\emptyset$ も}、発表するんですよ。

(372)A: 先生はどの学部の学生も何人誘いましたか。

B₁: (全学部の学生を誘った) どの学部の学生も 5 人誘いました。(全称)

B₂: (誘ったのはどの学生か、また何人か) 文学部の学生も 5 人誘いました。(累加)

(373)A: 先生はどの学部の学生を何人も誘いましたか。

B₁: (ある学部の学生をたくさん誘った) 文学部の学生を何人も誘いました。(極限)

B₂: (誘ったのはどの学部で何人か) #文学部の学生を 30 人も誘いました。(極限)

(374) 今年は[_{CP}[_{TP} [_{CLP} 何 人+も] [_{VP} 発表す]る]の]？



以上、数量表現と結びつく「も」は主要部である類別詞 CL に付加することで、一致が説明されることを見た。また、数量表現が不定語であった場合には指定部・主要部の一致でもって「も」がその照合対象として不定語と義務的に一致するということが明らかになった。

4.5. ぼかしの「も」による一致³⁷

次に、A 類、B 類、C 類のそれぞれのぼかしの「も」が他の要素との一致関係にあるかどうかを削除、および「も」の残留の例から考察する。

まず、典型例を表す (ア) の「も」、すなわち A 類に属する「も」は、以下のとおり、「宴」や「夏」といった名詞句や、その周辺要素を自由に削除することができることから、名詞句と「も」には一致関係が見られないことがわかる。また、「も」を含め句全体を削除し、他の要素を残すことができること、さらに、「も」をもつ句に後続する要素を全て削除できることから、「も」をもつ句と他の要素の間にも [Q] 素性の一致関係がないということが予想される。

³⁷ 本節は榎原 (2018a)、および榎原 (2017c, 2018c) の内容の一部に基づき加筆修正したものである。

(375)a. 我々が到着したときは、宴もたけなわだった。

b. A: あなたが到着したときは、宴もたけなわでしたか？

B₁: {宴も／宴 Ø／Ø も／Ø}、たけなわでしたね。

B₂: はい、宴も Ø。

(376)a. 夏も真っ盛りになってきましたね。

b. A: 夏も真っ盛りですか？

B₁: {夏も／夏 Ø／Ø も／Ø}、真っ盛りですよ。

B₂: そうですね、夏も Ø。

また、時にかかわる（イ）の「も」、すなわち B 類に属する「も」も同様に、「夏」や「平成」といった名詞句を削除することができることから名詞句と「も」には一致関係が見られないことがわかる。また、「も」をもつ句を削除し、文末といった要素を顕在化させることができることから、「も」をもつ句と他の要素の間にも [Q]素性の一致関係がないということが予想される。

(377)a. 夏ももうすぐやってくるのに、まだコートを着ている。

b. A: 夏ももうすぐやってきますよね？

B₁: {夏も／夏 Ø／Ø も／Ø}、やってきますねえ。

B₂: ねえ、夏も Ø。

(378)a. 平成も終われば、新しい時代がやってくる。

b. A: 平成も終わるでしょう？

B₁: {平成も／平成 Ø／Ø も／Ø}、終わりますよ。

B₂: そうですね、平成も Ø。

最後に、一般則や解釈にかかわる（ウ）の「も」、すなわち C 類のぼかしの「も」の助詞残留を観察する。以下の例文が問題ないことから、付加対象の名詞句と「も」には [Q]素性の一致関係が見られないことがわかる。また、「も」を含め句全体を削除することができることから、「も」をもつ句と他の要素との間にも [Q]素性の一致を要求しないということが予想される。

(379)A: お前は本当にこりないなあ。

B₁: {お前も／お前 $\emptyset$ ／ $\emptyset$ も／ $\emptyset$ }、こりないねえ。

B₂: ねえ、お前も $\emptyset$ 。

(380)A: 白鵬が負けたんだって。

B₁: {白鵬も／白鵬 $\emptyset$ ／ $\emptyset$ も／ $\emptyset$ } 負けるんだねえ。

B₂: そう、白鵬も $\emptyset$ 。

よって、A 類ばかりの「も」や、B 類ばかりの「も」、C 類ばかりの「も」がかかわる[Q]素性の一致は、見られないということが明らかとなった。

4.5.1. 係り結びと一致

古典語では、係り結びは「ぞ」「や」「こそ」のような係助詞が陳述に影響を及ぼし、文末の形式（動詞の活用形）を選択する現象であり、「も」も係り結びが生じる要素としてとらえられることが多い。舩城（1987）、大野（1993）、Watanabe (2002) によると、係り結びは連体形と終止形の同化により、11 世紀頃から徐々に減退していつているという。長谷川（2012）は、「と」節による文タイプの選択が現代版の係り結びとして扱えるとしており、係り結びに類似した文末呼応が現代日本語にも存在することを指摘している。

(381)a. 窓を開けると雪が見える。

b. #太郎が来ると会いますか？ （長谷川 2012: 34 より抜粋）

長谷川（2012）によれば、係り結びは CP 層における一致現象であり、文タイプが選択されるような構文は、ForceP において指定部に位置する要素と主要部にある文タイプ素性との指定部・主要部の一致が生じているとみなすことができるという。

(382)CP レベルでの「一致」現象（いわゆる「係り結び」）

主要部 A（結び・述語形態・終助詞）の素性が、下位構造に「一致」する素性を持つ要素 B を指定（要求）し、その素性を持つ要素と局所的関係に入り、文の特定の意味解釈・語用機能を可能とする現象。（長谷川 2012: 31-32 脚注より）

現代日本語のぼかしの「も」にも古典語の係り結びの性質が残っているとすれば、CP 層において主要部・指定部の一致が生じていることも予想される。一般則や解釈を想定させるような C 類ぼかしの「も」について、野田（1995）は、聞き手にたいするムードを選択する（南（1974, 1993）の階層構造では D の階層ではたらく）ことを主張している。

(383)#息子さんも大きくなりましたか？

(384)#おまえも大きくなれ。 （野田 1995: 23 より、「#」は筆者による）

上記の(383)や(384)の文中の「も」が C 類ぼかしの「も」として解釈されにくいことから、疑問文や命令文といった特定の文末形式と C 類ぼかしの「も」は結びつきにくいと考えられる。次節より、C 類ぼかしの「も」をもつ句による呼応も「一致」の一つとして考えられると予想し、文末形式と「も」との「一致」について考察する。

4.5.2. C 類ぼかしの「も」による呼応と一致

FinP より上位に位置すると考えられる要素とぼかしの「も」との共起関係について、さらに詳細に検討する。モダリティは、カートグラフィーによる枠組みでは ModP もしくはそれより上の階層に生起し、命題に対する話し手の判断など文の述べ方を担う（日本語記述文法研究会(編) 2003）ものであるが、以下のようにぼかしの「も」はあらゆるモダリティと共起することができる。

(385)a. もう社会人なのだから、太郎も大人になった方がいい。（評価）

b. いろんなことを経験して、太郎も大人になったようだ。（認識）

c. こうして、太郎も大人になったのだ。（説明）

d. 太郎も大人になったよねえ。（伝達）

また、表 6 のように表現類型のモダリティに基づくと、ぼかしの「も」に共起の制限が見られることがわかる。表現類型のモダリティとは、「伝達的な機能の表し分けという、文の基本的な性質を決めるもの（日本語記述文法研究会(編) 2003: 15)」であり、文タイプを指定する Force に相当するものであると考えられる。

表 6 C類ぼかしの「も」と表現類型のモダリティの呼応

モダリティ			要素	例文
表現類型	情報系	叙述	(平叙文)	太郎 <u>も</u> 大人になった。
		疑問	か	#太郎 <u>も</u> 大人になりました <u>か</u> ？
	行為系	意志	しようっと	わたし <u>も</u> 大人になろう <u>っと</u> 。
		勧誘	しよう	#太郎 <u>も</u> 大人になろう。
		行為要求	てください	#太郎 <u>も</u> 大人にな <u>ってください</u> 。
		感嘆	なんて	?? <u>なんて</u> 太郎 <u>も</u> 大人なんだろう！

表 6 より、C 類のぼかしの「も」は、疑問、勧誘、行為要求など、聞き手との情報共有を必要とせず、話し手と聞き手の間に情報格差のあることを示す文とは共起が難しいことからも、ForceP において聞き手との共有事項が前提となる要素を選択していることがわかる。さらに、「か」は話し手が情報をもっていないこと、「よ」は聞き手がもっていない情報を話し手が提供すること示す要素であるが、以下の(b)の文のように下降調で発話されると、「か」は納得、「よ」は状況把握を意味する。同音の要素であっても話し手・聞き手間の情報の格差を前提としない文であれば、ぼかしの「も」の生起が可能である。よって、C 類ぼかしの「も」として機能するには、話し手と聞き手のもつ情報が共有される文末形式との呼応が必要である。

(386)a. #太郎も大人になったか？

b. 太郎も大人になったか。(下降調) 時が経つのは早いもんだな。

(387)a. #違うよ、太郎も大人だよ。

b. 太郎も大人だよ。(下降調) すっかり大きくなったなあ。

上記のような呼応は、CP の上階層で生じる現象であることから、情報構成にかかわる一致であると考えることができる。ただし、C 類ぼかしの「も」は、焦点性が低いためにとりたての対象が具体的に明示されず、[+FOCUS]素性では、一致関係が説明されない。

(388) 太郎も悪いねえ。

そこで本節では、C 類ぼかしの「も」がかかわる素性は、情報の関連付けにかかわる LINK 階層における[+LINK]素性であるということを提案したい。第 4.2 節にて述べたとおり、LINK は話し手や聞き手がもつ既知情報に当該事態を結びつける性質をもつ。第 1.2.3 節にて論じたとおり、中尾（2008）に従えば、ぼかしの「も」によって生まれる「情意」は、ある情報や解釈がそれぞれ一般則や他の可能な解釈に「累加」されることで生じるものである。そのため、文の「情意」は「も」の[+LINK]素性の一致から生じると考えられる。ぼかしの「も」をもつ句は ForceP の指定部に位置する³⁸と考えられるため、指定部・主要部の一致を支持することができる。C 類ぼかしの「も」が、Force 主要部の[+LINK]素性と一致し、既知情報と命題を関連付けるならば、疑問など既知情報と関連付けられないような素性（[-LINK]素性）をもつ文末形式とは一致が生じないため、すわりが悪いと考えることができる。ここから、情報構成にかかわる素性の照合においても、対象となる要素が指定部・主要部の関係にあった場合、義務的に一致が生じる、ということが考えられる。

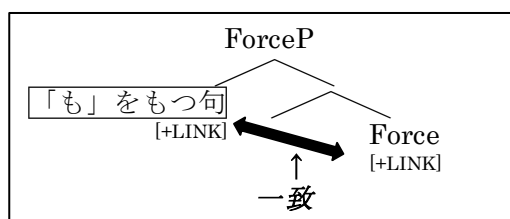


図 25 「も」をもつ句の ForceP における一致

以上から、長谷川（2012）において言及される C 類ぼかしの「も」による一致は語用論的解釈にかかわる文タイプと呼応し、一致関係が見える形で語用論の段階に送られると説明される。

4.5.3. A 類、B 類ぼかしの「も」による呼応と一致

A 類に属するぼかしの「も」や B 類に属するぼかしの「も」の文末呼応についても確認しておく。

³⁸ 榎原（2018a）では、C 類ぼかしの「も」をもつ句について、ForceP より下に位置する指定部位置に生起し、ForceP 指定部へ移動することを想定していたが、本稿では、不必要な移動をなるべく排除する方針をとっている。「も」が ForceP より下に位置する指定部位置に生起するのであれば、主要部の素性を継承したり、[+LINK]素性を Force 固有のものとしないうという代案も考えられる。

表 7 A 類ばかりの「も」と表現類型のモダリティの呼応

モダリティ			要素	例文
表現類型	情報系	叙述	(平叙文)	夏 <u>も</u> 真っ盛りになった。
		疑問	か	夏 <u>も</u> 真っ盛りになりました <u>か</u> ？
	行為系	意志	しようつと	夏 <u>も</u> 真っ盛りに <u>しようつと</u> 。
		勧誘	しよう	夏 <u>も</u> 真っ盛りに <u>しよう</u> 。
		行為要求	てください	夏 <u>も</u> 真っ盛りに <u>してください</u> 。
		感嘆	なんて	<u>なんて</u> 夏 <u>も</u> 真っ盛りなんだろう！

表 7 のように、A 類のばかりの「も」は、様々な文タイプと自由に共起できるため、文末形式との一致を必要としていない。よって、A の段階に属するばかりの「も」は文末形式のもつ素性との一致が生じないということが明らかとなった。A 類ばかりの「も」は第 3.3 節にて論じたように、vP 内の主要部に付加することから、付加対象との[+FOCUS]素性の一致が生じていると考えることができる。

表 8 B 類ばかりの「も」と表現類型のモダリティの呼応

モダリティ			要素	例文
表現類型	情報系	叙述	(平叙文)	夏休み <u>も</u> 終わった。
		疑問	か	夏休み <u>も</u> 終わりました <u>か</u> ？
	行為系	意志	しようつと	#夏休み <u>も</u> 終わ <u>ろうつと</u> 。
		勧誘	しよう	#夏休み <u>も</u> 終わ <u>ろう</u> 。
		行為要求	てください	#夏休み <u>も</u> 終わ <u>ってください</u> 。
		感嘆	なんて	# <u>なんて</u> 夏休み <u>も</u> 終わった <u>んだらう</u> ！

また、B 類のばかりの「も」は、時の移り変わりを表すという特性からも明らかであるように、人称制限のある要素とは共起が難しいということがわかる。よって、B 類のばかりの「も」と人称にかかわる ϕ 素性をもつ T 主要部が[+FOCUS]素性の一致を生じさせているということを提案したい。B 類ばかりの「も」を想定する文は、時の移り変わりを感じた時に

発せられるため、文全体が新情報であることが多い。TP は FinP 内にあることから、指定部・主要部の一致によって義務的に[+FOCUS]素性が一致することが考えられる。

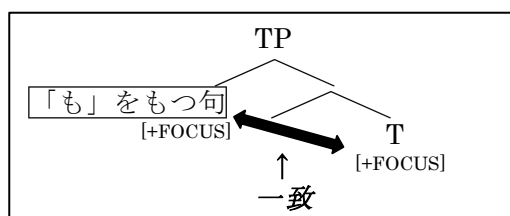


図 26 「も」をもつ句の TP における一致

以上、「も」の付加対象のみが削除される助詞残留の構造から、ぼかしの「も」にはそれぞれ累加の「も」と同様[Q]素性の一致ではなく情報構成にかかわる[+FOCUS/+LINK]素性の一致が想定され、また指定部位置にある「も」をもつ句は、義務的に指定部・主要部の一致が生じることを見た。

4.6. まとめ

「も」にはそれぞれ[Q]素性の一致、[+FOCUS]素性の一致、[+LINK]素性の一致がかかわることを見た。「も」が不定語と結びつく場合、[Q]素性との一致がかかわり、不定語のもつ[Q]素性と結びつく。また、「も」の累加性にかかわるとりたて対象と結びつく場合、「も」ととりたて対象との[+FOCUS]素性、もしくは[+LINK]素性の一致がかかわる。FinP 内では[+FOCUS]素性、ForceP においては[+LINK]素性によって「も」が照合されることを提案した。よって、「も」は、[Q]素性、および[+FOCUS/+LINK]素性をもち、それぞれ他の要素と結びつくということが明らかとなった。

(389)(i) [Q]素性の一致が生じる「も」：不定語と共起する「も」②

(ii) [+FOCUS]素性の一致が生じる「も」：(ア) のぼかしの「も」①、数量表現と共起する「も」③、累加の「も」④、(イ) のぼかしの「も」⑤

(iii) [+LINK]素性の一致が生じる「も」：(ウ) のぼかしの「も」⑥

以上の観察から、各「も」の階層構造上の特徴が見られることを示した。日本語においては、表面的な階層構造によって[Q]素性の一致、および[+FOCUS/+LINK]素性の一致が説

明され、階層構造における関係が情報構成の段階でも維持されるということがわかった。よって本稿では、情報構成のための「も」の生起、および「も」と他の要素との関係も、狭義の統語論（Narrow Syntax）において決定するという立場をとりたい。モデルは以下図 27 のとおりである。

統語計算（Syntactic Computation）	
・ 併合、移動	→ 調音・知覚システム（音声）
・ ϕ 素性、[Q]素性の一致	→ 概念・意図システム（意味）
・ [+FOCUS]素性、[+LINK]素性の一致	→ 情報構成 → 語用論

図 27 統語計算と情報構成

第 2.4 節にて論じたように、一致関係にある一方の削除現象は、LF コピーが用いられるため統語構造における ϕ 素性の一致、[Q]素性の一致が許されない。一方、情報構造上の [+FOCUS]素性の一致、[+LINK]素性の一致は、文末呼応や音声的なフォーカスによって具現化される「一致」であり、LF コピーであっても素性は維持されるため「も」や「も」と結びつく要素の削除が自由に行われると考えられる。よって、[+FOCUS]素性の一致は、照合によって削除されない意味や音声のインターフェースにかかわる素性とは異なる種類の素性による一致であると考えられる。Shudo (2002) の主張のとおり、「も」の機能は語用論において解釈されるが、文の構成を担う統語論から情報の処理を行う語用論へのインターフェースを担っているのが情報構成であると考え、談話における文脈との整合性を計算する情報構成のために、[+FOCUS/+LINK]素性の一致が行われると考えられる。すなわち、情報構成にかかわる [+FOCUS]素性や [+LINK]素性の一致は、語用論における計算対象を決める統語論的操作であると言える。

第5章 「も」による作用域³⁹

本章では、各「も」の統語と意味との対応を明らかにするため、各生起位置に位置付けられた「も」とそれぞれの意味を、累加性、および作用域という観点から整理してゆく。第4章にて議論したとおり、本稿では「も」の一致が作用域の決定にかかわり、語用論的解釈のための計算の単位となるとし、議論を進める。

5.1. 累加の「も」による作用域

まず、寺村（1991）も「基本的」であるとしている累加の「も」について、統語と意味の対応を確認する。累加の「も」の付加によって想定される変項を累加性の及ぶ範囲であるとする、累加の「も」の累加性の及ぶ範囲は、文脈によって決定されることがわかる。

(390)a. 〈太郎と花子〉は学生だ。〈次郎〉も学生だ。

b. 学生 = {太郎, 次郎, 花子,}

(391)a. (天気が悪くなる) 〈風が吹いた〉。〈雨も降る〉だろう。

b. 天気の悪化 = {雨が降る, 風が吹く, 曇る,}

累加の「も」の上記のような統語論的特徴は「焦点の拡張」として扱われる。「も」における「焦点の拡張」とは、(392)のように「も」が付加されている「雪」だけでなく、(393)のようにそれに後続する要素にも「も」の意味作用が及ぶという現象である。

(392)a. 〈雨が〉降った。〈雪〉も降るだろう。

b. 降る = {雨, 雪, 霰,}

(393)a. (天気が悪くなる) 〈風が吹いた〉。〈雪も降る〉だろう。

b. 天気の悪化 = {雪が降る, 風が吹く, 曇る,}

³⁹ 本章は榎原（2018b）から内容を大幅に加筆修正したものである。

沼田（2009）も、このような焦点の拡張を含め、焦点の広がり方に関して、以下の三種類が存在するとしている。

(394) (i) 直前焦点 (Normal Focus) : とりたて詞の直前にある要素の集合を焦点とするものの

(ii) 後方移動焦点 (Backward Focus) : とりたて詞が付加された要素、その後の要素が焦点になるもの

(iii) 前方移動焦点 (Forward Focus) : 焦点範囲とは離れたところに「も」が位置するもの⁴⁰

沼田・徐（1995）の主に「直前焦点」における観察から、累加の「も」は「も」が直接併合 (Merge) した要素を必ず焦点としなければならないことがわかっており、主語の「太郎」にしか焦点がおかれなない場合、(396a)は容認されない。以下の文の統語構造は、(395b)や(396b)のように表示される。

(395)a. 〈花子〉は切符を買った。〈太郎〉も切符を買った。

b. [TP[DP[DP 太郎]も][vP 切符を買っ]た]。

(396)a. 〈花子が〉切符を買った。# 〈太郎は〉切符も買った。

b. [TP[DP 太郎は][vP[DP[DP 切符]も]買っ]た]。

また、榎原（2016）は、沼田（2009）の観察から前方移動焦点が想定されても上記の(396)

⁴⁰ 前方移動焦点とは、焦点範囲とは離れたところに「も」が位置するものであり、沼田（1986）では、以下の(9a)と(9b)は同義であるとされている。

9) a. 太郎は〈ピアノ〉を弾く上に、〈バイオリン〉を弾きもする。

b. 太郎は〈ピアノ〉を弾く上に、〈バイオリン〉も弾く。 (沼田 1986: 150)

沼田（2009: 71）では、前方移動焦点の構造は [.....<NP/AdvP>Pred T] と記述されているが、焦点となる目的語は、「も」の c-統御範囲である動詞句 VP 内の一要素である。よって、実際の焦点は本文の(175)や(176)でも示したように、付加対象の同形の要素は実際には異なる事態であるため、直前焦点として説明されると考えられる。

10) 太郎は〈ピアノを弾く〉上に、〈トランペットを吹き〉もする。

11) a. *太郎は〈家でピアノを〉弾き、〈学校でピアノ〉も弾く。

b. 太郎は〈家でピアノを弾き〉、〈学校でピアノを弾き〉もする。

「も」に関しては、上記のことが示されたが、今後、前方移動焦点が頻繁に見られる「だけ」「ばかり」なども分析の対象とし、より厳密に分析する必要があるだろう。

のような例が説明されず、累加の「も」の累加性が及ぶ範囲、すなわち作用域は、「も」の c-統御する領域や「も」の付加された句が c-統御する領域に顕在的に及ぶことを示している。

「も」をもつ句の位置が異なる(a)の文と(c)の文を比較すると、「も」をもつ名詞句がより高い階層に生起されている(c)の文のほうが容認されやすいことがわかる。焦点の拡張が生じる場合（沼田（2009）では「後方移動焦点」）には、最大投射に「も」が付加した句が焦点の及ぶ要素を c-統御している必要があることを指摘している。

(397) a. [友人の手助け] ?? 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にノートも写させ〉てあげた。

b. $[_{VP} [_{PP} \text{次郎に}] \times [_{VP} [_{DP} \text{ノート}] \text{も}] \text{写}] \text{させ}$

c. [友人の手助け] 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にもノートを写させ〉てあげた。

d. $[_{VP} [_{PP} [_{PP} \text{次郎に}] \text{も}] [_{VP} [_{DP} \text{ノートを}] \text{写}] \text{させ}]$

(398) a. [親の頼みごと] ?? 〈母親が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈父親が娘に牛乳も買ってくるよう頼んだ〉。

b. $[_{CP} [_{TP} \text{父親が}] \times [_{VP} \text{娘に}] \times [_{FinP} [_{DP} \text{牛乳}] \text{も}] \text{買ってくるよう}] \text{頼んだ}]$ 。

c. [親の頼みごと] 〈母親が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈牛乳も、父親が娘に買ってくるよう頼んだ〉。

d. $[_{CP} [_{DP} [_{DP} \text{牛乳}] \text{も}] \text{ } _i [_{TP} \text{父親が } [_{VP} \text{娘に } [_{FinP} \text{ } _i \text{買ってくるよう}] \text{頼んだ}]]]$ 。

以上、累加の「も」の焦点は「も」の付加対象に及び、また、任意的に「も」をもつ句の作用域へ焦点の拡張が見られることを確認した。焦点の拡張は、第 4.3 節にて示したように「も」をもつ句の[+FOCUS]素性とその c-統御内の要素がもつ[+FOCUS]素性との一致によって生じると考えることができる。以下のように、累加の「も」はその生起位置における一致によって、語用論における計算単位であるとりたて対象を決定するということがわかる。

(399) a. $[_{DP} [_{DP} \text{雪}] \text{も}] \text{降るだろう。}$

$[\text{ }]_{[+FOCUS]}$

b. 計算単位： $[_{DP} \text{雪}]$

(400) a. $[_{VP} [_{DP} \text{雪}] \text{も}] \text{降る}] \text{だろう。}$

$[\text{ }]_{[+FOCUS]}$

b. 計算単位：[_{NP} 雪が降る]

このように、その他の「も」においても情報構成のために素性が一致し、それぞれの意味として機能していることを論じる。

5.2. 極限の「も」による作用域

5.2.1. 不定語+「も」による作用域

まず、不定語と「も」との結びつきを累加性という観点からどのように捉えるべきかについて述べておきたい。(401b)のような全称を表す「も」は(401a)と同様「子どもすべて」を意味する普遍数量表現として扱われる。

(401)a. 先生が子どもを全員叱った。

b. 先生がどの子も叱った。

また、「誰」「何」「いつ」といった不定語と結びつく「も」は、肯定の述語と共起すると同類のものすべてを肯定するという意味、否定の述語と共起すると同類のものすべてを否定するという意味を表す（澤田 2007、日本語記述文法研究会(編) 2009）。

(402) 「誰」「何」「どこ」「いつ」などの不定語に直接「も」が付加されると、〔中略〕全部の意味になる。これは「も」によって含意されているある事柄に対する要素を定めることなくその全ての要素を不定語〔中略〕によって指しているため「も」によって含意された対照集合の要素すべてを指すことができるのである。（澤田 2007: 60）

Hamblin (1973) に従うと、不定語それ自体が答えとして想定される集合のセットを示し、「誰」であれば、想定可能な「人」のセットを示していると考えることができる。すなわち、普遍量化性は不定語が有している潜在的な性質であり、「も」と結びつくことによって活性化されるということが予想される。

(403)a. 先生が太郎をたたいた子どもも叱った。

b. 先生が誰をたたいた子どもも叱った。

- c. 先生が誰をたたいた子どもを叱ったか知ってる。
- d. 誰 = {A さん, B さん, C さん, D さん,}
- e. 誰も = A さん⊕B さん⊕C さん⊕D さん⊕.....

Shimoyama (2006) 等、不定語と共起する「も」と累加の「も」は異なる要素であるとしている意味論の観点からの先行研究も多いが、本稿では、このような「も」も、累加の「も」から出発するものとして、累加の「も」と同じアプローチを用いる。

- (404) a. 太郎はどこに行きましたか。
- b. 太郎がどこに行ったか知っていますか。
- (405) a. (太郎が) 何を食べた店がこんでいましたか。
- b. (太郎が) 何を食べた店も こんでいましたか。

Kobuchi-Philip (2009) は、意味論から累加の「も」と不定語と共起する「も」の意味表示の統一化を試みている。不定語と「も」が共起する場合、その構成メンバーに個々にかつ余すところなく累加の「も」の機能が適用され、その計算の結果全称性が生じるとしている。例えば、「子ども」の集合の中に(408)のようなメンバーがいるとすれば、(407)は(a)-(d)の文全てを合算した文であるということが考えられる。

- (406) a. 学生がどの人も走った。(Kobuchi-Philip 2009: 182)
- b. 学生がジョンもメアリーも走った。
- (407) どの子も叱った。
 - a. 太郎も叱った。
 - b. 花子も叱った。
 - c. 次郎も叱った。
 - d. ゆりも叱った。

(408) 子ども = {太郎, 花子, 次郎, ゆり}

Kobuchi-Philip (2009) による「も」の意味表示では、以上のような主張から、「も」の基本義を、条件を満たす要素が他に一つは存在するという「累加」として、(409)のよう

に表している。

(409) *Mo*: $\lambda P \lambda R \lambda x [\dots \wedge (((AT(x) - AT(\oplus P)) \cap R) \neq \emptyset)]$ (Kobuchi-Philip 2009: 185 より)

(410)a. 先生が太郎も叱った。(太郎以外に先生が叱った人がいる。)

b. 先生がどの子も叱った。(子ども x 以外に先生が叱った人がいる。)

よって、不定語はそれ自体が普遍量化の性質を潜在的にもち、「も」が不定語と結びつくことで、不定語が示す具体的な要素を集合に加えていくことができるということがわかる。その要素が集合の中に最終的に全て加わることになるため、普遍量化のような表現効果をもたらすと考えられるのである。なお、以下のような例の場合、変項となりうるのは「X 学部」ではなく、「X 学部の学生」である。なぜなら、この場合「学生」はそれぞれ異なる人物でなければならないからである。

(411)a. 先生は〈どの学部の学生〉も誘った。

b. 誘った学生 = {医学部の学生, 工学部の学生, 文学部の学生, ……}

(412)a. 先生は〈誰が書いた本〉も持っている。

b. 持っている本 = {チョムスキーが書いた本, ラネカーが書いた本, ……}

また、累加の「も」との相違点として、全称の「も」は焦点が拡張しにくいということが挙げられる。(413c)のように、全称の「も」として解釈すると、「車を壊す」以外のイベントを想定することができず、焦点の拡張は生じにくい。これは、(413d)にて示すように、「も」の生起位置から、「壊す」まで作用域が及ばないためであると考えられる。また、(414)は、「も」が vP に後続するが、 v に付加する場合と vP に付加する場合が同じような作用域をもつため、意味の違いがほとんど見られない。(415c)の場合も、「全ての同級生」を表すのであれば、「太郎」の成功と「(どの) 同級生」の成功を対比させているという解釈は難しい。

(413)a. 学生が研究会に行った。(学生が)〈本も買っ)た。

b. $[_{TP}[_{DP}$ 学生が] $[_{vP}[_{DP}$ 本]も]買った] $[_{t}]$ 。

- c. 学生が事故を起こした。#学生が〈どの車も壊し〉た。⁴¹
- d. [TP[DP 学生が][VP[DP どの車 D+も 壊し]_x]た]。
- (414)a. 学生が研究会に行った。〈学生が本を買い〉 もした。
- b. [TP[VP[VP [DP 学生が][DP 本を]買い] も]した]。
- c. 学生が事故を起こした。#〈学生がどの車を壊し〉 もした。
- d. [TP[VP[DP 学生が][DP どの車を 壊し VP+も]した]。
- (415)a. 〈太郎が大学院に進学した〉。〈花子も今年から新社会人だ〉。
- b. [TP[DP[DP 花子]も][VP 今年から新社会人]だ]。
- c. 〈太郎が大学院に進学した〉。#〈どの同級生も今年から新社会人だ〉。
- d. [TP[DP どの同期 D+も][VP 今年から新社会人]だ]_x。

上記のように、不定語と結びつく「も」は、「主要部+も」と不定語が一致する構造にある。主要部に位置する「も」は、「も」が局所的に位置している不定語の[+FOCUS]素性と一致するため、[Q]素性の一致と同時に[+FOCUS]素性の一致が生じる。結果、焦点はその最大投射を越えないということが説明される。よって、上記の(c)の文は全称の表現として解釈される場合、焦点が最大投射を越えず、「も」をもつ句の作用域が見られない。

さらに、形容詞句でも同様に「も」はA 主要部に付加する場合と、AP に付加する場合がある。(416)のような場合は、「も」はAP に付加し、「どんなに」は「楽しく」と「充実した」にかかり「か」と一致するのに対し、(417)のような場合は、A 主要部に付加し「どんなに」と「も」が一致し、あらゆる「苦しい」程度を想定させることができる。

- (416)a. もうね、改めて、ワッツを聴き直してみて、原田監督との素晴らしい出会いを含め、木村さんが[[どんなに AP[AP 楽しく] も]充実した]現場]を過ごしていたか]が、手に取る様に心に染みいる様に伝わってきます… (<https://blog.goo.ne.jp/atatakasa11tk13/e/93b819341a9a86627b73728043285992>)
- b. 現場の様子 = {楽しい, 充実した, ……}

⁴¹ 実際には、動詞句内では「も」の焦点の拡張が行われやすいという観察も得られる。Kishimoto (2001) は、不定語と結びつく「も」が m-統御 (Kishimoto (2001) では、X の最大投射内に含まれる Y は X の領域内にあると述べている) により不定語を認可すると主張しており、「も」の累加性が及ぶ範囲が c-統御の範囲内で収まるかどうかを検討するには、より詳細な観察を要する。

(417)a. 曖昧な事を嫌い妥協のない性格なので、[_{AP} どんなに 苦しく+も]自分が求めた学問、仕事などは粘り強く追求して行きますが、人から与えられた目的はそれがどんなに良い事であっても自分が納得しないと受け入れません。(https://blogs.yahoo.co.jp/four294529/67683057.html)

b. 苦しい = {あまり苦しくない, 少し苦しい, とても苦しい,}

以上、累加の「も」は「も」の付加された句が c-統御する領域にまで任意的に焦点が及ぶのに対し、不定語と結びつく「も」は主要部付加という構造をもつため主要部との素性照合が可能な範囲にしか作用域が及ばず、焦点が顕在的に拡張しているように見えないということが明らかとなった。また、その局所的な関係から不定語と[Q]素性の照合が生じると、[+FOCUS]素性も同時に処理されることが予想される。不定語と結びつく「も」も語用論の計算単位を決定するものであるとすると、以下のように「も」による作用域、語用論において変項となる範囲は、「も」の素性と一致する不定語に及ぶということを示すことができるだろう。

(418)a. 学生が[_{DP} どの 車も]壊した。

□ [Q, +FOCUS]

b. 計算単位 : [_{DP} x 車]

5.2.2. 数量表現+「も」による作用域

上記の議論を数量表現と結びつく「も」にも適用し考察を行う。「3 人」「5 時間」「100g」といった数量表現と共起する「も」について、Kobuchi-Philip (2010) は、「30 人も」「何人も」といった極限の「も」は *many* を示す数量表現の一種であるとしており、数量表現と共起する「も」は累加の「も」とは異なり数量表現的であることを主張している。

(419) 太郎は昼間にビールを 3 杯も飲んだ。

澤田 (2007) 等も指摘しているように、数量表現と「も」との結びつきが他の要素との結びつきと決定的に異なる点は、「も」が付加している要素自体に数量などのスケールがあるということである。

(420) 数量詞は、それ自身内在的な序列をもっている。たとえば、「3 杯飲んだ」という事態が成立すれば、当然「1 杯飲んだ」「2 杯飲んだ」という事態が成立しているという含意関係である。(澤田 2007: 41)

これも不定語と結びつく「も」と同様の分析が可能であり、「も」によって、「人数」のスケールが想定されるということがわかる。

(421)a. 学生が 30 人も走った。

b. 走った人数 = {1 人, 2 人, 3 人, …… 29 人, 30 人}

(422)a. 学生が何人も走った。

b. 走った人数 = {1 人, 2 人, 3 人, …… 何人}

以下の例を累加の「も」と対応させて考えると、(423)のように、「5 万円も」は、数量が一番多いものとして、極限的な性質をもつと考えることもできる。また、(424)のような「5 万円も」や(425)のような「1 人も」も数量が最低値であるということ、つまり(423)とは逆の「極限」性を示している。このように、数量表現と結びつく「も」は数量自体のスケールが他者として文脈から想定されるものの、「数量」自体が変項の単位となっていることは共通している。

(423)a. タイヤを修理するのに 5 万円もかかった。

b. タイヤの修理費 = {1 万円, 2 万円, …… 5 万円}

(424)a. タイ往復の航空券は 5 万円もしなかった。

b. ~タイ往復航空券 = {60 万円, 30 万円, …… 5 万円}

・分割不可能な「1」

(425)a. パーティーには 1 人も来なかった。

b. ~パーティーに来た = {10 人, 5 人, …… 1 人}

また、累加の「も」との相違点として、焦点が広がらないということが挙げられる。(426)

のように、「3 人」が多いとして想定される文では、「3 人が捕まる」以外の事態を「も」によって想定することができない。数量詞の遊離が名詞句の移動の過程で数量詞が残留したものであるとすれば、名詞句の移動前にあった構造には、痕跡が残っていると考えることができる。第 3.2.2 節より、数量表現と結びつく「も」は、CL 主要部に付加するため、作用域が動詞にまで及ばない。よって、数量表現と結びつく「も」は他の明示的要素まで「焦点が拡張しない」と観察される。

(426)a. 学生が研究会に行った。(学生が)〈本も買っ〉た。

b. [TP[DP 学生が][vP[DP[DP 本] も] 買っ]た]。

c. 学生が事故を起こした。#学生が〈3 人も捕まっ〉た。

d. [TP[DP 学生_iが][vP[CLP[3 t_i 人+も] 捕まっ_x]た]。

第 3.2.2 節、第 4.4.2 節より数量表現と結びつく「も」は主要部である類別詞 CL に付加することを示し、数詞と指定部・主要部の関係にあることを示した。指定部・主要部の一致は義務的であり、数量表現と「も」はその局所的な関係の中でしか一致が生じないことから、作用域が広がらず、焦点が拡張しにくいということが説明される。数量表現と結びつく「も」の焦点は、以下のように示すことができるだろう。

(427)a. 学生が[CLP3 人も]捕まった。

□_[+FOCUS]

b. 計算単位 : [CLP x 人]

以上、不定語と結びつく「も」と数量表現と結びつく「も」は、主要部付加という構造から、その作用域や、付加対象との一致関係が説明されることを見た。⁴²

⁴² また、「も」が vP に後続すると、以下の(12)のような構造になり、不定語や数量表現と共に起する「も」と同様に、v 主要部に付加する「も」を考えることができる。否定辞と比較的局所的な位置関係にあるため、動詞句の後にも作用域を及ぼすことができると考えられる。主要部に付加した「も」も焦点が拡張するということになってしまうが、「v+も」が主要部移動 (Head Movement) によって Neg の主要部まで移動しているという可能性も考えられる。

12) a. 太郎は〈花子がたたいたことを許した〉だけでなく〈先生に言いつけもしなかった〉。
 b. [TP[NegP[vP[先生に言いつけ] も] しなかった]た]。
 c. ??太郎は〈花子がたたいたことを許した〉だけでなく〈誰に言いつけもしなかった〉。

5.3. ぼかしの「も」による作用域

ぼかしの「も」も累加の「も」と同様にとりたての機能をもつとすると、A、B、C の段階の「も」において、それぞれが属する階層の範囲内でとりたての機能がはたらき、とりたてられる要素、すなわち語用論の段階における計算に必要な変項が決定すると考えられる。ぼかしの「も」の意味作用が及ぶ作用域について、生起位置・一致関係から説明を与えることを試みる。

(428)とりたてとは、文のある要素をきわだたせ、同類の要素との関係を背景にして、特別な意味を加えることである。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 3)

累加の「も」においては、(430)のように焦点の拡張が生じた場合、「ピアノを弾いた」を語用論的に含む「パーティーで行われたこと」といった前提がなければならないということを確認した。本稿におけるぼかしの「も」にも、(431)で示したように累加の「も」による焦点の拡張と同様の現象が見られるとし、(ア) A 類、(イ) B 類、(ウ) C 類の「も」がそれぞれ何をとりたててるのか、焦点の拡張がどの範囲まで拡張するのかを検証する。

(429)a. 花子がダンスを踊り、〈太郎〉もダンスを踊った。

b. ダンスを踊った = {花子, 太郎,}

(430)a. 花子がダンスを踊り、〈太郎もピアノを弾いた〉。

b. パーティーで行われたこと = {花子がダンスを踊った, 太郎がピアノを弾いた,}

(431)a. 〈そのカバンもボロボロだねえ〉。

b. 物事は風化するものである = {カバンがボロボロになる, 街が廃れる,}

5.3.1. A 類ぼかしの「も」による作用域

まず、A 類の「も」が何をとりたてているのか統語論的な観点から検討する。以下の「も」は全て「東京」に付加しているが、「も」に後続する要素から、(432)では「東京」のうち「銀座」を、(433)では「新橋」をとりたてていることが明らかである。後続する要素を「東京」

d. [TP[NegP[_{VP} 誰に言いつけ]_{VP} も]しなかつた]。

の下位語を明らかにするために副次的に加えられる要素だとすると、典型例とされるとりたての対象は文脈によって変わることがわかる。

(432) また、いつか高知に行ってあの美味しい鰹を戴きたいと思っていたら、なんと東京も銀座で食することができるお店に出くわしました。(https://www.tripadvisor.jp/ShowUserReviews-g1066444-d4776956-r221568783-Tosa_Dining_Okyaku-Chuo_Tokyo_Tokyo_Prefecture_Kanto.html)

(433) イベントの舞台は、東京も東京。地理に疎いクダカでも聞いたことがある、サラリーマン向け飲み屋のメッカ・新橋です！(https://okinawaupgiri.amebaownd.com/posts/2573802)

本稿では、A 類の「も」が付加する要素の下位語のうち典型例として想起されるものごとりたてられることが多いことは認めた上で、A 類に含まれる「も」を、「も」が付加している語の下位語をとりたてるものだと仮定したい。このように考えると、(434)、(435)のような典型例が見られない文であっても、A 類の「も」として同様の説明が可能となる。沼田 (1989) の主張する(434)の「柔らげ」の「も」も、とりたてられている「下町」が「東京」の典型例でなくても A 類の「も」であると考えることができ、同様に(435)も、A 類の「も」として統一的に説明される。中尾 (2008) がこのような「も」を典型例表示の「も」としているのは、「も」が付加する要素の下位集合のうち典型例として想定されるものごとりたてられることが多いからであろう。

(434) 東京も下町に行くとまだ江戸情緒が残っている。(沼田 1989: 179)

(435) 私は、東京も下町の生まれ、育ちだったが、成人後、神奈川県相模原市に住んでもう 40 年、ここが終の棲家となった。(http://kizyunokoro.web.fc2.com/essay985.htm)

(436) 東京 = {銀座, 新橋, 渋谷, 下町, 八王子, (東京の一部) }

上記の議論は、「X も X で」といった「も」による表現にも適用される。(437)のように「も」が付加した語自体ではなくその下位語（東京の下町など）をとりたてているという点が、A 類の「も」と共通している。このような表現は、並列する他の事態を要するという点では累加の「も」と相違ないため、「想定される事態」に焦点を当てただけではその特異性を説

明することはできないということがわかる。

(437)a. 東京も東京で訛りはあるらしい。

b. 東京も東京でいいところがあるよ。

c. 訛りがある／いいところがある = {東京の一部, 大阪, 名古屋,}

また、A 類のぼかしの「も」は、(440)や(441)、(442)のように、動詞句や文まで焦点が拡張しない。前節のように A 類ぼかしの「も」の生起位置を提案すると、以下のような例であれば、「も」が名詞句内の N に付加するために、「も」の性質が継承されるような句が生成されず、作用域がその NP 内にとどまると考えることができる。そのため、A 類従属節を構成する名詞句内にのみ焦点が及ぶ。

(438)?? 〈北も北〉、〈南も南〉に会場がある。

(439)# 〈夏〉 も 〈式〉 も 真っ盛りするとき、事件は起こった。

(440)# 〈夏も真っ盛り〉で 〈宴もたけなわ〉の会場は、多くの人が集まっている。

(441)# 〈夏も真っ盛りで〉、〈宴もたけなわです〉。

(442)# 〈北も北に植物園があり〉、〈南も南に水族館がある〉。

(443)a. [NP[NP 夏+も] 真っ盛り]の会場に、多くの人が集まっている。

b. [NP[NP 夏+も] 真っ盛り]の公園で子どもが遊んでいる]_x。

A 類ぼかしの「も」による作用域は、以下のように語用論における計算単位に変換させることができるだろう。[+FOCUS]素性がそれぞれ局所的に照合されるため、焦点が付加対象の下位語に及び、不定語や数量表現と共起する「も」と同様に分析されるということが考えられる。

(444)a. [NP[NP 夏+も] 真っ盛り]の会場に、多くの人が集まっている。

└───┘ [+FOCUS]

b. 計算単位：[NP 夏 x]

5.3.2. B 類ばかりの「も」による作用域

時にかかわる B 類の「も」は、文中の要素（句）をとりたて、そのとりたてた要素と同様の事態が想定される。以下の例文は、「夏が終わる」という動詞句をとりたて、時の移り変わりの中で切り取られる他の一場面を同類の要素とすることで、時の移り変わりを表す。

(445) 〈夏も終わる〉なあ。

(446) 季節の移り変わり = {春の始まり, 夏が終わる, 12 月の中旬, ……}

上記は「も」による焦点の範囲が付加対象を越え、動詞句まで拡張するということを示している。(447)のように、時の移り変わりに対して感慨を表す B 類の「も」として容認されることから、累加の「も」と同様の焦点の拡張が見られることがわかる。ただし、(448)は複数の事柄を導く接続助詞「し」が見られることから、「も」が時の移り変わりを表現するためでなく、同類の要素として事態を対比するために使用されていることが明らかであり、動詞句を越えて文全体に焦点が広がることを想定する例は見られなかった。よって、B 類の「も」の作用域は B 類従属節内に及ぶということがわかる。

(447) 〈夏も終わり〉〈新学期も始まり〉でしたね！ (<https://tokoya.biz/index.php?QBlog-20170831-1>)

(448) #ひと頃の厳しさが薄れたとはいえまだまだ暑い日もありますが、〈日も少しづつ短くなってきました〉し・・・〈楽しい夏も終わりましたネ〉！ (http://www.dr-ueno.com/img/news/news29_9.pdf)

第 3.3.2 節、第 4.5 節にて論じたように、B 類の「も」が TP 指定部にある DP に付加し、T 主要部と一致することから、A 類に属する「も」とは異なり、焦点の拡張が TP までの範囲で拡張することが考えられる。

(449) 〈春も過ぎ〉、〈夏も終わっ〉たら、いよいよ留学生活が始まる。

(450) # 〈5 月もとうとう終わりに近づいています〉が、〈6 月も始まろうとしています〉。

(451) [TP[DP[DP 夏]も]終わり]、新しい学期が始まる。

しかし、以下の(452)も主語自体がイベントとして捉えられ、B 類ぼかしの「も」として解釈される可能性があり、焦点の拡張が見られない例である。ここから、B 類ぼかしの「も」は文脈に応じて任意的に焦点の拡張が生じると考えることができる。

(452)a. もう〈8月〉も、〈夏〉も、もう終わりますね。(http://soen.tokyo/blog/akane/2016/08/)

b. もう終わり = {夏, 8月, 夏休み,}

B 類ぼかしの「も」は生産的ではあるが、時にかかわるものに限られるという点において、非常に特異である。ここから、B 類ぼかしの「も」は、C 類ぼかしの「も」から派生したものであるということが予想される。「日本語歴史コーパス (CHJ)」にて時を表す「月」、「モ」、(0～3 語あけて)「連体形」が共起する文を検索したところ、連体形節に含まれるぼかしの「も」として以下のようなものが見つかった。いずれも成立年が 1900 年以降であることから、B 類従属節内に生起するぼかしの「も」が登場したのは、1900 年代に入ってからであるということが予想される。⁴³よって、B 類の時にかかわるぼかしの「も」は、C 類ぼかしの「も」の文に生起する「も」が情意性を継承したまま B 類従属節内に生起されることでより自由に使えるようになった比較的新しい「も」であることが予想される。

(453)十一月も半となつた頃、文子の父は都合あつて大阪の方へ轉任した、母も一所に遷つた。(CHJ『女学世界』1909)

(454)八月も末に近い或る朝である。(CHJ『太陽』1917)

(455)處が其年の八月も近い七月十七八日、數日來の豪雨はさしにも廣い漢江一面に濁流滔々と漲らして、刻々増水の報は私達の心を脅すばかりでした。(CHJ『婦人俱樂部』

⁴³ 旧暦の「睦月」から「師走」まで、それぞれ「も」が付加した例も検索したところ、時の移り変わりを詠嘆している文は見られたものの、そのほとんどが主文で処理されるものであった。以下の例も已然形の「2 月も半ばになったので」という理由を表す節であるため、C 類に分類される節であると考えられる。ただし、古典語の已然形が文の階層構造のどこに属するものであるかという点が未だ明らかでない。

13) 世の中いとわづらはしきやうになりゆくにつけても、いつまで同じながめをとのみ、あぢきなれば、山のあなたの住まひのみ願はしけれども、心にまかせぬなど思ふも、なほ捨てがたきにこそと、我ながら身を恨み寝の夢にさへ遠ざかりたてまつるべきことの見えつるも、いかに違へむと思ふもかひなくて、如月も半ばになれば、大方の花もやうやう気色づきて、梅が香匂ふ風訪れたるも飽かぬ心地して、いつよりも心細さも、悲しさも、かこつ方なき。(CHJ『とはずがたり』1306)

1925)

(456)十二月も暮れやうとする二十七日の勘定日で御座いました。(CHJ『婦人倶楽部』1925)

以上から、B 類ぼかしの「も」による素性照合はまだ確立しておらず、累加の「も」とぼかしの「も」の中間的な要素として位置付けられる。よって、B 類ぼかしの「も」による作用域は、暫定的に以下のように T 主要部との指定部・主要部の一致によって、語用論的計算における計算単位を設定するとする。

(457)a. [TP[DP 夏も]終わり]、新しい学期が始まる。

_____ [+FOCUS]

b. 計算単位：[TP 夏が終わり]

5.3.3. C 類ぼかしの「も」による作用域

最後に、C の段階に属するぼかしの「も」の累加性について考察する。ぼかしの「も」は、中尾（2008）に従えば、①の一般則や②の他の解釈を想定させることができるという点で累加性をもつと言える。(458)や(459)のように、①の一般則を表す効果を期待した場合、「人は成長する」といった人間の共通認識から、その具体例として、「太郎が年をとる」といった命題が加えられるという解釈が可能となる。また、②の他の解釈を表す効果を期待した場合は、例えば「太郎の白髪」を見て得られる解釈の集合の中に「太郎が年をとる」といった解釈が加えられ、「太郎は病気だ」といった「他の解釈」をにおわせることにより、婉曲的な表現とすることができる。ぼかしの「も」が現れるとき、(458d)や(459d)のように逆の含みをもつ文を「も」でもって想起させることができない。話し手・聞き手の共有する「前提」が命題と語用論的に矛盾しないものである必要があることから、Shudo (2002) の主張する意味表示が有効であることがわかる。

① 「人間は成長するものだという一般則（意識：子どもが成長する）」

(458)a. [人は成長する]〈太郎も年をとったねえ〉。

b. 人は成長する = {太郎が年をとる, 妹が卒業する, 姪っ子が入学する, ……}

c. 〈太郎の娘が入学したね〉。〈太郎も年をとったねえ〉。

d. 〈花子はいつまでも若々しいね〉。# 〈太郎も年をとったねえ〉。

② 「太郎の状況・状態にもとづく解釈（意識：太郎は立派になった）」

(459)a. 「太郎の白髪が目立つ」〈太郎も年をとったねえ〉。

b. 太郎の白髪に対する解釈 = {太郎が年をとる, 太郎は病気だ, 太郎はストレスをためている,}

c. 〈太郎が疲れているね〉。〈太郎も年をとったねえ〉。

d. 〈太郎が元気に走っているね〉。# 〈太郎も年をとったねえ〉。

中尾（2008）は解釈の「も」には前提となる事態が必要であると述べており、その事態から得られる「他の解釈」が同類の要素となる。C類の「も」は上記のように、主語、述語といった「も」の付加した要素を越え、事態に対する態度までをとりたてていることがわかる。以下の例も、「細谷」以外に「大人」らしい人がいるということを表しているのではなく、「細谷は大人だ」という評価をとりたてているのである。

(460) 「新人が死球を投げたことについて」でも三回も謝ってきたルーキーに、気にしないで内角投げてこいって返事した細谷も大人だなあ（感心）。(<https://nariyuki.org/chibalotte20180204>)

(461) 細谷の対応に対する解釈 = {細谷は大人だ, 細谷は先輩としての自覚がある, 細谷は心が広い,}

潜在的意識活性化の「も」として分類される(462)も、「も」によって「藤井四段」は「普通の人間と同じように負けることがある」という話者の解釈が得られると説明することができる。「も」は「藤井四段の対局」に対する解釈の中から「藤井四段が負ける」という評価をとりたてており、同じ事態に対する別の態度が同類の要素として想定される。

(462) 「将棋の対局を見て」藤井四段も負けるか〜、というのが感想だね。(<http://yurulu.net/retire/hujii-souta-8/>)

(463) 藤井四段の対局に対する解釈 = {藤井四段が負ける, 藤井四段は調子が悪い, 藤井四段が負けるわけがない,}

「も」をもつ句の作用域がかかる累加の「も」とぼかしの「も」を対照させると、累加の「も」において見られた焦点の拡張と同じく、「も」をもつ句が ForceP の指定部にあるため、その c-統御領域に作用域が及んでいることがわかる。

(464) a. [学校全体の不幸事] 〈教授が解雇され〉、〈学生も 3 人捕まった〉。

b. [TP[DP[DP 学生]も][_{vP} 3 人捕まっ]た]。

(465) a. [人は成長する] 〈幸子は大きくなったねえ〉。〈花子ももう卒業するかあ〉。

b. [CP[DP[DP 花子]も][FinP もう卒業する]かあ]。

また、(466a)と(467a)を比較すると、ぼかしの「も」が主語のみを変項として対比させることができないことから、ぼかしの「も」は累加の「も」とは異なり、焦点の拡張が義務的であると考えることができる。

(466) a. 〈花子が〉年をとった。〈太郎〉も年をとった。(累加)

b. 〈花子が大学生になった〉。〈太郎も年をとった〉。

(467) a. 〈花子が〉年をとった。# 〈太郎〉も年をとったねえ。(ぼかし)

b. 〈太郎の背中も小さくなったなあ〉。〈太郎も年をとったねえ〉。

同様に、(468a)や(468b)、(469a)は問題のない文ではあるものの、他の同類の事物を想定するという累加の「も」として機能しており、ぼかしの「も」として解釈されにくいことから、ぼかしの「も」によってとりたてられる対象は動詞句より広くある必要があり、ぼかしの「も」の焦点は、累加の「も」による焦点より広く及ぶことがわかる。

(468) a. # 〈花子ちゃん〉 も 〈太郎〉 も大きくなったなあ！

b. # 〈イチローもエラーをし〉、〈藤井四段も負ける〉かあ。

c. 〈イチローもエラーをするんだよ〉。〈藤井四段も負けるときがあるかあ〉。

(469) a. # 太郎は 〈年もとって〉 〈腰も曲がった〉ねえ。

b. 〈太郎も年をとった〉 し、〈花子も腰が曲がったねえ〉。

よって、C 類ぼかしの「も」をもつ文では、焦点が文全体に義務的に拡張していることが

わかる。ぼかしの「も」を伴う句が語用論との接点をもつ CP 層で生起する要素と[+LINK]素性の指定部・主要部の一致を想定するが、その一致によって「焦点の拡張」が義務的に生じると考えることができる。

(470) 〈花子も腰が曲がったねえ〉。(〈人間は年をとる〉)

(471) $\boxed{[ForceP[DP[DP \text{ 花子}]\text{も}][TP[vP \text{ 腰が曲がっ}]\text{た}]\text{ねえ}]}$ 。

よって、「も」のぼかしの機能とは、「も」が指定部において主要部と一致し、義務的に意味作用が広がる現象であると考えることができる。C 類ぼかしの「も」による作用域は、以下のように語用論の段階における計算単位として変換させることができるだろう。

(472) a. $[CP[DP \text{ 花子}]\text{も}][TP \text{ 腰が曲がった}]\text{ねえ}]$ 。
 $\boxed{\hspace{10em}}$ [+LINK]

b. 計算単位：[_{CP} 花子が腰が曲がったねえ]

以上、ぼかしの「も」に関しても、一致によって作用域が設定されることが明らかとなった。(ア)の「も」は vP 内の主要部に付加し、[+FOCUS]の一致によって語の下位語を焦点とすること、(イ)の「も」は TP 指定部に付加し、T 主要部との[+FOCUS]素性の一致によって焦点の拡張が生じること、(ウ)の「も」は ForceP 指定部に付加し、ForceP 主要部である文末形式と指定部・主要部の一致が生じているため焦点の拡張が義務的に生じ事態への態度までとりたてることが明らかとなった。語用論的段階として機能する CP 層では、語用論的解釈を必然的にもたらす焦点の拡張が生じやすく、統語論的な観点からも Shudo (2002) の主張を支持することができる。以上の議論は、表 9 のようにまとめることができる。以上、解釈の「も」と潜在的意識活性化の「も」の中の時にかかわる「も」以外の「も」を同じ種類とすることで、「も」の生起位置と「も」がとりたてる対象とが対応することを示した。

表 9 ぼかしの「も」の分類まとめ

ぼかしの「も」	とりたて対象	階層構造	「も」の分類
典型例表示の「も」	語の下位集合	A 類	(ア)
時にかかわる「も」	文中要素	B 類	(イ)
潜在的意識活性化の「も」	事態への態度	C 類	(ウ)
解釈の「も」	事態への態度	C 類	

5.4. まとめ

以上、作用域の及び方は、「も」の生起位置、他の要素との一致関係によって異なることを明らかにした。以下の「も」を主要部に直接付加する「も」として設定すると、不定語との[Q]素性の一致を生じさせることができること、不定語が指定部に位置する場合、[Q]素性の一致が義務的に生じることも確認した。そのため、基本的に付加対象である主要部とその主要部の最大投射までが「も」による作用域となり、結果焦点の拡張が生じないように見えることを示した。

・(ア) のぼかしの「も」①

(473) $[_{NP}[_{NP}$ 学生+も] $_{\text{学生}}$ 、小学生が会議に参加する。

・不定語と共起する「も」②

(474) $[_{DP}$ どの $[_{NP}$ 学生] $_{D+}$ も] $_{\text{会議}}$ に参加する。

・数量表現と共起する「も」③

(475) $[_{NP}$ 学生] $_i$ が $[_{CLP3}$ t_i 人+も] $_{\text{会議}}$ に参加する。

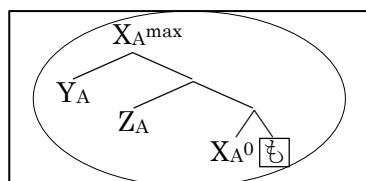


図 28 主要部に付加する「も」の作用域

一方、以下の「も」が最大投射に付加するとすると、その「も」が付加した句の *c*-統御領域を作用域とし、任意的に焦点を拡張させることができることを示した。とりたて対象となる要素との情報構成にかかわる[+FOCUS/+LINK]素性の一致によって焦点範囲が自由に拡張することが明らかとなった。また、一致対象となる要素が指定部・主要部の関係にある場合は焦点の拡張が義務的になり、語用論的解釈を要することが明らかとなった。

・累加の「も」④

(476)[TP[DP[DP 小学生]も]会議に参加する]。

・(イ) のぼかしの「も」⑤

(477)[TP[DP[DP 参議院会議]も]始まる]なあ。

・(ウ) のぼかしの「も」⑥

(478)[CP[DP[DP 太郎]も]会議に参加するようになったねえ]。

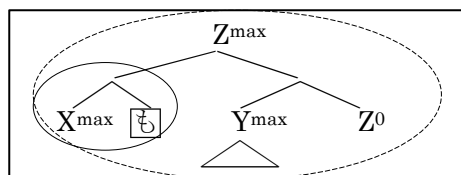


図 29 最大投射に付加する「も」の作用域

以上から、「も」による作用域は、統語計算によって生成された構造から含意の対象となる要素を決定する範囲であり、[+FOCUS/+LINK]素性の一致はその中で語用論的計算へ送る単位を定める情報構成のための操作であるということが結論付けられる。

第6章 否定呼応表現について

第5章までは、「も」単体の多様性が生起位置、他の要素との一致によって説明されることを示したが、以下では、「も」を伴うその他の表現について、生起位置、一致という観点から考察を深める。C類ばかりの「も」をもつ句の文末呼応が情報構成にかかわる[+LINK]素性の一致であるならば、否定極性表現（NPI）や否定呼応表現（NCI）⁴⁴と呼ばれる「何も／誰も」なども、同種の素性の一致現象であると考えることができる。本稿では、これらの表現が否定辞と呼応することに着目し、「否定呼応表現（NCI）」と呼び、C類ばかりの「も」をもつ句と対照しながら考察を進めてゆく。

6.1. 否定呼応表現としての不定語+「も」

「誰も／何も」に代表される否定呼応表現（Negative Concord Item）は形態論的には「か」の付加も統一的に分析することができるため、不定語の「誰／何」に「も」が併合してできた要素であると考えられる。

- (479)a. 誰も {*いる／いない}。
b. 何も {*ある／ない}。
c. どこも {ある／ない}。

表 10 不定語と「も」と「か」の共起

不定語	-も	-か
なに	なにも	なにか
だれ	だれも	だれか
どこ	どこも	どこか

⁴⁴ Negative Concord Item の訳語について、多くの先行研究では、「否定一致表現（項目）」と訳されているが、本稿では、統語論的操作としての一致（Agree）と記述的現象としての呼応（Concord）を一旦区別し、議論を進めていきたい。

現代日本語では、「誰も」は「全く」や「しか」と同様に否定辞との呼応を要すること、また、それらとは異なり「が」が後続すると、全称数量詞的になることが記述的に知られている（寺村 1991）。

(480)a. 誰も { *来た / 来なかった } 。

b. 誰もが { 来た / 来なかった } 。

(481)a. 太郎しか { *来た / 来なかった } 。

b. ??太郎しかが { 来た / 来なかった } 。

また、否定呼応表現は特別な操作が加えられない限り否定辞との共起を要するが、「誰にも」や「どこにも」といった助詞、後置詞が介在するものや、「不定語+とも」も同様の振る舞いを見せることが多い。⁴⁵

(482)a. 誰にも { *会った / 会わなかった } 。

b. どこにも { *いる / いない } 。

c. 何とも { *言う / 言わない } 。

d. 誰がいるとも { *思う / 思わない } 。

一方、古典語の「誰も（たれも）」や「何も（なににも）」は本来肯定否定の極性傾向が低く、肯定の述語と結びつく場合は「誰でも」「何でも」といった全称数量的な意味合いをもつことが指摘されている（山西 1987、山田 2005, 2006、川瀬 2011 他）。「誰も」や「何も」などは、不定語と「も」が結びつき、歴史的変化を遂げて否定極性的な表現となったことが推測される。

(483) ナニモ一切ノ万物ハ天地ノ気カツクリタスソ（山田 2005: 22、小林 2009: 73、『玉塵抄』）

⁴⁵ 「どこも」に関しても、現代日本語では否定極性の傾向を見せているという観察も見られる。筆者の調査によれば、肯定・否定の述語の共起の偏りは現段階では未だ見られないが、今後、時代を経て否定極性的になっていくということが予想される。

35-11 ウ)

(484) ソレホトノ事ハタレモ知タト云心テ笑タソ (山田 2005: 22、小林 2009: 73、『玉塵抄』
21-77 オ)

また、第 4.5 節において、ぼかしの「も」は情報共有性の強い文末形式と呼応し、(485)のように「も」が ForceP の指定部に生起し、(486)のように「ねえ」といった情報共有性を有する終助詞を伴ったほうがすわりが良いということを述べた。

(485)a. この駅は、[ようやく花子も卒業した]から、取り壊されることが決まった。

b. #この駅も、[ようやく花子が卒業した]から、取り壊されることが決まった。

c. 〈この駅も花子が卒業したからもうすぐなくなるんだねえ〉。

d. 花子が卒業したから 〈この駅ももうすぐなくなるんだねえ〉。

(486)[ForceP 花子も卒業した {ねえ／#よ}]。

一方、否定呼応表現は NegP における否定辞の有無が文の容認性を左右し、(487)のように、NegP に生起し、かつ否定辞を伴う必要がある。このように、否定呼応表現は C 類ぼかしの「も」の文末呼応と共通する現象であると予想される。本章は、C 類ぼかしの「も」と否定呼応表現によってもたらされる現象に対する説明の統一化を目的とする。

(487)a. 宿題のことを、[NegP 誰も教えてくれ {なく／*Ø} て]困りました。

b. *宿題がないことを、[誰も教えてくれて][NegP 困らず]にすみしました。

6.2. 「誰も／何も」に関する先行研究

「誰も／何も」は、作用域のアプローチをとる否定極性表現 (NPI: Negative Polarity Item) である⁴⁶という見方と、一致のアプローチをとる否定呼応表現 (NCI: Negative Concord Item) であるという見方が存在する。日本語における「誰も」や「何も」は否定環境におかれなければならないことから *any-*と対照され、Kato (1985) をはじめ多くの先行研究によって

⁴⁶ 作用域のアプローチに関しても、「も」が量的に作用域を決めるという立場と、否定辞が作用域をとるという立場が存在する。

NPI として分析されてきた。⁴⁷「誰も」や「何も」は否定辞によって c-統御され、その作用域内にあることで全否定の解釈が得られなければならないということが主張されてきた。⁴⁸

(488)a. 彼は[セミナーには誰も来ない]と言った。(Kato 1985: 150 より)

b. #誰も[みんながこの手紙を読まない]と思っている。(Kato 1985: 151 より)

一方、NCI としての「誰も／何も」は一種の否定力を持ち、否定辞との素性照合を要するという。その特徴としては、以下の 4 点が主にあげられる。

(i) NCI は「ほとんど (*almost*)」と共に起る。

(489) *John didn't eat almost anything. (NPI)

(490) ジョンはほとんど何も食べなかった。(NCI)

(ii) NCI は質問文に対する応答において否定部分の省略が可能である。

(491) A: What did you see?

B: *Anything. (NPI)

(492) A: 何を見たの?

B: 何も。(NCI)

⁴⁷ 長谷川 (1994) は、「も」が否定文内に現れた場合、部分否定の解釈にならないため、PPI の性質をもつとし、「どの学生も」を PPI として分析している。そのように考えると、「誰も」も PPI であるということになり、実際に「誰も」が否定辞より広い作用域をとるという分析が可能である。しかし本稿では、「も」は全称性を担うのではなく、累加性が全称性を潜在的にもつ不定語と結びつくことによって生じると考えているため、全否定を示す意味計算のシステムは、別様に議論する必要があると考える。

14) どの学生も来なかった。(長谷川 1994: 117)

15) 誰も来なかった。

⁴⁸ 片岡 (2007) は、「誰も／何も」が「XP-しか」よりも構造的に高く位置しなければならないことから、NPI としても NCI としても説明できないことを述べているが、「誰も／何も」は Kobuchi-Philip (2009) 等も指摘しているように項ではなく付加詞的な性質をもちうることから、「誰も」のあるべき構造について、検討の余地があると考えられる。

16) a. *花子しか だれも 推薦しない。

b. だれも 花子しか 推薦しない。(片岡 2007: 81)

17) a. 学生が だれも 推薦しない。

b. 学生が だれも 花子しか 推薦しない。

(iii) NCI は Yes/No 疑問文や条件節のような非否定環境に現れない。

(493) a. Have you seen anything? (NPI)

b. If John steals anything, he'll be arrested. (NPI)

(494) a. *何も見ましたか? (NCI)

b. *ジョンが (もし) 何も盗んだら、逮捕されるだろう。(NCI)

(iv) NCI は高い階層に位置する否定辞によって認可されない。

(495) I didn't say that John admired anyone. (NPI)

(496) ?*僕は[ジョンが誰も尊敬していると]言わなかった。(NCI) (Watanabe 2004: 565 より)

Watanabe (2004)⁴⁹ は、「誰も／何も」と否定辞が一致によって結びつくという。しかし、本稿において議論された削除のテストを行うと、「も」のみを残すことはできないものの、「誰も」自体は削除が可能であることから、「誰も」と「ない」の間には統語論的な一致の関係が見られないことがわかる。LF コピー分析を維持すると、照合対象となる片方の削除は許されないことから、Watanabe (2004) の主張する「一致」は少なくとも ϕ 素性や [Q] 素性の一致とは同じ種類のものではないということになる。

(497) A: 誰も来なかったの?

B₁: {# $\emptyset$ も／ $\emptyset$ } 来なかったよ。

B₂: うん、誰も $\emptyset$ 。

(498) A: 太郎もしっこいよね。

B₁: { $\emptyset$ も／ $\emptyset$ } しっこいねー。

B₂: うん、太郎も $\emptyset$ 。

Wanatabe (2004) は、「誰も／何も」と否定辞の一致によって否定辞の否定力が削除され、「誰も／何も」の否定力が残るという。削除を本稿において支持している LF コピー分析として検討すると、(499)では「なにも」にすでに「0 人」といった否定の意味が含まれている

⁴⁹ Watanabe (2004) は、「誰も／何も」も統語論的操作にかかわる識別焦点構造の中ではたらく要素であるという。否定呼応表現がもつ焦点性が「も」によるものであるとすれば、「も」は統一して識別焦点を有するということが支持される。

ため、「見た」の LF コピーが適用されても意味が変わらない。しかし片岡 (2007) は、(500) では、「来なかった」の否定力が LF で消去されるのであれば、LF で消去された否定力は、省略応答文では維持されないはずであり、否定ではない「来た」が想定されなければならないとしている。否定辞素性の一致が[Q]素性と同じ一致ではないと考えれば、LF 部門で維持される「来なかった」をそのままコピーしても問題は生じない。このように、LF コピー分析を適用すると、「誰も／何も」と否定辞はばかりの「も」をもつ句と同様、統語構造においては一致関係がないということが想定される。

(499) A: なにを見たの？

B: なにも~~見なかった~~。(Watanabe 2004: 584 より)

(500) A: だれも来なかった。

B: 花子も。(片岡 2007: 93)

よって、本稿では、否定呼応表現が関連する一致は、C 類ばかりの「も」と同様の現象であるとし、「誰も／何も」にかかわる一致を、[+FOCUS/+LINK]素性の一致であることを主張する。以降、C 類ばかりの「も」の現象と「誰も／何も」の現象が共通することを概観し、双方に対して説明可能な提案を行う。

6.3. 否定辞と呼応する「も」の付加対象

否定呼応表現の一部となる「も」は、副詞的な「いつ」には適用されないなど制限はあるが、「誰」と「何」、「誰に」、「どこに」といった様々な不定語相当語に付加することができ、比較的生産性が高いため、単なる慣用表現ではなく一種の文法現象であると考えられる。

(501) *誰~~も~~パーティーに参加した。

(502) *太郎が何~~も~~言った。

(503) いつ~~も~~太郎が迎えに来る。

(504) a. [[_{DP} 誰]~~も~~]電話を {*かけた／かけなかった}。⁵⁰

⁵⁰ 与格の「に」の介在が生じた場合は、否定極性の性質が残りやすい。否定呼応表現は主格や対格として有形の格をもたずに表現することができるため、抽象格をもつ要素との併

- b. [[_{PP} 誰から]も]電話が {あった／なかった}。
- c. [[_{PP} 誰に]も]電話が {??あった／なかった}。

C類ばかりの「も」も、副詞などへの付加は難しいが、ほとんど付加対象を選ばない。このように、否定呼応表現も「一語」ではなく不定語に「も」が付加したものとすることで、両者を基本の「も」と同様に何らかの要素に付加しているものだと考えることができる。

(505) 太郎も男だねえ。

(506) あの犬も大きくなったなあ。

(507) #今日も雨が降るねえ。

- (508) a. [[_{DP} 太郎]も]この問題が解けないかあ。
 b. [[_{PP} 太郎に]も]この問題が解けないかあ。
 c. *[[_{PP} 10 時に]も]試験が始まるかあ。

6.4. 否定呼応表現における階層と一致

ばかりの「も」が ForceP の指定部に位置する必要があるのと同様に、否定呼応表現は FinP 内に位置する必要がある、「も」を持つ要素はそれぞれ各階層に収まらなければならないことが明らかである。よって両者とも、定まった階層の中で顕在的かつ局所的な一致が起こると言える。

- (509) a. *[[_{ForceP} 誰]_{FinP}[[_{NegP} 花子が太郎のことを知らな]い]と]言っていたよ。⁵¹
 b. [_{ForceP} 花子が [_{FinP}[[_{NegP} 誰も太郎のことを知らな]い]と]言っていたよ]。
 (510) a. #[[_{ForceP}[[_{TP}[[_{DP} 太郎も]大きくなる]と、お前も変わるだろうねえ]。
 b. [_{ForceP}[[_{DP} 太郎も]大きくなったねえ]。

合であると考えられる。

⁵¹ 以下の(18a)の例が容認されると判断する者もいるが、これは、(18a)が(18b)と同義であるからであり、日本語話者は瞬時に(18b)と入れ替えて解釈しているということが考えられる。(18a)と(18b)を比べると、(18b)の方が容認されやすいと言えるだろう。

- 18) a. 誰も[太郎が来ない]と思っている。
 b. 誰も[太郎が来る]と思っていない。

ここから、「誰も」や「何も」、また C 類ぼかしの「も」をもつ句は各階層における素性照合によって生じる現象であると考えられる。また、「何も」が目的語に現れる場合や、複数現れることも可能であることから、探索子である Neg 主要部が目標を探し出す多重一致が生じるとする。

(511)a. *[ForceP [CP 何も[NegP 太郎が知らな]いと]言っていたよ]。

b. [ForceP[CP[FinP 太郎が[NegP 何も知らな]い]と]言っていたよ]。
↑ | [+FOCUS]

(512)[NegP 誰も 何も知らな]い。

↑ ↑ | [+FOCUS]

よって、「誰も／何も」は C 類のぼかしの「も」における文末呼応現象と同様に NegP における[+FOCUS]素性の一致であると考えることができる。以上から、「誰も／何も」と否定辞との一致を、以下の図 30 のように設定できるだろう。

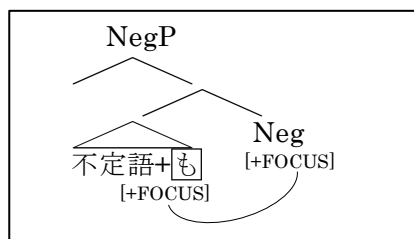


図 30 否定呼応表現における[+FOCUS]素性の一致

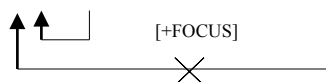
6.5. 否定呼応表現と「が」の併合

否定呼応表現には、「が」でもって全称的な表現となることが多く指摘されているが、これは否定呼応表現が焦点性の強い総記の「が」と併合することで生じる現象であると考えることができる。(513b)のように「誰もが」に否定表現を共起させると、「対象となる要素が全て真である」という事実が否定され、部分否定の解釈にもなる。このような「が」は一般的には強勢を伴うことから[+FOCUS]素性をもっていると考えることができる。「が」と否定呼応表現は[+FOCUS]素性の一致が生じ、否定辞とは一致が生じないために、否定極性が失われると考えられる。同様に(515b)のように、ぼかしの「も」を想定させる「も」をもつ句に「が」を付加すると、ほとんど容認されなくなる。[+FOCUS]素性をもつ要素が局所

的に位置するために「も」のもつ[+FOCUS]素性が照合され、累加（意外）の「も」としてのはたらきが強くなり、ほかしの「も」としての解釈が失われると考えられる。

(513)a. 宿題のこと、[[誰も教えてくれ] {ませんでした／*ました}]。

b. 宿題のこと、[[誰も[↑]が教えてくれ] {ませんでした／ました}]。

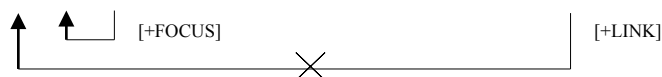


(514)a. [_{FinP} 誰もが安心して快適に暮らせる]まちづくり (<https://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/genre/1207717373116/index.html>)

b. [_{FinP} 誰もが安心して快適に暮らせ[↑]ない]まちづくり

(515)a. [_{ForceP} この町も[あまり鳥を見かけなくなった] {ねえ／#なんて}]。

b. [_{ForceP} この町も[↑]があまり鳥を見かけなくなった] {?*ねえ／??なんて}]。



6.6. まとめ

ほかしの「も」は、古典語の「も」の性質が残っていると考えられるが、聞き手の知識のどこに情報を加えるかを指示する機能を持ち、そして古典語の「も」は CP 層の指定部や文末に生起されなければならないため、情報構造の FOCUS の階層ではたらくものではなく、LINK の階層ではたらくものであると考えられる。また、否定呼応表現は上記の議論から、累加の「も」や極限の「も」と同様[+FOCUS]素性を有し、NegP、すなわち FOCUS の階層ではたらくということがわかる。

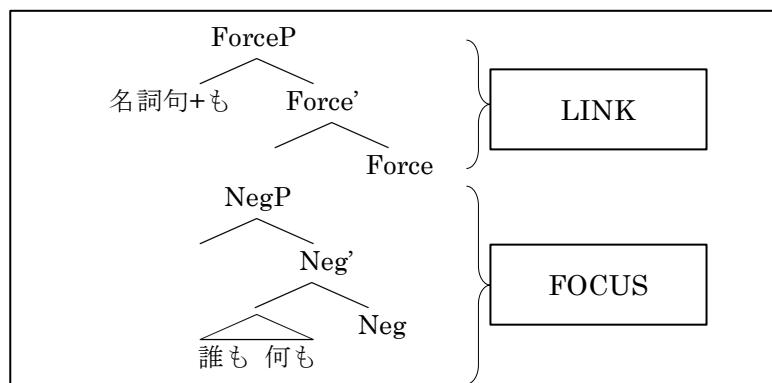


図 31 情報構造と各「も」の生起位置

以上、否定辞と共起する「誰も／何も」と C 類ばかりの「も」は比較的自由に付加対象を選べること、「誰も／何も」は NegP 内、C 類ばかりの「も」は ForceP の指定部に生起し、主要部との呼応を要すること、どちらも「が」を付加させると、その[+FOCUS]素性が「も」の素性を照合してしまうため、呼応が見られなくなることを明らかにした。

ただし、「誰も／何も」の場合、「も」の累加性によって「誰」に含まれる人の集合、「何」に当てはまる物や事柄の集合が想定され、その範囲を越える必要はない。よって、「も」をもつ句と否定辞との[+FOCUS]素性の一致は生じるものの、不定語である「誰」や「何」との併合によって先に[Q]素性の照合が生じ、「も」のかかわる作用域の決定はその一致によるということがわかる。

(516)a. 今日の授業には〈誰〉も来なかった。

b. 授業に来なかった人 = {学部生, 院生, 聴講生, 留学生,}

c. ?? 〈CD が売れず〉、〈誰もライブに来なかつた〉た。

d. 〈CD が売れず〉、〈ライブにも誰も来なかつた〉た。

e. 今日の授業には[NegP[DP 誰 も来なかつた]た。



f. 計算単位 : [DP x <人>]

(517)a. 今日朝ごはんを〈何〉も食べなかった。

b. 食べなかったもの = {パン, 卵, 白米, ヨーグルト,}

c. ?? 〈昨日の晩御飯を抜き〉、〈朝ごはんを何も食べなかつた〉た。

d. 〈昨日の晩御飯を抜き〉、〈朝ごはんも何も食べなかつた〉た。

e. 今日朝ごはんには[NegP[DP 何 も食べなかつた]た。



f. 計算単位 : [DP x <物>]

以上、C 類で生じるばかりの「も」の句と否定呼応表現は「も」をもつ句と主要部要素との情報構成にかかわる素性の一致として統一的に分析できることが明らかとなった。

第7章 周辺的な「も」の意味と統語構造

第6章までは、累加の「も」、極限の「も」、ぼかしの「も」を中心に、統語論的観点から分析を行い、生起位置と一致がそれぞれの意味にかかわることを見たが、他の周辺的な「も」に関しても、同様の分析が適用されることを示す。

7.1. 早い時期を表す「も」

まず、もっとも早い時期を表す「も」をみる。このような「も」は、第1.2.4節にて触れたとおり「時点を表す副詞的成分をとりたてて、その事態が実現しそうなもっとも早い時期を表す（日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)」と説明される。(518)は、「3日後」以外の日に到着することを前提とする累加の「も」としての解釈も可能であるが、早い時期を表す「も」として想定するならば、「3日後」以外の日に届く日があることを想定することができず、累加の「も」のように累加性を顕在的に示すことはできない。数量表現と共起する「も」と同様に語自体に時間のスケール(早い～遅い)を想定すれば、(519)であれば「25日」が想定される期間の中で一番早いということになる。

(518)a. 必要書類は3日後にも到着する予定です。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)

b. 必要書類が到着する = {……, 5日後に, 4日後に, 3日後に}

(519)a. 本法案は25日にも議会で可決される見通しだ。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)

b. 本法案が可決される = {……, 27日に, 26日に, 25日に}

このような「も」の統語論的特徴として、日本語記述文法研究会(編) (2009) は格助詞「に」を伴わなければならないという点を指摘している。ここから、「も」は、単に時間を取りたてているのではなく、時を表す副詞句をとりたてて、他の時間(「来週」以降)を想定させるはたらきをもつと考えられる。

(520)a. 全国の読者が待ち望んでいたこの小説の続編が {来週にも/*来週も} 発表される

そうだ。(日本語記述文法研究会(編) 2009: 28)

b. 小説の発売 = {来年に, 再来週に, 来週に}

また、数量表現と結びつく「も」と同様、「も」を時を表す副詞句から離して表示すると、当然早い時期を表す「も」として解釈されなくなる。

(521)a. 4 月に書いた雑誌は今月中にも発行される予定だ。

b. #4 月にも書いた雑誌は今月中に発行される予定だ。

c. #4 月に書いた雑誌も今月中に発行される予定だ。

d. #4 月に書いた雑誌は今月中に発行されもする予定だ。

これを上記の議論に当てはめると、このような副詞的に使用される「も」は後置詞句 PP の P 主要部に直接付加したものであると考えることができるだろう。そのように考えると、早い時期を表す「も」をもつ文において焦点が拡張しないことを説明でき、「も」の累加性が語の中のみに及び、スケールを想定していることが説明されるだろう。

(522)a. 報告書は[PP[NP8 月 3 日][に+も]]完成させてお送りいたします。

b. 報告書は[PP[PP8 月 3 日に]も]]完成させてお送りいたします。

c. #報告書は〈明日に〉も 〈3 日に〉も完成させてお送りいたします。

「明日」といった直示的な要素がなぜこのときだけ「に」を有し、また「に」を持たなければならないのかに関して、「明日」といった要素は、強調する場合など、「に」や他の助詞を付加させても容認されることや、古典日本語にも「に」が付加している例が見られることから、音声的に空である P をもった PP であるという立場をとる。

(523)王此事ヲ定メ煩ヒ給テ、『明日ニ参レ。判断セム』ト宣テ、各返シ遣ス。(CHJ『今昔物語集』1100)

それを前提とすると、「に」をもつ文は(524b)(524c)、「に」をもたない文は(524d)(524e)のような構造が想定される。「に」が顕在的に現れる場合、最大投射に付加する累加の「も」

としても、主要部に付加し早い時期を表す「も」としても解釈することができ、多義的となる。一方、「に」が現れない場合、最大投射に付加する「も」は累加の「も」として解釈されるものの、「も」の併合対象が顕在的でなく、P 主要部に付加されたとみなされないため、早い時期を表す「も」として解釈されない。

(524)a. 試験の結果は明日 {Ø／に／から} 発表される。

b. 試験の結果は[pp[pp[NP 明日]に]も]発表される。

c. 試験の結果は[pp[NP 明日]に+も]発表される。

d. 試験の結果は[pp[pp[NP 明日]Ø]も]発表される。

e. *試験の結果は[pp[NP 明日]Ø+も]発表される。

以上から、もっとも早い時期を表す「も」は、いわゆる極限の「も」と同様、後置詞 P の主要部に直接付加し、その時期を焦点としていることがわかる。

7.2. 当たり前の「も」

累加の「も」の一種であるとした当たり前の「も」(定延 1995)に対しても本稿における分析が適用される。当たり前の「も」は、前件から生じる帰結の集合の中から一番可能性の高いものをきわだたせる要素であるが、(525)のように「5 時間も歩き続けた」に対する言語主体の態度をとりたて、他の可能性のある帰結を同類の要素として想定させることができる。

(525)a. 5 時間も歩き続けたらお腹も空くだろう。(https://ncode.syosetu.com/n5848ej/1/)

b. 5 時間歩き続けた結果 = {お腹が空く, 足が痛くなる, 疲れる, ……}

文の階層構造を援用すると、当たり前の「も」は(527)や(528)が当たり前の「も」として容認されないことから、A 類、B 類従属節内に生起できず、C 類従属節内には生起できることから、当たり前の「も」が C 類の「も」であることが確認できる。

(526)一日一食ならお腹も空くだろう。

(527)#[一日一食でお腹も空きながら]生活することになるだろう。(A)

(528)#[一日一食で文句も言えば]メニューを改善してくれるかな。(B)⁵²

(529) [一日一食で不満もあるが]、安いツアーだから仕方がない。(C)

また(530)を観察すると、「も」が目的語位置より主語位置に付加された方が容認されることが明らかである。さらに、(531a)や(531b)の「も」が(531c)と比べ「当たり前」を表す要素として解釈されにくいことから、焦点が文末まで広がることがわかる。当たり前の「も」による焦点が事態に対する態度まで拡張しやすいことから、当たり前の「も」が FinP～ForceP の指定部に位置し、その作用域内の要素と素性照合が生じていると考えられる。

(530)a. 一日一食なら子どもも文句を言うよ。

b. ??一日一食なら子どもが文句も言うよ。

(531)a. #5 時間も歩き続けたら〈足〉も〈腰〉も痛くなるだろう。

b. #5 時間も歩き続けたら〈お腹も空き〉、〈足も痛くなる〉だろう。

c. 5 時間も歩き続けたら〈お腹も空くだろうし〉、〈足も痛くなるかもしれない〉。

このように、文の階層構造による分析を援用すれば、当たり前の「も」は、C の段階に属する「も」、すなわち CP 層 (FinP～ForceP) の指定部に位置するものとして位置付けることができ、焦点は CP の範囲に拡張するということがわかる。以上、早い時期を表す「も」、当たり前の「も」といったより周辺的な用法に対しても、「も」の統語論的分析が適用されることを示した。

⁵² 以下の(19)のような例は確かに容認されるが、この場合必ず「も」を前後の節の両方で使用しなければならないことから、この場合の「も」は累加の「も」として並列する事態を表す場合にのみ使用され则认为する。

19) 医者の説明に納得できなければ、文句も言えば泣き喚きもする。

第8章 まとめと今後の展望

本稿では、「も」の累加性から多様な振る舞いを見せる「も」を統一的に分析し、統語論的な観点から体系化することを目的としたが、データから、「も」は付加対象、階層構造上の生起位置によって異なる機能をもつ要素であることを明らかにした。本稿は主に、「も」の振る舞いの違いに関して、①付加対象と②階層を出発点に各「も」の階層構造上の位置を定め、そこから③一致が生じる可能性について論じた。最後に、上記の統語論的特徴を踏まえ、各「も」の意味について、「も」による④作用域の観点から考察した。それぞれの点から、以下のようにまとめられる。

①付加対象

日本語の統語構造において、主要部 X^0 であるか、最大投射 $X^{\max}$ であるかという構造の違いに着目した。累加の「も」やぼかしの「も」は最大投射に付加し、A 類のぼかしの「も」、不定語と結びつく「も」と数量の大小を強調する「も」は主要部に付加することを提案し、それが一致や作用域にかかわることを示した。

②生起階層

南 (1974, 1993) の文の階層構造とカートグラフィーの対応を想定すると、累加の「も」、不定語と結びつく「も」と数量表現と結びつく「も」は vP 内 (A 類) ではたらくことを確認した。ぼかしの「も」はそれぞれとりたてる要素の範囲によって、A 類のぼかしの「も」は vP 内、「も」が現れる文中の句をとりたてる時にかかわる「も」は TP (B 類) の指定部、事態に対する言語主体の態度までとりたて解釈や一般則を想定させる「も」は $ForceP$ (C 類) の指定部に生起し、生起する階層によっても「も」の用法が大別されることが明らかとなった。

③一致

「も」の残留を、一致がかかわる項削除の一種として分析を行うと、累加の「も」、数量

表現と結びつく「も」、ぼかしの「も」では、「も」の残留や「も」のみの削除が許されることから、LF コピーが問題となる一致関係は見られないことを示した。一方、「も」と不定語はどちらか一方のみの省略が許されないため、「も」が他の要素と一致関係をもつということを明らかにした。この場合、主要部に付加した「も」と他の要素との局所的な関係において、[Q]素性の照合がなされることが明らかとなった。

- ・主要部付加（不定語+「も」）

(532) A: 先生は、[CP[FinP[vp[vp 誰をたたき]_{vp}も]しました]か]

B: はい、誰をたたきもしました。

- ・最大投射付加（累加の「も」）

(533) A: 先生は、[CP[FinP[vp[vp 誰をたたき]_{vp}も]しました]か]

B: 太郎をたたきもしました。

- ・主要部付加（数量表現+「も」）

(534) A: [CP[FinP 電車が来るまで、[CLP 何時間も]_{clp}待っていたんです]か]

B: {何時間も／#3 時間も／#~~0~~ も／~~0~~ } 待っていました。

また、LINK の階層、FOCUS の階層といった語用論に送られる際に参照される情報構造を設定し、全ての「も」において、[+FOCUS/+LINK]素性をもつ要素によって LF にかかわらない素性照合が生じることを論じた。また、B 類ぼかしの「も」や、C 類ぼかしの「も」、「誰も／何も」など「も」をもつ句が特定の階層に位置する場合にも、呼応として文末形式との一致が想定されることを示した。

- ・B 類の「も」：呼応あり

(535) a. 夏ももうすぐやってくるなあ。

b. #夏ももうすぐやっこよう。

- ・C 類の「も」：呼応あり

(536) a. お前も本当にこりないなあ。

- b. #お前も本当にこりない？
c. #太郎も大人になってください。

・「誰も／何も」：呼応あり

(537)a. *誰も発表する。

b. 誰も発表しない。

下図 32 に統語計算段階とそれぞれの現象が生じる段階をまとめている。それぞれ、狭義の統語論 (Narrow Syntax) の段階にて、併合を繰り返しそれぞれの階層に要素が生起すること、不定語との[Q]素性の一致、および情報構成にかかわる[+LINK]素性や[+FOCUS]素性の一致が生じ、作用域が決定すること、その作用域が語用論における推論の計算単位につながることを述べた。さらに、日本語の「も」において、累加性の及ぶ範囲は顕在的に決定され、統語構造と音声に対応していることを示した。

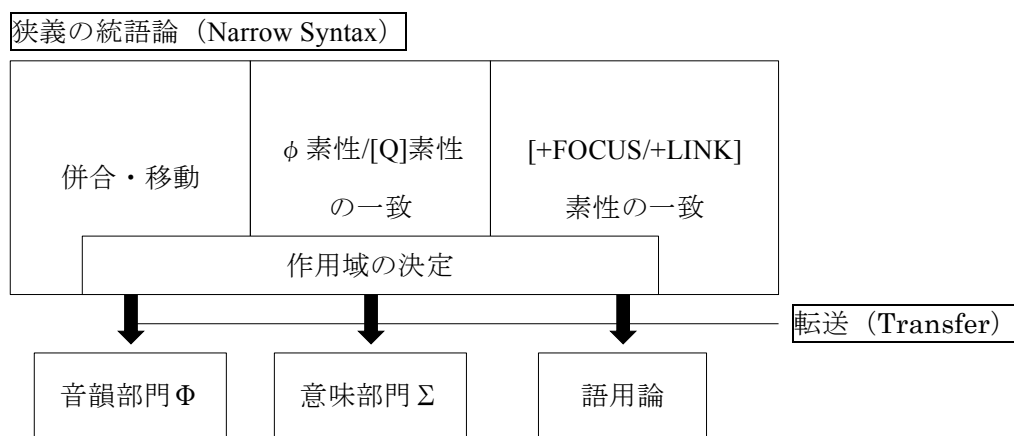


図 32 統語計算システムとインターフェース

④作用域

不定語+「も」、数量表現+「も」、A 類ぼかしの「も」（早い時期を表す「も」、確定回避の「も」）は、主要部に直接付加するために、その語の下位語、数量的スケールなどを想定させることができること、④累加の「も」は最大投射に付加し、「も」の付加対象、およびその周辺に位置する要素を任意的にとりたての対象とすることで、それと同等の要素を想定させることができること、⑤B 類のぼかしの「も」や⑥C 類ぼかしの「も」は、TP、ForceP

の指定部に「も」をもつ句として基底生成され、主要部との一致を生じさせるため、焦点が義務的に拡張し、作用域が「も」をもつ句の c-統御領域全体となることを明らかにした。

8.1. 「も」の用法の再解釈

本稿では、「も」の生起位置や一致の環境によって、語用論において決定される前提、含みの範囲が明らかとなることを示し、「も」の「用法」の違いを語用論における変項となりうる範囲の違いに対応するものとした。以下のように、語用論において変項となると考えられる単位を[+FOCUS/+LINK]素性の一致によって定められた範囲であるとし、「も」の統語論的な特徴から各用法が説明されることを示す。

まとめ① 累加の「も」は A の段階で最大投射に付加し、「も」をもつ句の作用域が及ぶ範囲で[+FOCUS]素性の一致によって任意的に焦点の拡張が生じる。

・累加の「も」

(538) [[DP 太郎]も]試験に落ちた。 (= (1))

主張：太郎が試験に落ちた。

含み：花子が試験に落ちた。

(539) [[[DP 太郎]も]試験に落ちた]。 (= (1))

主張：太郎が試験に落ちた。

含み：花子が就職できなかった。

・意外の「も」

(540) [[DP 東大生]も]試験に落ちた。 (= (2))

主張：東大生が試験に落ちた。

含み：小学生が試験に落ちた。

まとめ② 不定語+「も」、数量表現+「も」、典型例表示の「も」と呼ばれていた A 類ばかりの「も」は A の段階ではたらき、数量表現+「も」は類別詞 CL、不定語+「も」は D や v といった主要部に直接付加するため、その語の下位語に焦点が当たり、表面的には焦点が拡張しないように見える。

・数量表現と共起する「も」

(541) [CLP3 人も]試験に落ちた。(=(3))

主張：3 人試験に落ちた。

含み：2 人試験に落ちた。

・不定語と共起する「も」

(542) [DP どの学生も]試験に落ちた。(=(4))

主張：学生（全員）が全員試験に落ちた。

含み：{太郎, 花子,} が試験に落ちた。

・A 類ばかしの「も」

(543) [[NP 東京も]銀座]で食事会があった。

主張：東京、銀座で食事会があった。

含み：東京、池袋で食事会がある。

まとめ③ 時にかかわる B 類ばかしの「も」は TP の指定部に生起し、T 主要部と指定部・
主要部の一致が生じるため、B 類従属節の中で焦点の拡張が生じる。

・B 類ばかしの「も」

(544) [TP[今年のセンター試験も]始まる]なあ。

主張：センター試験が始まる。

含み：一年が終わる。

まとめ④ C 類ばかしの「も」のもつ句は ForceP の指定部に生起し、Force 主要部と指定部・
主要部の一致が生じるため、ForceP において焦点が「も」をもつ句の c-統御領域まで
義務的に拡張し、結果「一般則」や「解釈」が想定される。

・C 類ばかしの「も」

(545) [ForceP[太郎も]試験に落ちるかあ]。(=(5))

主張：太郎が試験に落ちた。

含み：人間が失敗する。

まとめ⑤ 否定呼応表現は、不定語と結びつく「も」と同様に不定語との併合によって[Q]素性の一致が生じるが、NegPにおいてNegとの[+FOCUS]素性の照合が生じ、否定極性の性質を見せる。

・否定呼応表現の「何も／誰も」

(546) [NegP [何も] 食べられな]い。

主張：食べ物（全て）を食べられない。

含み：{パン, バナナ,} を食べられない。

以上の議論を以下の表 11 にまとめる。四角で囲った箇所が、累加の「も」とは顕著に異なる特徴である。ここから、「も」の用法の判別には「付加対象」、「生起する階層」、「一致」の観点から分析される必要があることを主張する。

表 11 「も」の統語論的特徴のまとめ

分類	付加対象	生起する階層	一致	
①不定語+「も」	X^0	$\sim vP$ (A)	$[Q]$	[+FOCUS]
②数量表現+「も」	X^0 (CL)	$\sim vP$ (A)	不要/ $[Q]$	[+FOCUS]
③A 類ばかり	X^0	$\sim vP$ (A)	不要	[+FOCUS]
④累加	$X^{\max}$	$\sim vP$ (A)	不要	[+FOCUS]
⑤B 類ばかり	$X^{\max}$	TP (B) 指定部	不要	[+FOCUS]
⑥C 類ばかり	$X^{\max}$	ForceP (C) 指定部	不要	[+LINK]

以上から、生成文法における「も」のもつ性質として、以下のような二種類の素性が考えられ、それぞれ他の要素と指定部・主要部の関係にあった場合は義務的に照合されると考えられる。

(547)(i) 「も」は意味解釈にかかわる[Q]素性をもつ。

主要部が目標を探し出し、素性照合を行う。

(ii) 「も」は情報構成にかかわる[+FOCUS/+LINK]素性をもつ。⁵³

同じ素性をもつより局所的な要素同士が一致する。

照合が生じる階層によって情報構成における役割が変わる。

本稿における理論的貢献としては、情報構成にかかわる素性の一致が、[Q]素性の一致とは別に認められるということが挙げられる。現代日本語では、FinP 以下における[+FOCUS]素性の一致、ForceP における聞き手との情報共有性を担う[+LINK]素性の一致を提案することで、[Q]素性の一致とは区別されることを明らかにした。日本語の「も」は、不定語のもつ[Q]素性の一致、[+FOCUS/+LINK]素性の一致が生じることを認めることで、焦点の拡張が[+FOCUS]素性や[+LINK]素性の一致とかかわること、また、その単位が語用論の計算単位となることが説明される。また、日本語ではどちらも顕在的階層構造を維持するという主張を行った。日本語学において記述されてきた「も」の焦点は、[Q]素性が生じる場合は[Q]素性の一致、そして[+FOCUS/+LINK]素性の一致によって決定し、語用論においてもそれが維持されるということを示した。

「も」の多様な用法への派生として、まず、付加対象が主要部 X^0 である不定語+「も」、数量表現+「も」、A 類ぼかしの「も」と、付加対象が最大投射 $X^{\max}$ である累加の「も」、B 類ぼかしの「も」、C 類ぼかしの「も」に大別される。数量表現類別詞 CL^0 に付加するものが数量表現+「も」であり、他の X^0 に付加し、[Q]素性の照合が行われるものが不定語+「も」、行われないものが A 類ぼかしの「も」となる。また、最大投射 $X^{\max}$ を付加対象とするものは基本的に累加の「も」となるが、「も」をもつ句が TP の指定部に生起されるときは B 類ぼかしの「も」、ForceP の指定部に生起されるときは C 類ぼかしの「も」となり、それぞれ文末表現の[+FOCUS/+LINK]素性と指定部・主要部の一致が生じる。また、否定呼応表現は、「誰」、「何」といった不定語と併合し、[Q]素性が照合された後、「も」をもつ句が NegP の階層で[+FOCUS]素性の照合を受け、「誰も／何も」としてはたらくと説明される。以上の議

⁵³ Watanabe (2002) においても、古典日本語の「か」といった係助詞が解釈不可能な焦点素性 (-Interpretable Focus Feature) を持っていたことを指摘しているが、現代日本語においても、焦点素性が何らかの形で残っていると考えるのも不思議ではない。現代日本語における「も」の焦点素性と古典日本語のもつ焦点素性との関連性については、今後さらなる観察を通して検討していきたい。

論を以下の図 33 にまとめる。

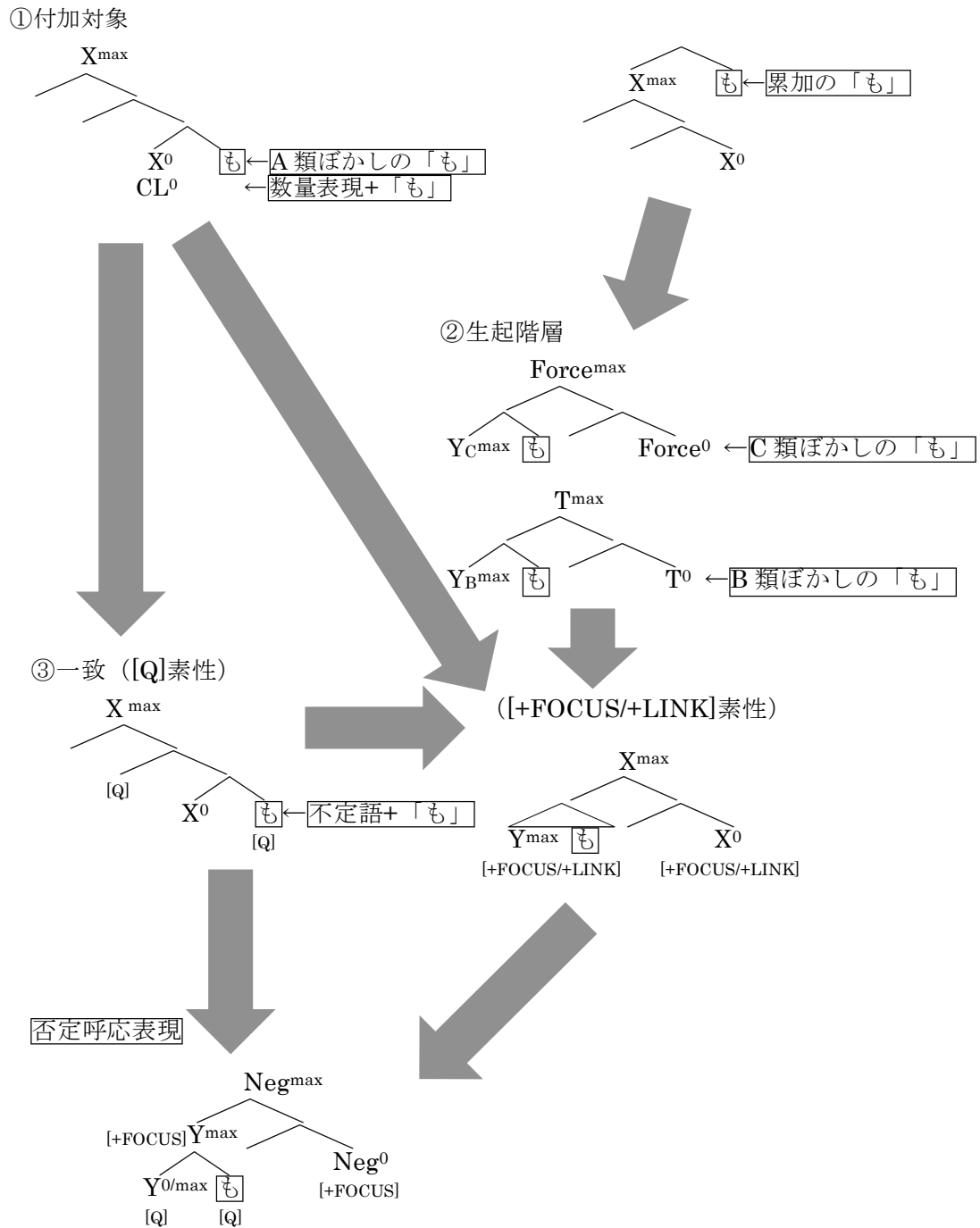


図 33 「も」の派生

8.2. 今後の展望

このように、「も」は、付加対象と生起する階層によって、作用域の及び方が異なり、焦点の拡張の違いが、日本語学における用法の違いとして記述されてきたと考えられる。以上の主張から、日本語の助詞がその統語論的性質によって多様に振る舞い、それが記述的用法となって反映されるということを明らかにした。

しかし、不定語にも付加し、否定極性の効果を消すことができる「～でも」や全称表現にも付加可能な「～とも」に関しては、「で」や「と」の本来の意味や統語論的性質を明らかにする必要がある、本稿では明らかにならなかった。今後、以下のような用法を含め、より広い観点から「も」の統語論、意味論、語用論的な特徴を明らかにしたい。

(548) このトイレは誰でも使えます。

(549) 両方ともわたしの頼んだものです。

また、それぞれの「も」の統語論的特徴は、他の要素にも共通するものが多い。焦点の拡張は「だけ」や「さえ」といった他のとりたて詞にも見られ、文末形式との呼応は、連体節の中に生起できない主題の「は」とも共通する現象であると考えられる。今後とりたて詞をより広く観察し、より一般的な体系を明らかにしたい。

本稿では、「も」の統語論的な特徴から「も」の用法が説明されることを示した。現代日本語の「も」に関する考察を通して、多様な用法をもつ要素を統語論的な観点から体系化し直すことで、日本語学における先達の知見が統語論的考察に生かされることが明らかとなった。今後は本研究から、日本語に限らずあらゆる言語の体系化を通して統一的に分析されること、統語計算がなされた要素がどのように意味の表示につながり、また語用論へ送られた要素がどのように計算されるのかについて明らかになることが望まれる。またさらに、本研究における「も」の分析が日本語学、言語学のみならず「も」の使用を苦手とする日本語学習者にも生かされることが望まれる。

参考文献

<日本語参考文献>

- 青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房.
- 青柳宏（2008）「とりたて詞の形態的、統語的、意味的ふるまいについて―係助詞、副助詞という分類の有意性を中心に―」『日本語文法』8(2): 37-53. くろしお出版.
- 青柳宏（2010）「日本語におけるかき混ぜ規則・主題化と情報構造」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究―命題を超えて―』193-225. 開拓社.
- 有田節子（2006）「対話における「文頭の『は（wa）』」の機能について」『日本語用論学会 第8回大会発表論文集 創刊号（2005）』1-8.
- 有田節子（2009）「「裸のハ」についての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』16: 95-107.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 伊藤晃（2001）「接続表現としての「それも」―情報付加のあり方と文法化の可能性―」『立命館文学』568: 947-973.
- 井上和子（2007）「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子(編)『日本語の主文現象―統語構造とモダリティ』227-260. ひつじ書房.
- 井上和子（2011）「モーダルをめぐって」長谷川信子(編)『70年代生成文法再認識―日本語研究の地平―』1-36. 開拓社.
- 岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相―数量詞は数を表すコトバか―』くろしお出版.
- 榎原実香（2015）「とりたて詞「も」の分布に関する考察」『2015年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム紀要』147-152.
- 榎原実香（2016）「とりたて詞「も」の統語論的考察」修士論文, 大阪大学.
- 榎原実香（2017a）「極限のモと普遍数量詞の統語構造」『間谷論集』11: 85-104.
- 榎原実香（2017b）「「も」の解釈への統語論的アプローチ―累加と全称を中心に―」『日本言語学会第155回大会予稿集』276-281.
- 榎原実香（2017c）「その周辺の用法の再分類―文の階層構造ととりたての観点から―」『日本語文法学会第18回大会発表予稿集』270-277.
- 榎原実香（2018a）「ぼかしの「も」の呼応について」『間谷論集』12: 187-198.

- 榎原実香（2018b）「「も」の周縁的用法の累加性について」『言語文化共同研究プロジェクト 2017 自然言語への理論的アプローチ』11-20.
- 榎原実香（2018c）「文の階層構造からみたもの周縁的用法の分類」『日本語文法』18(2): 110-126. くろしお出版.
- 遠藤喜雄（2009）「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』136: 93-119.
- 遠藤喜雄（2010）「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて—』67-94. 開拓社.
- 遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房.
- 大槻文彦（1897）『廣日本文典』大槻文彦.
- 大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店.
- 岡野ひさの（2010）「助詞「も」の周縁的用法はなぜ周縁的なのか—「も」の文の論理的解釈をもとに考える—」『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』10(7): 213-222.
- 岡野ひさの（2014）「他者の暗示方法によるもの分類と特定の他者が想定されないもの」『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』13(4): 1-7.
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店.
- 奥津敬一郎（1986）「序章」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』1-27. 凡人社.
- 尾上圭介（2014）「も¹」日本語文法学会(編)『日本語文法事典』619-622. 大修館書店.
- 片岡喜代子（2007）「Neg を c-統御する不定語+も」『言語研究』131: 77-113.
- 川瀬卓（2011）「叙法副詞「なにも」の成立」『日本語の研究』7(2): 32-47.
- 久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店.
- 小林茂之（2009）「日本語否定一致表現の文法化について」『学苑』821: 66-75.
- 佐久間鼎（1940）『現代日本語法の研究』厚生閣.
- 定延利之（1995）「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』227-260. くろしお出版.
- 佐野まさき（2009）「完全移動と部分移動—とりたて詞からの事例研究—」『立命館言語文化研究』21(2): 191-216.
- 佐野まさき（2010）「とりたて詞の多重生起と併合関係」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて—』151-192. 開拓社.
- 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版.

- 高見健一（1998）「情報構造と伝達機能—省略、後置文、数量詞遊離—」神尾昭雄・高見健一『談話と情報構造』日英語比較選書 2: 113-203. 研究社出版.
- 田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5): 37-48. 明治書院.
- タップティム, ナッティラー（2009）『日本語の主題の位置付けについて—形容詞文を中心に—』博士論文, 大阪大学.
- 田野村忠温（1991）「「も」の一用法についての覚書—「君もしつこいな」という言い方の位置付け—」『日本語学』10(9): 80-86. 明治書院.
- 寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味(3) —取立て助詞について—」『文芸言語研究言語篇』6: 53-67.
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 中尾有岐（2008）「並列事態が想定しにくいモについて」『日本語文法』8(1): 36-52. くろしお出版.
- 中西公子（2010）「数詞とりたての「も」と否定」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美(編)『否定と言語理論』260-284. 開拓社.
- 中西久実子（2012）『現代日本語のとりたて助詞と習得』ひつじ書房.
- 中村浩一郎（2011）「トピックと焦点—「は」と「かき混ぜ要素」の構造と意味機能—」長谷川信子(編)『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』207-229. 開拓社.
- 中村捷・金子義明・菊地朗（2001）『生成文法の新展開—ミニマリスト・プログラム—』研究社.
- 那須紀夫（2012）「助詞残留が起こる文頭の位置について」『CLAVEL』2: 1-12.
- 仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』1-56. くろしお出版.
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会(編)（2003）『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編)（2009）『現代日本語文法 5 第9部 とりたて・第10部 主題』くろしお出版.
- 沼田善子（1984）「とりたて詞の意味と文法—モ、ダケ、サエを例として—」『日本語学』3(4): 79-89. 明治書院.
- 沼田善子（1986）「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』105-225. 凡人社.

- 沼田善子（1989）「とりたて詞とムード」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』159-192. くろしお出版.
- 沼田善子（2008）「とりたて詞の分布と意味をめぐって―「も」と「だけ」の記述を例に―」日本語文法学会(編)『日本語文法』8(2): 20-36. くろしお出版.
- 沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- 沼田善子・徐建敏（1995）「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』175-207. くろしお出版.
- 野田尚史（1995）「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』1-35. くろしお出版.
- 長谷川信子（1994）「「も」と否定辞と論理形式」『月刊言語』23(2): 116-119. 大修館書店.
- 長谷川信子(編)（2007）『日本語の主文現象―統語構造とモダリティ―』ひつじ書房.
- 長谷川信子（2010）「文の機能と統語構造―日本語統語研究からの貢献―」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究―命題を超えて―』1-30. 開拓社.
- 長谷川信子（2012）「現代版「係り結び」としてのト条件節構文―CP 構造における従属節と主節の呼応―」『日本語文法』12(2): 24-42. くろしお出版.
- 原口庄輔・中村捷(編)（1992）『チョムスキー理論辞典』研究社出版.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明(編)（2016）『増補版 チョムスキー理論辞典』研究社.
- 半藤英明（2007）「「取り立て」を考える」『熊本県立大学文学部紀要』13: 1-14.
- 藤平愛美（2015）「日本語の「ハ」句の分析―カートグラフィーの観点から―」修士論文, 大阪大学.
- 藤巻一真（2011）「副詞のかき混ぜと焦点解釈」長谷川信子(編)『70 年代生成文法再認識―日本語研究の地平―』61-84. 開拓社.
- 舩城俊太郎（1987）「係結び」山口明穂(編)『国文法講座』3: 278-306. 明治書院.
- 前田直子（1993）「逆接条件文「～テモ」をめぐって」益岡隆志(編)『日本語の条件表現』149-167. くろしお出版.
- 前田雅子（2013）「日本語における Derivational Feature-Based Relativized Minimality」遠藤喜雄(編)『世界に向けた日本語研究』163-184. 開拓社.
- 益岡隆志（1990）「取り立ての焦点」『日本語学』9(5): 4-15. 明治書院.
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版.

- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編) (1995) 『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版.
- 松下大三郎 (1977) 『増補校訂標準日本口語法』 勉誠社.
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い—日本文法入門』 くろしお出版.
- 三井正孝 (2001) 「モノ〈提題〉性：現代日本語の場合」 『日本語と日本文学』 32: 65-79.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造 生成文法理論とその応用』 松柏社.
- 三原健一 (2012) 「活用形から見る日本語の条件節」 三原健一・仁田義雄(編) 『活用論の前线』 115-151. くろしお出版.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』 ひつじ書房.
- 三原健一 (2018) 「コラボレーション発話行為文としての「裸のハ」構文」 『京都ノートルダム女子大学研究紀要』 48: 87-96.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその応用』 松柏社.
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 三省堂.
- 山田潔 (2005) 「抄物における「も」の反戻用法」 『國語國文』 74(1): 15-32.
- 山田潔 (2006) 「反戻の助詞「も」とその派生方法」 『國語國文』 75(2): 34-52.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館.
- 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』 宝文館.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法學概論』 宝文館.
- 山西正子 (1987) 「「だれも」考」 『國語と國文學』 64(7): 47-66.

<英文参考文献>

- Abbott, Barbara (1996) Doing without a partitive constraint. In: Jacob Hoeksema (ed.) *Partitives: Studies on the Syntax and Semantics of Partitive and Related Constructions*, 25-56. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Beck, Sigrid and Shin-Sook Kim (1997) On wh- and operator scope in Korean. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 339-384.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels,

- and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2004) Beyond explanatory adequacy. In: Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures 3*: 104-131. New York: Oxford University Press.
- É. Kiss, Katalin (1998) Identificational focus versus information focus. *Language* 74: 245-273.
- Endo, Yoshio (2007) *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Fitzpatrick, Justin (2006) *The Syntactic and Semantic Roots of Floating Quantification*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hamblin, C.L. (1973) Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10: 41-53.
- Heim, Irene R. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Hiraiwa, Ken (2001) Multiple agree and the defective intervention constraint in Japanese. In: Ora Matushansky et al. (eds.) *Proceedings of the HUMIT 2000*, MIT Working Papers in Linguistics 40: 67-80. Cambridge, MA: MIT.
- Hiraiwa, Ken (2005a) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hiraiwa, Ken (2005b) Indeterminate-agreement: Some consequences for the Case system. In: Ken Hiraiwa and Joseph Sabbagh (eds.) *Minimalist Approaches to Clause Structure*, MIT Working Papers in Linguistics 50: 93-128. Cambridge, MA: MIT.
- Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Doctoral dissertation, MIT.
- Ikawa, Hajime (2013) What the ineligibility of wh-phrases for argument ellipsis tells us: On the inertness of phonetically null elements. In: Online *Proceedings of GLOW in Asia IX*.
- Kato, Yasuhiko (1985) Negative sentences in Japanese. *Sophia Linguistica* 19.

- Kishimoto, Hideki (2001) Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597-633.
- Kobuchi-Philip, Mana (2009) Japanese *mo*: universal, additive, and NPI. *Journal of Cognitive Science* 10: 173-194.
- Kobuchi-Philip, Mana (2010) Indeterminate numeral quantifiers, ‘some’ and ‘many’ readings, and questions in Japanese. *Korean Journal of Linguistics* 35: 503-530.
- Kuroda, S.-Y. (1965 [1979]) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1979.
- May, Robert (1977 [1991]) *The Grammar of Quantification*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1991.
- Nakanishi, Kimiko (2008) The syntax and semantics of floating numeral quantifiers. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 287-319. Oxford: Oxford University Press.
- Nasu, Norio (2012) Topic particle stranding and the structure of CP. In: Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 205-228. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Nishiyama, Kunio (1999) Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183-222.
- Ochi, Masao (2012) Universal numeric quantifiers in Japanese. *Iberia* 4(2): 40-77.
- Oku, Satoshi (1998) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.
- Otsu, Yukio (1994) Early acquisition of scrambling in Japanese. In: Teun Hoekstra and Bonnie D. Schwartz (eds.) *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, 253-264. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Pesetsky, David (1987) Wh-in-situ: Movement and unselective binding. In: Eric J. Reuland and Alice G. B. ter Meulen (eds.) *The Representation of (In) definiteness*, 98-129. Cambridge, MA: MIT Press.

- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281-337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Rizzi, Luigi (2004) Locality and left periphery. In: Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures 3*: 223-251. Oxford: Oxford University Press.
- Rooth, Mats (1985) *Association with Focus*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru (2007) Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203-227.
- Sakamoto, Yuta and Hiroaki Saito (2018) Overtly stranded but covertly not. In: Wm. G. Bennett, Lindsay Hracs, and Dennis Ryan Storoshenko (eds.) *Proceedings of the 35th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 349-356. Somerville, MA: Cascadia Proceedings Project.
- Sato, Yosuke (2012) Particle-stranding ellipsis in Japanese, phase theory, and the privilege of the root. *Linguistic Inquiry* 43: 495-504.
- Sato, Yosuke and Jason Ginsburg (2007) A new type of nominal ellipsis in Japanese. In: Yoichi Miyamoto and Masao Ochi (eds.) *Formal Approaches to Japanese Linguistics: Proceedings of FAJL 4*, 197-204.
- Sato, Yosuke and Masako Maeda (in press) Particle stranding ellipsis involves PF-deletion. *Natural Language & Linguistic Theory*.
- Shimoyama, Junko (2006) Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics* 14: 139-173.
- Shudo, Sachiko (2002) *Presupposition and Discourse Functions of the Japanese Particle Mo*. New York & London: Routledge.
- Sugisaki, Koji (2011) A constraint on argument ellipsis in child Japanese. *Nanzan Linguistics* 7: 63-76.
- Takahashi, Daiko (2002) Determiner raising and scope shift. *Linguistic Inquiry* 33: 575-615.
- Tomioka, Satoshi (2007) Intervention effects in focus: From a Japanese point of view. In: Shinichiro Ishihara, Svetlana Petrova, and Anne Schwarz (eds.) *Working Papers of the SFB 632*,

- Interdisciplinary Studies on Information Structure (ISIS)* 9: 97-118. Potsdam: Universität Potsdam.
- Tsai, Wei-Tien (1994) *On Economizing the Theory of A-Bar Dependencies*. Doctoral dissertation, MIT.
- Uriagereka, Juan (1999) Multiple spell-out. In: Samuel David Epstein and Norbert Hornstein (eds.) *Working Minimalism*, 251-282. Cambridge, MA: MIT Press.
- Uriagereka, Juan (2012) *Spell-Out and the Minimalist Program*. New York: Oxford University Press.
- Vallduví, Enric (1992) *The Informational Component*. New York: Garland.
- Vallduví, Enric (1995) Structural properties of information packaging in Catalan. In: Katalin É. Kiss (ed.) *Discourse Configurational Languages*, 122-152. New York: Oxford University Press.
- Watanabe, Akira (2002) Loss of overt wh-movement in old Japanese. In: David W. Lightfoot (ed.) *Syntactic Effects of Morphological Change*, 179-195. New York: Oxford University Press.
- Watanabe, Akira (2004) The genesis of negative concord: Syntax and morphology of negative doubling. *Linguistic Inquiry* 35: 559-612.
- Watanabe, Akira (2008) The structure of DP. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 513-540. Oxford: Oxford University Press.
- Yatsushiro, Kazuko (2001) The distribution of mo and ka and its implications. In: *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 3: 181-198.

<使用コーパス>

- 国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス : I-JAS』 <http://lsaj.ninjal.ac.jp/?ca> t=3 [2018 年 11 月アクセス]
- 国立国語研究所『日本語歴史コーパス : CHJ』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> [2018 年 11 月アクセス]
- 「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」 科研グループ『日本語学習者作文コーパス』 <http://sakubun.jpn.org> [2018 年 11 月アクセス]
- 寺村秀夫 (1990[2011])『外国人学習者の日本語誤用例集』データベース版 (2011) <http://teramuradb.ninjal.ac.jp/db/> [2018 年 11 月アクセス]